

蚊  
頭  
羅  
岐





# 目次

## 亂序

破琉哥亂序 . . . . .	3
哥豆波亂序 . . . . .	16
比哥琉亂序 . . . . .	23
哥豆麻亂序 . . . . .	49
那岐紗亂序 . . . . .	78
哥豆波亂序 . . . . .	87
多毗登亂序 . . . . .	111
迦豆囉兒亂序 . . . . .	120

## 破

蚊頭羅岐破 . . . . .	147
-----------------	-----

## 蚊頭羅岐

蚊頭囉岐 . . . . .	173
雪舞散 . . . . .	175
奧書 . . . . .	180



亂序



## 破琉笥亂序

かク聞きゝ比登らノ古與美貳仟拾六年蚊頭囉岐ノ且ツは加我ノ且つハ古布ノ登璃伎與及び斗喇摩沙ふたり俱なりテ臆而十四にナルその二月爾に爛れ瀛ミ薰る登璃伎與その腫瘍彌肥えさせ左丹ツ羅ふ斗璃摩娑たゞひとすぢにも綺羅らしく匂ひ立ちたり故レ比登の女ら且ツは比登の男らアまた斗利麻紗に戀ひたりき爾に女あり女齡十九なりき名を蚊斗宇ノ破琉那ト曰ふ島ノ女なりき斗璃摩沙知らず知らずにその髪をシ髻らすまゝ破琉那ひとり斗璃摩沙に戀ヒ焦がれたりき爾に破琉那ひとりシテ神社わきの海に遊じたりき斗璃麻娑同ジくに海にありき友ラふたりと俱なり故レ女斗璃摩娑を見出シたれば笥摩米飛びかひ爾に破琉那ひとり娑娑彌氣囉玖

鳥の羽搏く音を聞く

頬さえも

その夜

唇さえも

浅い夢の内にも

脛さえも

醒めかけの

もはやすべてが熱を囁んだ

その脛のわずかな痙攣にさえも

戀として？

畢てはじめた夜の空に

あるいはむしろ

それは何の？

ひたすらに冴えた憎しみさえにも似て

例えば鳩の？

咬みつく

浅い夢の畢てはじめた色のうちに

痛み

例えば白鷺

噎せ返る胸は

羽搏く一度の短い音を

痛む

わたしは聞いた

齒型を  
むしろ心の右上のほうに  
甘い味としてたゞ  
かくて斗璃摩娑  
やわらく咀嚼した  
爾に海邊に雲ノ間に光さして  
飽きず何度も  
都儂耶氣良玖  
女がいた。  
かつて。  
加藤春奈という名の女。  
俺の辛うじて人だった頃に。  
女。  
だから女がいる。  
ふりかえれば。  
岸邊の上に。  
加藤春奈という名の女。  
ひとりで昏い鬩りにひとりだけ咬みつかれたような。  
女。  
その目の色。  
だから見た。  
その目を。  
俺はあえて春奈を振り返らないで。  
その目を。  
その眼差しの中に俺だけを見つめた。  
遠くから。  
まるで近くにいるかのように。  
敢えて俺に気付かれないように。  
だから感じる。  
春奈を。  
近くにも。  
遠い岸邊に捨て置いた儘。  
だから見ていた。  
春奈は。  
息を潜めて。  
俺を。  
その十九歳の女。  
本土の大學にも行かずに時間をつぶした。  
仕事もせずに暇だけを食った。  
もてあます自分の倦怠ごとに。



波が響いた。  
足元に。  
春奈のまばたきを知っていた。  
背後に。  
砂浜と陸の切れ目に。  
石垣の上に。  
俺と和葉はささやく。  
砂浜と波の切れ目に。  
何を？  
忘れた。  
俺と獺馬が笑った。  
波と砂浜の切れ目に。  
波の中に。  
何故？  
忘れた。  
見た。  
春奈は。  
彼女だけのその眼差しに。  
自分に無理に信じ込ませようとしたようにも。  
偽りを。  
例えば俺がその目の前に存在していないと？  
見た。  
その空の下に。  
俺だけを？  
見なかったふりをして。  
見えもしなかったふりをして。  
潮騒のしずかな遠い響き。  
四維に鳴るそのひびきの中に。  
すでにまとも生きることをやめていた。  
春奈は。  
十三歳の時から。  
彼女はまともではなかったから。  
彼女はそう知っていたから。  
知っていた。  
俺は。  
春奈は見なした。  
自分を。  
誰も手のひらこぼれ墜ちた失敗作、と。  
すでに。  
誰の言うことも聞かなかった。

周囲にむらがるその眼差しの中で。  
彼女がもうすぐ本当の自分に戻る違いないと勝手に信じ込まれたその眼差しの中で。  
彼女はすでに取り返しようもなく壊れていた。  
彼女はそう知っていたから。  
知っていた。  
俺は。  
だから十三歳の時から学校には行かなかった。  
春奈は。  
或は行けなかった。  
春奈は。  
なぜ？  
何かに抗ったわけではなかった。  
何かを恐怖したわけではなかった。  
何かを赦せなかったわけではなかった。  
生まれて来なければよかったと思った。  
春奈は。  
生きていける筈もないのなら。  
誰もが理由を求めたその眼差しの群れの容赦なさに春奈はひとり怯えた。  
彼等の眼差しに取り囲まれた中に。  
教師の女のほうが云った。  
——大丈夫、と。  
何が？  
と。  
春奈は見つめた。  
諫めるように。  
自分を見つめたその目の黒い無機物の色。  
その先に開いているにい違いのない昏いだけの孔。  
教師が云った。  
——だから、ちょっとだけ教えて、と。  
何を。  
と。  
春奈は見つめた。  
憐れむように。  
思う、あなたはもう答えなど知っている。  
いつでもあなたは告白を命じてただ確認するように聞く。  
そのすでに知っていた事実をだけを。  
——どうして？  
と。  
——どうしてかな？  
と。

——どうして、吐いちゃう？

と。

——毎朝、…

と。

——なんで？

と。

教師は云った。

みんなでもう話し合ったよ、と。だから

なにも心配なんかもうないんだよ、と。だから

あなたはもう自分にやさしくしてもいいんだよ、と。だから

いままでいっぱい疵ついちゃったね、と。だから

もう傷つかなくていいんだよって、と。だから

あなたは自分にそう言ってあげてもいいんだよ、と。だから

みんなでたくさん話あったよ、と。だから。

誰もあなたをもう傷つけない。

——どうして理由が必要なの？

と。

春奈は言わなかった。

その心にだけ囁き乍ら。

——どうしてわたしがいなくなっちゃ駄目なの？

と。

春奈は言わなかった。

その心にだけ呟き乍ら。

——答えられないならむしろ黙ってくれますか？

と。

春奈は言わなかった。

その傍らに母親に縋って泣きじゃくっていたから。

教師をさえも涙に巻き込んで。

島でひとりでに十九歳になった。

だから春奈はわたしに戀した。

その年の冬に春奈は見た。

海が朝白濁するのを。

日曜日の九時。

雲を巻き込む。

空は。

いっばいに散らす。

空は。

分厚くかさねた。

空は。

だから群青を兆しながらすでに白く。

だから錆びて白く。  
だから鈍く白く。  
白濁の海の寄せた波しぶきは際立って白く。  
曇りの空に流された黒濁の雲も終には白く。  
白い海と空に霧れながらもたゞ綺羅めいた海を。  
空。  
海を。  
見た。  
空と霧とに境界をなくした、それでも終には混ざり合わない海を。  
空。  
見た。  
同じときに。、  
同じ眼差しに。

かくて波琉那岸邊にありテ耳に厥レ登璃麻裘が聲ノ嗤ひたるを遠ク聞けバひとり袈裟夜  
氣羅玖

こわさないでね  
見てたよ  
もうこれ以上  
あなたの笑った時に  
もうすべて  
ふりそそぐ色  
こわれてしまった  
雲の切れ目に  
こわせないよね？  
君はひとりでしあわせだった  
こうこれ以上  
だから願った  
もうすべて  
君の幸せを  
こわれてしまった  
ぼくはひとりで  
誰も毀しはしなかった  
見てたよ  
誰もその指に  
雲の切れ目に  
ふれないまゝに  
落ちたひかりは  
こわれなくてね  
遠くの海に  
もうこれ以上

君の背中を  
もうすべて  
照らしていたね  
かくて波琉那  
こわれてしまった  
爾に都舞耶氣良玖  
君だけが笑っていた。  
この大きな世界の中で。  
海の近くに。  
だからぼくは見た。  
のみこまれてしまいそうな大きさの中で。  
君だけが笑っていたのを。  
のみこまれてしまいそうに小さく。  
君の爲にすこしだけ笑った。  
ぼくは。  
決して君に気付かれないように。  
たゞ波の音を聞きながら。  
だから見えていた。  
ぼくの眼には。  
まるで波などないかのよう。  
まるで波打ちなどしなかったように。  
波のカタチを留まらせて。  
波のカタチに留まり続けて。  
時さえ止まっていたように。  
波のカタチを遠くに見せて。  
遠浅の海。  
それでもその色を点滅させるのだった。  
波の煌めき。  
波打ちの色。  
留まらない綺羅の明滅。

かくて斗璃摩娑俱なひたる志我ノ罅豆麻に笑ミテ砂浜が上に浪ノ音ヲ聽ク故レ罅豆麻ひとり笑ミたりき且ツは斗璃摩娑俱なひたる阿迦井ノ迦豆波に笑ミテ白沙が上に浪の音ヲ聽ク故レ斗伎比古ひとり笑みたりき故レ迦豆波ひとり斗璃摩娑にさゝけらく——熱は？ト是レ斗璃摩娑常の如こノ日にも發シたる熱高くいまダ冷めざりテ故レその白き顔ほのあからませ且ツはその白き目ほのあからませたる故なりき故レ斗璃摩娑爾に迦豆麻ガ耳にさゝやけらく——熱？と故レ迦豆麻笑みテ斗璃摩娑が爲にさゝけらく——學校、休んだんだろ？昨日…熱、大丈夫？と故レ斗璃摩娑笑ミテ迦豆波が耳にさゝやけらく——すこしだけ…すこしだけトかくて息ヲ纔かに吸ヒ込みてさゝやけらく——すこしト故レみたり俱なりテ娑娑彌氣囉玖

痛い

寝てれば？  
呼んだのは  
時々  
ひとりで  
お前を  
いまも  
自分の部屋で？  
俺がこゝに呼んだのは  
熱い  
お母さんの部屋で？  
なぜ？  
頭が  
あの病院の  
逢いたいと思ったわけじゃなかった  
割れそうなほどに  
寝てれば？  
かならずしも  
喉さえ  
もうすぐ雨が  
熱でふらつくお前を起こして  
乾く  
島にも  
それでもなおも  
今も  
海にも雨が  
逢いたいと思ったわけじゃなかった  
血管さえ  
今見つめられた海にももうすぐ雨は  
俺は呼び出した  
背骨さえ  
寝てれば？  
お前を  
熱がある  
歩く足さえ  
和葉は笑った  
熱が棲む  
立つ足さえ  
阿迦井和葉は耳元で  
熱が咬む  
ふらつきながら

すこしだけ彼は  
そんな気が  
砂が掴んだ  
俺に嫉妬する  
海に来た  
お前の足も  
獨馬は、と  
さそわれるまゝに  
ぼくのを掴んだのと  
つぶやく  
熱が匂う  
同じように  
紫花さんは、と。だから  
口の中にも  
捕え  
なに？  
熱が匂う  
濡らし  
と  
血の味の中にも  
波に濡らして  
俺がさゝやき返した時にはすでに  
海に来た  
波打ち際に  
和葉はすでに俺を見ていた  
さそわれるまゝに  
海に本当の色はない  
かたわらに  
物思いもなく  
見渡せば  
昏いまなざしに  
何の約束もないまゝに  
真っ白い海も  
なげくようにも  
誰の約束もなかったまゝに  
かくて斗璃摩娑  
さそわれるまゝに  
爾に都舞耶氣良玖  
何をするわけでもなかった。  
最初から。

さゝやきあうべき何もなくて。  
すでに。  
俺は彼と彼等のそばに身を近づける。  
代わりばんこに。  
その至近に。  
かわるがわる。  
だから匂う。  
和葉の肌にあわい鹽氣の移り馨を嗅いだ。  
匂う。  
獺馬の肌に彼のひとりで汗ばんだ灼けた匂いを嗅いだ。  
俺は持て余す。  
最初からすでに。  
俺たちの時間を。  
阿迦井和葉と同じように。  
持て余す。  
不意に三人同時にだまりこんだ時間を。  
無防備なまゝに。  
倦む。  
紫花獺馬と同じように。  
砂の白。  
淡い茶色の。  
猶も白。  
知っていた。  
背後に海の白のあるのは。  
見上げれば向こうに。  
和葉と獺馬の肩越しの向こう。  
冬の白い頸の向こうに。  
女がひとり立っていたのは見えた。  
すでに何度も。  
頸の向こう。  
和葉の。  
吐き出された息の陽炎白の向こう。  
獺馬の。  
時には鼻の。  
或は唇。  
しずかな胸に。  
女はひとりで昏い眼に。  
ひとり。  
彼女の爲だけの彼女ひとりの絶望を咬んだ。  
振り返りさえすれば。



知っていた。  
振り返ればそこ。  
背後に海の。  
白。

さざめく白いその綺羅が。

かくて香屠宇ノ波琉那なにヲも語りかけずテ遠きに見きみタリの少年らを見テ茫然とするカにも見テ終に靚取るともなク見て踵返シたれば躬づからの家に向かヒて歩き、破琉那嘗ていちドたりも斗璃摩娑に話シかけたることハなかりき故レ斗璃摩娑一度タリとも破琉那に話シかけたことハなかりき故レふたり一度も語り合フこと無クてわかれき故レ破琉那は斗璃摩娑が名をハ知りたり又斗璃摩娑は破琉那が名だに知らざるを終にソレ此の二月の終わりに破琉那ひとり山の樹木が枝に頸吊りて死にタる時に知りたり是レ大人等の口カラ聞きたる故なりかくて知り知りて忘れき故レ爾に破琉那ひとり家に歸りながラその二月潮騒の音の背後に鳴るを聞けば娑娑彌氣囉玖

馨を嗅いだ  
突き刺さる  
すでに兆す  
思いの棘が  
春の馨を  
血をながす  
まだどこにも  
喉の奥にだけ  
土の下にも存在しない  
その味を  
冷やむ二月の  
たゞあざやかに

かくて破琉那  
春の馨を  
爾にひとり都舞耶氣良玖

登った。  
その山道を。  
見た。  
その吐く息の色。  
白。  
だから登った。  
いた。  
その家には。  
母が。  
やさしい母が。  
料理の下手な。  
あまりにも代わり映えしないあたりまえの母が。

そしてあまりにも固有の匂いのある彼女が。  
どうしようもなくわたしだけのその母が。  
入った。  
だからその家の戸を。  
言った。  
台所を通りすぎかけた時に。  
母は。  
あれ?…と。  
たゞ無邪気に。  
もう帰ったの?  
と。  
わたしの見たものをあなたが見るのは知っている。  
わたしが死んだ二月二十七日に。  
母はひとりで、そして見た。  
彼女も。  
涙さえをこぼし得なかった眼差しに。  
あれ?…と。  
いまだに娘が死ぬことさえを知らない母は。  
母がさゝやく。  
わたしにその笑んだ姿を振り返り見させながら。  
もうすぐ自死することを知らない素直な娘に。  
その自然なほゝ笑みに。  
どうしたの?  
と。  
母はさゝやいた。  
泣いた?  
あなた。  
泣いたの?  
と。…とまどいもなく。  
初めて聞く異国人の言語を聞くようにしかその言葉を聞き取れないでいた春奈は。  
わたし?  
さゝやいた。  
わたしは。  
泣いた?  
さゝやいた。  
母は。  
目が真っ赤…と、そして彼女はさゝやく。  
寒いからね。  
独り語散るように。  
いつもより寒いから…と。

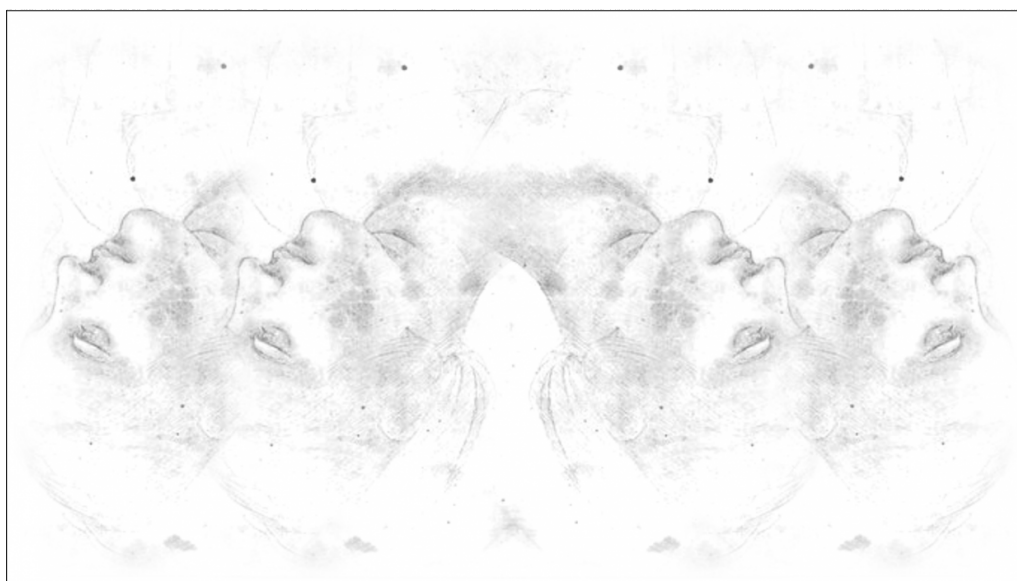
その女。

優菜という名の女のさゝやいた聲をわたしは自分の耳に聞いていた。

破琉罅亂序蚊頭囉岐第三

啞ン癡 anti 鳴溜我貳翠夢 organism II

2021・01・12 黎マ



## 娸豆波亂序

かく聞きゝ男ありき名ヲ阿迦井ノ迦豆波と曰フ時は比登らが古與美ノ貳仟什伍年なりき故レ登璃伎與且ツは斗喇摩沙且ツは迦豆波が齡すデに拾參ノ年を數へき三たり俱なりて宮島にアリき時に登喇伎與そノ躬に流血とめどもなくて腫瘍の肉ノ膨張する儘に肥大しつゝありき故レ宮島ナル祇樹古藤記念園に隔離されテありき爾に斗璃摩娸ひとり迦豆波と俱なりテ海邊に歩けバ頭上に鳥等飛び交ヒてその音とよミき是レ娸万米なりき又比賣宇なりき又宇美宇なりき又阿保宇騰璃ナリき季は夏にシてその八月にふたり通ひたる中學校はずデに休みき故レ朝の八時過ぎに迦豆波ひとり斗璃摩娸と俱なりて鳥等羽音さス下に歩きゝ空晴れたり故レ空青クして故レ海青くしかすがすがに立ツ波の飛沫ことごとくにたダ白き故レ迦豆波爾に娸娸彌氣囉玖

羽搏きの下にも  
匂った  
それ  
汐の  
潮騒の音は  
鳥雅の肌の  
羽搏きの群がる下にも  
髪の匂いも  
その  
無造作にも  
打つ波の音は  
無残な迄にも  
かくて斗璃摩娸  
哀しい程にも  
爾に都舞耶氣良玖  
知っていた。  
阿迦井和葉の思いは。  
わたしに焦がれた思いには。  
わたしは？  
知っていた。  
日の光の下にも。  
木漏れの光の斑の厥れ。

あるいは木漏れの影の斑の下にも。  
浪の音の左手にも。  
砂の上にも。  
あるいは傾く日の光の紅の色に照らされながらも。  
嗅ぐ。  
掠め取るようにも。  
躰の匂いを  
見つめた。  
その横顔さえも。  
思った。  
かたわらに息遣う性欲に塗れた息物の息遣いを。  
あるいはたゞ戀に悲しむ心の息吹きを。  
はじらい乍ら咬みつく。  
躬づからを輕蔑しながら。  
精神と肉體がお互いに己にはじらいさえもなく。  
かくて斗璃麻娑耳打ちシて寄豆波に娑娑彌氣囉玖  
知らなきや  
なぜ？  
お前は  
それはなぜ知られていたのだろうか？  
知らなきや  
あなたに  
知りたいもの  
あるいはわたしにも  
お前の  
してはならないことなのだと  
知らなきやと思うもの  
なぜ？  
知らなきや  
わたしたちは知っていたのだろうか？  
お前は  
それを  
それでもなおも  
赦してはならないものだと？  
知らなきや  
何もかもが無罪だったわけではなかった  
お前は  
何もかもが無垢だったわけではなかった  
かくて斗璃麻娑  
何かが罪だとそれでもなおも

爾に笮豆波と俱なりて

示されなければ

娑娑彌氣囉玖

ふれる

欲しいの？

その唇に

あなたはそこで

指先で

俺を敢えて誘惑しながら

ふれる

顯らかに誘惑して

指先だけで？

そして自分だけが見つめられているかのように俺を見つめながら

その息物の皮膚に

ほしいの？

塗れる

なにを？

性欲に倦んだ息物の唇

やがて吐き出された乳色の

その息にも

匂い立つ臭気の中に

その濕氣

むしろ屈辱をだけ感じながらも？

吐く息の

嘔みつくような

その霑いにも

恥辱にだけに

かくて斗璃麻娑

塗れながらも？

爾に都舞耶氣良玖

誘惑し合う。

ぼくたちは鳥の羽音の下に。

さゞ波のひゞく音響のこちらに。

それらふたつにわずかに離れて。

ふれ合う至近にお互いの肌の温度を感じた。

発熱する息物。

侮辱し合う。

知っていた。

ぼく達はすでにお互いをなじりしあった。

際限もない程に。

知っていた。  
その匂い。  
阿迦井和葉のその先端のこぼす乳白色の。  
真っ白ではない色の真っ白ではない白い集合。  
そのねばつきも。  
ふれた。  
イノチなす波紋をどこにも拡げずに。  
人の肌の上だけに。  
掬った。  
指先に。  
なぜるように。  
彼の部屋の中でも。  
わたしの部屋の中でも。  
舌に感じた。  
指先にぬれたすでに透明の液体を嘗めて。  
聲を立てた笑い声。  
舌は感じた。  
ただ苦く渋い不快な味覚を。  
わたしの舌は。  
和葉の舌は。  
なぶりものにされた哺乳類のかたちを思う。  
僕たちはだから自分たちの哺乳類を浪費した。  
僕たちはだから自分たちの哺乳類を濫費した。  
僕たちはだから自分たちの哺乳類を侮辱した。  
精神の愛？  
自分たちの哺乳類に侮辱されながら。  
心の愛？  
愚弄されながら。  
肉に寄生して。  
屈辱をし与えられながら。  
肉に寄生して肉を嘲弄し焼き盡す。  
僕たちは廃棄さるべき奇形の出来損ないに過ぎなかった。  
僕たちは哺乳類でさえなかったから。  
僕たちは知っていた。  
かさなりあう肌は終に心を重ねあわせはしなかった。  
心はすでに引き裂かれて。  
遠くすでに引き裂かれて。  
かさなり合おうとする心はまさにその時に。  
心はどこまでも引き裂かれて。  
ひたすらに遠く引き裂かれて。

ぼくたちは只屈辱だけを知った。  
たぶん僕たちは破壊者だった。  
例えば焔の劔を持った美しい神話の破壊者ではなくて。  
例えば無数の蛇を従えた美しい幻の破壊者ではなくて。  
或は讎に等しい破壊者に過ぎなかった。  
僕たちは繁殖する。  
自分の哺乳類の繁殖を亡ぼしながら。  
僕たちは何をも生み出さなかった。  
だから僕たちはあるいは純粹に破壊者だった。

かくテ斗璃摩娑浪の中に足ノ先をつけたりき故レ波陀志ノ足の先宇美能美豆ノ鹽の匂い  
につれたりき故レ智豆波の耳元に娑娑彌氣囉玖  
海に？  
知っていた  
いまさらに海に？  
生まれたときから  
もうとっくに  
海の色を  
すでになんども  
匂いを  
ぼくたちに飽きられた  
さまざまにも  
海に？  
ぼくたちが  
ぼくたちが倦み果てた  
海の近くに  
海に？  
育ったせいで  
かくて智豆波  
浪のひゞきの  
爾に  
その音響の近くに  
都儼耶氣良玖  
見る。  
目は。  
私の。  
いまさらに。  
擬態。  
いまさらに海を始めて見た少年を擬態して？  
擬態。  
見る。



愛しい人。  
見ていた。  
目は。  
戯れを。  
彼は。  
戯れた。  
ひとり。  
見た。  
目は。  
その目も。  
彼の。  
私の。  
目も。  
戯れを。  
見ていた。  
擬態。  
僕らの擬態は。  
海に初めて入った少年を擬態して。  
見た。  
ふたりの眼は。  
僕たちの戯れ。  
遊ぶ。  
僕たちは。  
聞いた。  
だから。  
さゞ波の音の崩壊。  
僕たちの足元でだけ滅び合う響き。  
かき亂されわなゝき瓦解しさゞ波の音響。  
僕たちはいつでもたゞ破壊者としてのみしか生きない。

苟豆波亂序蚊頭囉岐第三

啞ン癡 anti 鳴瑠我貳翠夢 organism II

2021・01・18 黎マ



## 比叡琉亂序

かく聞きゝ女ありき名を破夜世ノ比叡琉と曰フ時は比登らが古與美ノ貳仟什捌年なりき故レ登璃伎與すでに拾六ノ年を數へき故レ斗唎摩沙すでに拾六ノ年を數へき故レ斗璃摩娑かの美夜士摩はすでに捨てさりきひとり斗宇伎夜宇にありき比叡琉齡二十四なれば叡儼伎町なる風俗店に身を寄せたりき故レ斗璃摩娑ひとり比叡琉が千駄ヶ谷なるマンションの部屋に目覺めて朝の日を厭ひて身を起こす開かれたる儘なるカーテンの傍らに立ちき季は春のおわりにしてすでに櫻の樹木緑りなしき故レそれ六階の北向きに見わたしたる神宮の森緑りなしてひろがりき時は朝の七時を過ぎたりき故レ斗璃摩娑爾に娑娑彌氣囉玖

勇氣はすでになかった  
みなぎる  
生きていく勇氣など  
自分勝手な程にも  
思った  
樹木たち  
せめて雪のようにと  
人々がすべて滅びた後も  
イノチさえ  
むしろそのイノチを貪り  
せめて雪のように解ければ  
食るともなく  
溶けて消えさえするなら  
息づかい綺羅らぐイノチたち  
そして誰にも憐れみさえされる暇もなく  
樹木は繁り  
せめても雪のように  
恥ずかしげもなく  
かくて斗璃摩娑  
せめても  
爾に都儼耶氣良玖  
ベルがなった。  
背後に。

不幸な女？  
頭のわずかな上に。  
鳴った。  
不幸な？  
ベルが。  
その名。  
早瀬耀。  
本名かどうか知らない。  
彼女は知らない。  
自分が不幸であることさえも。  
知らない。  
だれにも不幸な女と知られて。  
開いた。  
踵を返して近づくドアを。  
耀の爲に。  
彼女の部屋のドアを。  
言った。  
耀はいつも。  
必ず閉めて。  
わたしが仕事に出て行ったら。  
必ず閉めて。  
わたしがここを出て行ったら。  
中から鍵を。  
あなたが中に居る時にも。  
この町は危ないから、と。  
耀は云った。  
ドアの外には、と。  
誰がいるかも知れないから、と。  
すでに知っているながら。  
それとなく。  
彼女のいない部屋の中に私が連れ込んだ女の何人もの残した髻がたゞようことは。  
その肌の残した女たちの匂い。  
ときに抜けた髪の毛さえも。  
故意に証拠を残そうと？  
落ちた。  
その気も無く気付かないうちに。  
それらの髪。  
躰の内側の匂いも。  
笑った。  
耀は。

ドアを開けてもらえたその瞬間に。  
だからひとり噎せ返る。  
溢れ返った不安と懊惱を一瞬に掻き消して仕舞った彼女自身の笑顔に。  
耀は。  
——大丈夫だった？  
甲高い、極端にあまえた聲で云った。  
——なにも無かった？  
耀は。  
見た。  
その双渺は。  
てらいもなくて。  
さゝやきつゞける眼差し。  
耳元で。  
大聲で。  
わたしはあなたを愛していると。  
喚き散らしたその最弱音のさゝやき聲。  
眼差しに。  
耀は笑んだ。  
その眼差しに。  
ほんの須臾彼女は見つめた。  
彼女の爲に笑んだ顔を。  
そのわたしの顔を。  
耀はその時限りもない程幸福だった。

比迦琉二週間に一度過呼吸の發作ヲ起こシキ所以者何知らず是レ比迦留ソノひとだにも  
知られず故レ二週間に一度手首ヲ切りキ所以者何知らズ恍惚トシタル眼差シに登喇摩娑  
を見てその眼差シの前に切りキ厥レ決して致命傷にはイたらヌ淺キ傷痕無數にさらした  
る腕になり故レ二日に一度嘔吐せり所以者何知らず吐キ吐イテ吐ク儘に双渺に涙あフレ  
させわなナカスその綺羅らぐを斗璃摩娑見て視やりテ笑ヒキ邪氣も無クに故レふたり爾  
に幸福なりキ厥レ四月の半バのあたタかなるに迦儼伎町にそノ口とそノ蕃登に啞えこみ  
吐キ出さシ浴びたる營み畢りたる朝比笈琉歸りて爾に左丹都羅フ登喇摩娑にシガみつ  
て寢臺に俱なりテ倒レキ故レ斗璃摩娑が肌の馨りを嗅ギキその彌甘やぎたる芳香を且つ  
は斗璃摩娑が髮ノ馨りを嗅ギゝその彌甘やぎたる芳香ヲかくテ床の上花瓶に刺サレたる  
由利ノ花その色ノ白且つはその周圍に霞ナス迦須美草の花その色の白ナナめに触レたる  
光りに綺羅めクも比笈琉ハ見向きもセズテ故レ爾に未だ比登ナルふたつ俱なりテ娑娑彌  
氣囉玖

ふれる

沈黙を

くちびるに

あなたがくれた沈黙を

あなたは

そのくせさらした  
咬みつくように  
微笑を  
わたしを咀嚼し  
壊してしまうわたしを恐れた  
だいなしにし  
いつでもつねに  
手のほどこしようもなく  
わたしは怯える  
なすゝべもないほどに  
わたし自身に  
ふれる  
壊して仕舞うに違いなかった  
くちびるに  
息さえも  
脱いだ肌にも  
吐く息さえも  
垂らす髪にも  
わたしの肌に  
齧みつくように  
ふれる息さえ  
わたしを咀嚼し  
あなたを壊してしまう気がした  
貪るようにも  
せめて幸福を望んだと？  
そしてわずかに  
まさか  
顯らかに  
私は願った  
怯えながら  
むしろ  
慄きながら  
いますぐに  
かくて斗璃摩娑  
わたしが壊れてしまうことこそ  
爾に  
消え去ってしまうことこそ  
都儂耶氣良玖  
唇が。  
なぞった。

舌が。  
乳首のかたちを確認するように。  
残された匂い。  
肌に。  
唾液の匂い。  
残されてそして忘れさられた温度。  
あなたは嗅ぎさえもしなかった。  
あなたがいない間にもそれ。  
部屋の中に。  
匂い立ち続けた部屋の白百合の。  
香る。  
霞草の。  
色だけが薫る。  
鼻をつかづけてさえも。  
鼻にかおりなどさらさない儘に。  
白く烟り立ち

かく聞きゝ比迦留が父親すでに失せにき是レ比迦留六歳の時にはその母とも俱にも比哥  
琉を捨てたるが故なりき故レその比登の生死比哥琉は知らざりき且つはその母すでに失  
せにき是レ比哥琉十六ノ時にはその母を捨てたるが故なりき故レ比哥琉爾にひとり娑娑  
彌氣囉玖

必然性などない  
ひかりのうちにも  
だれかの子供でなければならない  
知ってる？  
その必然など  
樹木はその葉で息をする  
親のあるべき  
ひかりのうちにも  
理由などない  
知ってる？  
例えばわたしは  
どしゃぶりの雨の中にさえ  
例えばアメーバのように  
真っ白い  
自分を引き裂き  
雪降る晝も  
わたしは生まれた  
その朝にさえも  
例えばわたしはアメーバのように  
樹木はその葉で息をする

或は原始のあたゝかな雨の中に  
知ってる？  
硫黄の雨の中にさえも  
樹木の蔭に  
メタンの薫った雨のうちにさえ  
ゆれる葉の  
自分を引き裂き  
枝の影にも  
わたしは生まれた  
蝶は震えた  
ひとりで生まれた  
その翅  
かくて比迦流  
粉撒きながらも  
爾に都舞耶氣良玖  
あなたに溺れたわけじゃなかった。  
一度だって。  
十歳近くも年下の。  
少年の肌にも。  
匂う肌にも。  
香る髪にも。  
ゆれる心。  
音もなく。  
震える心。  
それにさえも。  
あなたに溺れたわけじゃなかった。  
わたしの醒めた心のまゝに。  
わたしの冴えた心のまゝに。  
わたしは知った。  
愛しながらも。  
その躰を。  
受け止めながら。  
その乳色の雫。  
幼い雫。  
匂う。  
悲しみは醒めた。  
音もなく瞼を開いた朝のひかりにも。  
悲しみは冴えた。  
しずかに咬みつくように。  
肌に。



産毛にさえも。  
前ぶれもなく咬みつき。  
血の雫もなく。  
痛みだけを迸らせて。  
わたしは囁む。  
悲しみを。  
悲しみに咬まれ。  
悲しみを齧む。

五月その一日比喩琉明けにその時暎を開けばカーテンの切れ目朝ノ光りの差シ込むをは知らざる儘見たルは梅の花の色に染まりたる荒れ野なりき地も空もモノのカタチその影だにモことごとく梅の花の色に染まりたりき季を思うに未だ冬の日ならムやといぶかるともなくに無数の鳥が啼き聲耳に響きたりキ故レ暎ひらきたるに鳥等姿なくて梅の花ノ色の荒れ野のみ擴がる故レ思へらく眼差シの後ろに鳥等羽搏けるやと故レ背後にとヨむ鳥らの羽搏きの音を聞き、時にまバたく刹那刹那の暗闇に比喩琉は見え厥レ雪の如降る光ル雫の群れなりき開きたる目は未だ荒レ野風もなくてどこまでも擴がるをのみ見きイキモノの氣配だにもナしまして人の氣配など有りうる筈もなシ刹那刹那の暗闇あざやかに真白の光ル雫に噎せ返りき爾に氣付けらく今まさに躬づからが体軀溶ける雪の如解けはじめ葉に流れる露の如狀ち失ヒて臆而躬づからがカタチ解け流れて失せんトするを見れば荒レ野に甘やぐ芳香のみ馨りたチ且つは白い雫ノ群れに甘やぐ芳香のみ馨りタチその馨り比喩留が未だ一度だに嗅ぎたることなかりき馨りなり故レこころ恠しみ始んとするル背後鳥の羽搏きの向カウに女の笑ふ聲を聞き、爾に比喩琉既く知りたるは厥レ躬づからが喉の立てたる聲に他ならずと故レ比喩琉はじめて躬づからを見たる思ヒを觀じき且つは初めて躬づからが聲を聞きたる思ヒを觀じき且つは始めて躬づからに出会いたるを觀じて返り見ムとせば爾に比喩琉寢臺に枕を見傍らに人ノ頸筋の肌を見キかくテ見て觀たれば厥レ靜かに寢息づく斗璃摩娑が頸なりキ故レ比喩琉思へらくたゞ夢を見キと故レ爾に娑娑彌氣囉玖

その名残りのうちに  
痛んだ  
夢に  
骨が  
名残りなど  
骨の内側が  
残しもしなかった夢の畢  
痛んだ  
その名残りのうちに  
あざやかに  
知っていた  
なぜ？  
すでに  
理由も無く

わたしはあなたの子供を産むことを  
理由など兆しもせずに  
かくて斗璃摩娑  
骨は  
爾に都舞耶氣良玖  
嘔吐するあなたを見た。  
その五月にも。  
あるいはその六月にも。  
おそらくはその七月にも見た筈だった。  
嘔吐するあなたを。  
あるいはいつものように。  
あなたにとって元から食うとは吐くためのたゞの動機に過ぎなかったから。  
高鳴る胸に。  
血が温度をもつ。  
血走る喉に。  
あなたはひとりで嘔吐する。  
何度も見ていた。  
嘔吐するあなたを。  
その五月の夕方。  
店に出かける前に吐く。  
便器から顔を上げた耀は思わず笑んだ。  
なぜ？  
言った。  
耀の口は。  
その胃液の味を咬んだ喉は。  
——できた。  
笑った。  
つぶやくように云って刹那の沈黙のあとに。  
ひとりで。  
あなたは。  
だからあなたはいつでもひとりでいた。  
あなたは終にひとりしかいなかったから。  
故レ比賀琉此ノ時に登喇摩娑と俱なりテ娑娑彌氣囉玖  
感じられない  
墮せと？  
まだイノチなど  
俺が云ったら？  
感じられない  
あなたは泣くだろうか？  
その鼓動など

墮せと？  
不穏な不快が  
俺が云ったら？  
嘔吐  
あなたは泣き叫ぶだろうか？  
喉にも  
あるいは激怒を  
胸にも  
あるいは容赦もなく失望を  
胃にも  
あるいは笑う？  
毛細血管  
氣の狂った人のように  
眼差しにさえも  
わたしのあのひと  
あざやかな不快が  
母のように  
あくまでも異物として  
あなたは聲に嗤うだろうか？  
だから  
花を喰いちらし  
異物はわたしを貪り食った  
だから  
その内側から  
わたしはあなたの爲に笑んだ  
異物はわたしを噛み千切る  
耀はわたしの笑みを見ていた  
飛び散る嘔吐の飛沫にさえも  
あなたの爲にだけほゝ笑む  
感じられない  
聞いた  
まだイノチなど  
耀は  
あるいはこの不快こそがイノチだと？  
耳に  
わたしはイノチの爲に笑った  
わたしの聲を  
聲もなく  
すごい…  
まなざしのうちに

…ね？  
イノチの爲にさゝげよう  
幸せになろうね  
わたしのほゝ笑みを  
かくて比喩琉  
俺たち、その子の爲にも  
爾に  
幸せになろうね  
都御耶氣良玖

生んでくれと云った覚えはなかった。  
いつでも母親の胎を呪った。  
育てゝくれと云った覚えはなかった。  
いつでも母親のすべてを詰った。  
顯らかなこと。  
母とは屈辱それ自体だと。  
母とは侮辱それ自体だと。  
母とは絶望それ自体だと。  
気付けばすべては手遅れだった。  
生まれてあることを抹消する爲には私は自分で死ななければならなかった。  
傷めと？  
苦しめと？  
自分の肉体を繁す苦痛に。  
泣き叫べと？  
わなゝかせなさいと？  
吐けと？  
撒き散らせと？  
血を、汚物を？  
なにもかもを手遅れにして。  
わたしの死を涙しながら痛むに違いなかった。  
母は。  
イノチの尊さあるいはその喪失の尊さに？  
なにもかもを手遅れにして。  
だからわたしは怯え続ける。  
すでにわたしが死なゝければならぬ事に。  
生まれるべきではなかった子。  
すでにわたしが滅ぼさなければならなかったことに。  
あまりにしぶとく頑強なこれ。  
イノチある肉体。  
わたしという組成物を。  
その強靱な営みのすべてを。

恥辱に塗れる。  
哀しい。  
あまりにも。  
無限に悲しい。  
殺せばよかった。  
あなたを。

わたしが生まれるその前に。

かくて六月雨降る中にも比喩琉胎ノうちに胎児をはぐくむかくて六月雨降る中にモ未だ  
比喩琉店ヲも辭メずに肌をさらし男らの吐く体液に濡レき故レ斗璃摩姿ひとり千駄ヶ谷  
なる部屋ノうち雨に白濁するママに烟り雨に濡れてつややぐ儘に烟ル神宮の森の緑りな  
ス樹木の葉ノ群れヲ見き故レ爾に娑娑彌氣囉玖

その影に

白い烟りの舞い上がるように

樹木の影に

白い烟りの停滞するように

葉の影に

霧なす雨の

ときに

つぶら。飛散

葉の落とした雫に濡れた

聞こえていた

無数のちいさな虫たちを

窓のガラスに立つ音の群れ

その杜のうちに息遣う

碎ける雨の

蟲らの吐いた息を思った

ちいさいその

かくて比喩琉

あざやかな全崩壊の瞬間

口にくわえるときにも或は

それら無数。つぶら

爾に都舞耶氣良玖

云った。

わたしは。

さゝやき聲で。

——ね？

と。

言った。

鳥雅は。

さゝやき聲で。

——ん？  
と。  
いつかの晝の。  
いつかの朝にも  
ベッドの上でも。  
その無数の時に。  
その素肌にわたしを暖め。  
かさねた。  
言った。  
聲をかさねて。  
温まる肌に。  
さゝやき声で。  
——男の子かな？  
——痛い。  
——きっと  
——なんかね  
——女？  
——こゝろ、痛い  
——どっちがいゝ？  
——ね？  
——お前に似るね  
——なんで？  
——べつに…さ。  
——なんかね。…嘘っぽい  
——俺かな？  
——幸せ過ぎて  
——かわいくななくてもいゝよ。  
——嘘っぽくない？  
——じゃない？  
——本当なの？  
——生まれてくれゝばいゝってわけでもなくて。  
——おかしくない？  
——運動しろよ  
——ママだよ  
——むしろあんまり可愛くない方が普通に幸せなんじゃない？  
——わたしが  
——水泳とか？  
——ママだよ  
——普通でいゝかなって  
——おかしくない？

— じゃない？  
— 笑う…  
— なんか妊婦用の体操なかった？  
— どのつらさげって  
— 働かないと…  
— 秘密だね  
— 名前は どうする？  
— 私に仕事は  
— 何月生まれ？  
— 傷つけちゃうから  
— 考えた？  
— たぶん、子供  
— いつか、結婚しよう  
— 卑怯だけど  
— 12月？…かな？  
— 関係なくない？  
— 生まれて、落ち着いたら…  
— 卑怯の方が好き  
— 順調なら  
— だってさ  
— じゃない？  
— 傷つく子供みたくない  
— 必要だよ。ね。  
— ね？  
— 重い？  
— うれしい？  
— でも  
— ね？  
— まだか。…  
— ほんとにうれしい？  
— どこで？  
— 怖い  
— 痛い？  
— 大丈夫かな？  
— 東京でいゝの？  
— 痛いんだよ  
— からだ、いたい？  
— 子供倦むの  
— 東京で育てる？  
— だいたい切るからね

——出身何処？  
——痛いんだよ  
——だいじょうぶ？  
——でもね  
——お前…  
——だから？  
——さわっていい？  
——めっちゃくっちゃ嬉しいんだって  
——東京でいいのかな？  
——かわいいんだって  
——お腹  
——ね？  
——いちばん無難なの、東京？  
——想像できない  
——大丈夫？  
——してるけど  
——いいの？  
——もう二百回くらい生んだ  
——いじめとか。  
——二千回くらい育てた  
——強くなるか。そっちのほうが…  
——二万回くらいお乳上げた  
——あったかい…かな？  
——抱いて…  
——ね？  
——落っこしそうになって、で、笑って  
——お前、幸せ？

かくて斗璃摩娑は見き比咥琉ひとり嘔吐シ比咥琉彌羸セルを見き故レ比咥琉が爲にノみ  
笑んで見つメき且つは比咥琉ひとり嘔吐し比咥琉見窶レたるを見き故レ比咥琉が爲にの  
ミ笑んで見つめき故レ比咥琉嘔吐のあとに登喇摩娑が腕に抱かレたるにも娑娑彌氣囉玖

絶望よりも  
痛かった  
苦痛よりも  
痛みが走る  
恐怖よりも  
逆り  
怒りよりも  
痛かった  
あまりにも幸福という感覚は



さわぎあう  
わたしたちをあざやかに殲滅する  
血管の中にも  
あまりにも幸福という感覚は  
喚き合った  
無慈悲 りないほどにさえも  
無防備なまでに  
かくて比喩  
あまりにも  
爾に都舞耶氣良玖  
六月の雨に降られて。  
雨に。  
その雨に降られて。  
わたしはバルコニーの植栽に花の咲いていたのを見た。  
鳥雅がいまだ目を覺まさない夕方に。  
生きてる？  
思う。  
わたしは思った。  
ひとり。  
顯らかな彼の眠る息吹を。  
その寢息さえ聞き取れもせず。  
もうすぐ出勤する夕方に。  
雨の雲に日没に焼かれることもなく。  
思う。  
鳥雅は死んだに違いなかった。  
ベッドの上で。  
ひとり。  
わたしと彼の子供とを残して。  
わたしの子供を。  
私と彼の子供をお腹に。  
生きるに違いなかった。  
わたしは。  
彼がたとえ目を覺まさなくとも。  
当たり前だった。  
鳥雅はもう死んだのだから。  
わたしがひとり取り残されても。  
当たり前だった。  
鳥雅は已に死んでいたのだから。  
生きるに違いなかった。  
わたしは。

花が揺れた。  
雨の中にも。  
聞かなかった。  
その花の揺れる音をは。  
若しも蝶なら。  
もしも雨の雫の中にさえ。  
雫の無残なまでの無数の降り落ちる間を飛ぶ蝶だったら。  
あるいはそれは聞き取るのだろうか？  
鳴り響く最強音の雨のそれ。  
その怒號の内に。  
轟音のかさなる四維の響きうちに。  
その花の揺れた一度の音を？  
その紫陽花。  
紫の花の。

かくて六月の畢りその明けの比に登喇摩娑部屋にアリてノックの音に返り見き故レさサ  
やけらく——誰？ トしかすがにそのひと何ヲも答えずてシかれども登喇摩娑恠しむこと  
もなし所以者何斗璃摩娑すでに知りけらくそノ人比笈琉にほかならずと故レドアに近寄  
りきさサやけく——誰？ と爾に応える聲ノなき沈黙を聞きテ斗璃摩娑ひとり比笈琉が爲  
にのミ笑みて思へらくむしろ開けたドアの向こうに死神でも立っていたなら？ 燃え上がる  
昏い顔の男でも。ないしは羽衣の天女でも。或いは花の妖精。時には月のかぐや媛で  
も？ 明けたドアのむこうに開いたブラックホールの見えない平面が俺を静かに飲み込んで  
いけば？ 故レ斗璃摩娑爾にさサやけらく——誰？ トその答える聲の鳴るも鳴らぬも  
またズてすぐにひらいたドアの向カウに登喇摩娑ハ見き降る雨に纔かに肩を濡らシたる  
比笈琉を故レ比笈琉ぬれたりそノ髪纔かに故レ比笈琉濡れたりそノ頬纔かに故レ比笈琉  
塗れたりソの二ノ腕纔かに爾に登喇摩娑は見き比笈琉上目に登喇摩娑を見テ且つは微笑  
ミたるを見て観つづくるともなくに故レ斗璃摩娑ひとり比笈琉が爲に笑ミき且つは斗璃  
摩娑ひとり比笈琉が爲にさサやけらくは——雨？ と故レ比笈琉爾に娑娑彌氣囉玖

失われた

泣いていゝ？

言葉など

意味もなく

あなたの微笑む顔を見た

いまこの時に

そのやさしかった眼差しを見た

わらっていゝ？

失われた

その耳元でさえも

言葉など

あなたは見るしかないのだった

燃え尽きもせずに

あなた微笑む  
崩れ落ちもせずに  
かくて斗璃摩娑  
あなたの女を  
爾に都舞耶氣良玖  
あまりにもおさなすぎて。  
まだ。  
生まれてもいないイノチの粒は。  
脈打つ粒。  
分裂する細胞の群れ。  
脈打つ。  
未だに。  
生まれても居ない粒は。  
あまりにおさなすぎて。  
母胎をふくらませるでもなくて。  
感じる？  
息吹きを？  
あるいは母胎は？  
感じたのだろうか？  
それでもすでに？  
通り抜けた。  
笑う。  
開かれたドアにわたしの傍らを通り抜けて。  
振り返り見た耀は邪気も無く。  
見ていた。  
頬にだけ笑むそのかたちを。  
わたしは何か言いかけたに違いなかった。  
唇は。  
なに？ とさゝやき。  
そのまゝに捨て置き。  
笑った息を立てた。  
わたしは。  
誰の爲にでもなく。  
ひとりで。  
ふきかけるようにも。  
なに？ と。  
そのひとことだけに目を伏せてしまう耀に。  
彼女への何らの欲望もなかった。  
乃至愛さえ。  
まして戀など。

纒かの理由もなく差し出した腕は耀を抱こうとするものゝ。  
避けた。  
耀は。  
身を抗うでもなくて。  
ただ一歩だけ後退して。  
腕をかいくゞる耀を見た。  
——やめて。  
と。  
耀のさゝやくのを見た。  
その時にはすでに彼女は後悔していた。  
自分の身振り吐いた言葉を。  
乃至驚いてさえいた。  
耳を疑い、だから耀は自分を疑いさえしていた。  
淡い懐疑はたゞ深く、だから彼女は目をさらに伏せた。  
——さわらないで。  
さゝやく。  
まるで他人に耳打ちされた言葉を唇になぞったかにも。  
だから顯らかにわたしは他人の言葉を聞いた。  
耀とふたりで。  
息の吹きかゝり合うほどの至近に。  
ふれあうこともなく。  
その、耀の喉のはく他人の言葉を。  
つぶやく。  
——起きちゃう。  
と。  
耀は。  
——この子起きちゃう  
と。  
見い出されたもの。  
その時に不意に見上げた眼差しに。  
涙？  
潤んだ眼差しがわたしを見詰めた。  
なにか言いかけた。  
耀は。  
だからわたしは耳を澄ました。  
耀も。  
だから彼女も耳を澄ました。  
ひらかれた唇は知っていた。  
すでに言葉を失ったことを。  
だからひらかれたまゝ停滞した。

閉じられかけたまゝ停滞した。

わたしは目を伏せた。

耀はわたしをだけ見ていたことは知っていた。

その震える顎に。

痛みを感じた。

なぜ？

わたしは。

あくまでも耀と俱に痛みをだけ。

かくて爾に比喏琉汗をながシ又同じき時に身を曲げてバスルームが内に吐きゝ故レ太も  
モに垂れ且つハ床に飛び散る水流と共にもかたちも色もなにも失フ胃液の匂ヒをたダ眼  
差しに見きかくてバスルームの外寢臺が上に身ヲ横たえたる什六歳の登喇摩娑が前にす  
がたをさらしてひとり娑娑彌氣囉玖

意味は？

とめどもなく

悲しみの。

あふれでる

身を焼きつくすような

つきもせず

骨に咬みつくような

響き合うまゝ

意味は？

ただ響き合い

悲しみの。

鳴り止まない

かくて比喏琉

畢りのない

爾に都舞耶氣良玖

感じていた。

纒かにはなれたそこに。

あなたのそばに。

決してふれあうこともなく。

纒かにはなれたそこに。

あなたの素肌のそばに。

さらされた自分の肌に。

感じていた。

体温を。

あなたの。

あるいは時にお腹の中の。

イノチのかたち。

その体温さえ。

知っていた。  
存在しないのはわたしの体温だけだった。  
わたしの見出した愛しすぎる風景の中で。  
存在しないのはわたしの体温だけだった。

故レ爾に登喇摩娑ひとり横たわる比笈琉に添うテその身を横たえき故レ比迦留ひとり横  
たわる斗璃摩娑に添うテその身を横たえき時にうつらうつらの眠るとも覺めるともナイ  
眼差シの朧ノウちにかたちと色と香りだに見いだしたればひとり娑娑彌氣囉玖

あふれていた  
愛してる、と  
不用意にも  
誰を？  
あふれかえっていた  
幸せだよ、と  
あり得ないほどの  
誰が？  
噓せかえるでもなくて  
もう莫迦馬鹿しいくらいに  
たゞやさしい  
もうあり得ないくらいに  
ひたすらにやさしい  
あなたを愛してる。だから  
心の抱いた感情の群れ  
わたしはすでに幸せでいられた  
かくて比笈琉  
なすゝべもなく

爾に

幸せでしかなかった  
都舞耶氣良玖  
見つめていた。  
微笑む顔を。  
いまだカタチなどなくせに。  
いまだまともな骨格さえもなくせに。  
聞いていた。  
わたしは。  
顯らかすぎる耳元に。  
耳の奥にも。  
ひゞく笑い聲。  
やがて生まれるそのイノチの。  
生まれねばならないそのイノチの。  
生きて。

と。  
願った。  
わたしは。  
お願い、と。  
願った。  
わたしは。  
生きて。  
と。  
聴く。  
無邪気にすぎないその聲を。  
なんども繰り返し。  
聞いた。  
嗅いだ。  
そのあまりにも甘やかなにおい。  
もうひとりでに充分乳臭いにおい。  
あなたの匂いを。  
あなたはわたしのお腹の中に生きていた。  
だからわたしも。  
たぶん。  
顯らかに。  
わたしも慥かに生きていた。

故レ目を覺まシ爾に比喏琉ひとり自分が朧ノ夢に醒めるを感じタリき故レゆゑもなクに  
心かなシみにひタリ故レゆゑもなクに心たダさびシク目舞ヘバ爾に比喏琉ひとり斗璃摩  
娑と俱なりて娑娑彌氣囉玖

ね？

ふれようとおもった

と。

せめてその髪に

その耐えられずにつぶやいた聲を

髪をかき上げ

ね？

なでるように

と

いつくしむように

もはやなにを云いたいわけでもなくて

ふれようと思った

もはやなにを聞きたいわけでもなくて

なにを求めたわけでもなくて

たゞ吹きかけたにすぎない聲を

なにを訴えるわけでもなくて

あなたは心に聞いただけだろうか？  
見ていたのは窓越しの光の  
かたわらに目を開いたままに  
反射した白濁  
わたしの向こうを見詰めた人は  
床の上の  
あなたは心に聞いただけだろうか？  
壁の表面の  
かくて斗璃摩娑  
見て  
爾に  
世界は今これほどにも耀く  
都儂耶氣良玖  
出て行こうとはしなかった。  
臆而訪れた夕暮にも。  
耀は。  
寝過ごしたわけでもなくて。  
何故なら彼女は一度もうたゝ寝さえもしないで。  
わたしと俱に。  
疲れ切ったわけでもなくて。  
何故なら纒かの悲しみさえも。  
淋しささえも兆すことなく。  
不意にこぼれるに過ぎないほゝ笑みと笑み。  
いくつもの。  
笑みと無意味な笑い聲にも。  
何度もの。  
まして病んだ譯でもなくて。  
——行かないの？  
わたしはさゝやきさえしなかった。  
——仕事…  
と。  
——いかないの？  
わたしはなんども、だからさゝやきはしなかった。  
だからなんどもさゝやかなかったわたしの事実をだけ知った。  
なすゝべもないほどに間近に寄り添い。  
臆而沈む夕日が壁の色の半分映えた。  
北向きの部屋だったから。  
西の壁には紅蓮の夕日が。  
わたしはそれをは見なかった。  
だから耀はそれをは見なかった。



かくて廳而の暗闇に比喏琉立ち上がりもせず故レ斗璃摩娑たチあがりもせずて故レ闇ノ  
深まる儘に闇にその躬ヲ捨て置き故レ夜ノ闇にも比迦留爾に登喇摩娑と俱なりテひとり  
捨テ置かれき故レ夜更けテ更け切る畢てに夜ハ終に盡きゝ故レふたり俱りテ斗璃摩娑ひ  
とり背後に夜の明けかけるを感じき故レ比喏琉ひとり添う斗璃摩娑が頸の向カウ更に窓  
の向カウに夜の明けかかるとを見きカクテ娑娑彌氣囉玖

夙夜

おわりだよ

果てる

夜は

夙夜

わたしたちの

盡きる

ふたりの夜は

夜

もう

畢り

見て

夜は今

もすぐあざやかな

たゞそれ自身の音もなく

見て

滅びた

もうすぐ綺羅らぐ

もはや音もなく

朝の

ふたり俱なりて

無慈悲な迄の沈黙のうちに

娑娑彌氣囉玖

あったはずだった

もう泣かないだろう

そう思った

わたしは決して

無造作な時間の濫費

こぼされるべき涙など

燃え墜ちた時間の向こうに

もう笑わないだろう

あったはずだった

わたしはすでに

語られるべきだったこと

こぼされるべき笑い聲など

泣き臥したくなるほどに  
いま  
切実な思い  
あざやかに空は  
その  
北の空  
身を切り裂くような  
その右の方には  
思い詰めた時間は  
見出されない儘  
慥かにあったはずだった  
あざやかに空は  
かくて比喩  
美しい？  
爾に  
綺麗な？  
都舞耶氣良玖  
ふいに身を起こす。  
その瞬間にわたしは笑った。  
不意に立ち上がる。  
その瞬間。  
幸福。  
あふれかえる幸せがふたゝびわたしにふれた。  
わたしにだけに。  
だから笑った。  
あなたにも。  
かすかな驚きをさらして見上げたあなたに。  
眼差しのすこし下のうす闇の中の。  
そのあなたにさえも。

故レ斗璃摩娑窓を引き開けたる音に返り見振り返りたる首に比喩の笑みて一度登喇摩  
娑を覗たのを見れば爾に娑娑彌氣囉玖

なにをするの？

風

あなたはそこで

開いた窓が

微笑の内に

風

なにをするの？

カーテンにはためきを

晴れ渡った空は

はためきを與える爲だけに  
もうすぐ雨を降らす筈だった  
雲もなく  
信用できない六月だから  
たゞ色を  
紫陽花の爲に  
空に色を蘇生させ  
濡れて光るべきその花の爲に  
明けて行く空は  
雨は降るに違いなかった  
かくて斗璃摩娑  
雫は震える  
爾に都舞耶氣良玖  
まばたきする暇もない一瞬に身を投げた。  
出たバルコニーから。  
耀は。  
もはや何を振り返るでもなく。  
欠けていた。  
悲しみが。  
その風景には。  
やゝあってわたしは立ち上がる。  
バルコニーに出た。  
手摺の鐵のすこし剥げた色は白。  
残すだろうか？  
最後によじ登った耀の体温を？  
缺けていた。  
あくまでなおも悲しみが。  
見渡すゝべてに。  
下をのぞき込みはしなかった。  
燃えた。  
右手の空に。  
明けの空。  
空の紅蓮が。  
たゞあざやかに。  
あまりにもそのあざやかな紅蓮。

比喩琉亂序蚊頭囉岐第三

啞ン癡 anti 汚瑠我貳翠夢 organism II

2021・01・13 黎マ



## 苺豆麻亂序

かく聞きゝ男ありき名を志苺ノ迦豆麻と曰フ比登ラが古與美ノ貳仟年に阿岐ノ美夜士麻に生まれき志苺ノ多都遠を父とす又志苺ノ彌與比を母とす懷妊したる時彌與比夢にうス赤色の魚鱗さらす龍ノ口の中に入ルを見き耳元に男の聲を聞クその聲云へらくはふたゝびト。

わたしはふたゝび。

ふたゝび生まれる。

腹に。

ふたゝび人の胎の中に。

その穢れの中にと云せり故レ彌與比答へらく何故と。

何故わたしの？

わたしのお胎の中に？

生き物の温度の。

生き物の湿気の。

その臭気の中に。

何故？ ト云すを男ノ聲答へらく見たと。

わたしは見た。

見上げた空に。

雲の浪立つその空の綺羅の向こうに。

見た。

わたしは。

臆て明けの空に白い。

白い月がひとり輝くのをと答へり故レ彌與比答ふべきスベを知らず黙シき故レ夢に喉の燃える温度に噎じきかくて苺豆摩生まれながらに躬に芳香たダよひき故レ稀ナル人と人々噂せりかくて迦豆摩生まれながらに體の半身に赤キ斑らを沁ミわたらせタリき故レ故レ稀ナル人と人々噂せり乃爾に彌與比ひとり娑娑彌氣囉玖

炎に焼かれたかのように

愛おしむ

爛れ

呪われた子供を

焼け爛れたかのように

望みもしなかった

赤らむ半身の肌の色に  
不意打ちの子を  
その薄い肌に  
愛おしむ  
あるいは彼自身の前世の罪を思った  
厭いながら  
わたしの知らない他人の罪を  
憎しみ乍ら  
かくて彌與比  
他人の齋す  
爾に

不意打ちの子を  
都儂耶氣良玖  
誰に言えたゞろう？  
それが強姦の果ての子供だと。  
十八の夜に。  
広島で。  
誰に言えたゞろう？  
まさか辰雄に？  
夫にさえも隠し通して。  
その腕に抱かせた。  
辰雄に似ないその他人の子を。  
年と共に。  
年ごとに。  
親にも似ずに美しく。  
夢のように美しく育つ斑らの子供を。  
何も知らない辰雄にだから抱かせた。

貳千六年辰雄自ら死にタリキ所以者何知らず常の如朝会社に出テ行き不意に会社に行か  
ズ美夜土摩の山の一つノ半ばノ樹木の枝にづら下がりキ故レ人々陶都遠ノ錯亂を思ヒ詰  
り咎め且ツは歎キゞ故レ爾に彌與比ひとり娑娑彌氣囉玖

雫のしたゝる  
錯亂はなかった  
その六月に  
取り乱すことも  
雨の雫の  
しずかに彼は  
雫のしたゝる  
辰雄は赦した  
その六月の雨の  
だれを？

霧雨の朝に  
わたしを  
樹木の下  
かれらを  
土は息物の  
獺馬の父らを  
最後の汚物に  
獺馬のイノチを  
汚れて淀む  
彼は罰した  
かくて彌與伊  
自分のイノチを。解き難いその  
爾に  
彼固有の矛盾の内に  
都舞耶氣良玖  
告白。  
その言葉をつぶやくわたしの残酷さを知る。  
たゞせつないほどに悲しく。  
悲しみ以外になにも感じさせない純粋な悲しみ。  
たゞその心の綺麗な、そして心のすさまじい凄惨。  
驚かなかった。  
辰雄が死んでも。  
そうするしかなかったのだろうと私は思った。  
彼の卑劣を咎めながら。  
彼の卑屈を咎めながら。  
辰雄の耳にわたしは云った。  
その耳に。  
獺馬の出生の秘密のすべてを。  
なぜ？  
彼がすでに疑っていたから。  
獺馬を虐待する私の意味を。  
容赦なく。  
とめどもなく擗るわたしの残忍の意味を。  
なぜ生んだのかと。  
辰雄は聞きさえしなかった。  
たぶん彼は知っていた。  
その理由などわたしさえもが知りはないのだと。  
泣き叫ぶ獺馬の聲に眉を顰めた。  
彼は。  
顰めた眉にわたしを疑う。

獺馬の出生の意味を。  
だからわたしは辰雄に云った。  
彼の望んだそのまゝに。  
わたしの肌に刻まれた無数の生傷の意味。  
獺馬の種を付けられるために。  
隠し通した。  
顔に外傷の無かったことをいゝことに。  
辰雄の爲に。  
彼に告げた。  
あなたの爲に、と。  
彼の心の懊悩を止めてあげる爲だけに。  
彼に告げた。  
彼が死んでも驚かなかった。  
そうなるしかなかった気がした。  
だからわたしは殴打した。  
辰雄を殺した幼い命を。  
その殴られても死にはしない少年のふてぶてしさを。  
アイロンで焼いた。  
泣き叫んでも壊れない少年の強靱を。  
だれも望まなかったその強靱を。  
顔をガムテープで縛り付ける。  
その聲を聞かないですむように。  
開いた口蓋をタオルで塞ぐ。  
その息の音を聞かないように。  
後ろ手に縛った。  
顔で床を這うのを見た。  
彼の犯した罪を彼がせめても償ってくれるようにと。  
純粋な祈りだけを心に捧げて。

貳仟捌年 卍豆摩すでにシて 匂フばかりに美しく輝くを人と人らが目ハ愛でテ止まず且つ  
ハ人と人らノ口ハ讃えて止まずかくて 迦豆摩爾にひとり 娑娑彌氣囉玖

美しいのだった  
窒息しそうな  
すべて  
息さえできない  
目に映るものゝすべてが  
失神しそうな  
聞く物の  
碎けてしまいそうな  
聞こえるものゝすべてさえもが  
燃えそうな



無慈悲なまでに  
目も  
その刹那に  
嗅ぐ鼻も  
その須臾に  
ふれる指も  
その一瞬に  
その耳も  
かけがえもなく  
ぼくはただ茫然とした  
たゞひたすらに美しいのだった  
見えたもの  
肌のちかくに舞う蚊の立てた  
ありとあらゆる  
その羽のノイズ  
すべてのものゝ  
それさえもが  
美しさにすでに。だから  
かくて迦豆摩  
ぼくはたゞ  
爾に  
茫然とした  
都儂耶氣良玖  
痛いのだ。  
生きることはいつも。  
母の殴打した皮膚のせいでなくて。  
母の咬みついた腕の傷痕のせいでなくて。  
母の焼いた火傷の膿みのせいでなくて。  
空の青さも。  
雨の白濁も。  
曇る空に墜ちる日差しの白い綺羅めきも。  
なにもかもが。  
痛いのがあった。  
傷みに世界は噓せ返る。  
物はなにも痛みを知らずに。  
だから僕はひとりで噓せ返る。  
世界の曝したすさまじい痛みに。  
たぶん僕は狂っていた。  
あまりに孤独につき放たれて、そしてひとりで痛みに傷む僕は。  
僕は狂っていた。

すでにひとりでに。  
貳仟拾年笈豆摩すでにシテその知性とぎすまされて綺羅メク刀の刃の耀くに似れば人と  
人らが目は愛でテ止まず且つは人と人らの口ハ讃えて止まずかくて迦豆摩爾にひとり娑  
姿彌氣囉玖

聞く

絶望的なまでに

ぼくは

すべてを知り盡くした気がした

あたまのなかに吼える

なにも未だ知りもせずに

吠える獣の

世界は僕に惰性だけを見せた

その聲を

だからいつでも

聞く

知られつくした

ぼくは

世界は僕に

吼える聲は

嘲笑を与えた

たゞひたすらに

かくて笈豆摩

純粹だった

爾に都舞耶氣良玖

海を見た。

誰と？

幼い子供と。

二歳下の少年。

鳥雅と和葉。

うつくしい少年。

私と同じように。

美しいものを僕は愛した。

軽蔑した。

母を。

その女。

私には似ない醜さの無様を。

その濕気た体温を。

体内の匂いを伝える口臭装置を。

見た。

海を。

幼い子どもと。  
鳥雅と和葉。  
かれらに躰の芽生えを教えてやりながら。  
戯れに。  
そのふたりのそれに。  
いまだに濡り始めないその先端に。  
海を見た。  
二月の海を。  
立つ霧はふれた。  
空から雪崩れたように。  
その海の遠くに。  
そしてふれてすでに白濁に掩う。  
すべてを。  
水平線をも。  
空と海の境界さえ。  
霧は綺羅めく。  
綺羅めいて陽炎。  
陽炎のどこかに波は立った。  
音のみ響かせて。  
音にのみ鳴らしてすでに。  
たゞ光の綺羅に白濁。  
今も。  
その形などさらさなかつたまゝ。  
もはや。

貳仟拾貳年笈豆摩ひとりそノ目に阿迦井ノ笈豆囉古を愛でき是レはじめて戀シたる少女  
なりき笈豆羅古いまだ齡捌歳なりき故レ笈豆摩躬ヅからが心を恠シミき故レ笈豆摩戀フ  
る心を斗璃摩娑にハ秘めたりき故レ笈豆摩戀ふる心を笈須波には秘めたりき故レ笈豆摩  
戀ふる心を笈頭羅許にハ秘めたればかくて娑娑彌氣囉玖

吐き気がする  
走る  
あなたを想う時には  
ことばも無く  
戀は淨らかだと？  
たゞ心は  
まさか  
心そのものを置き去りにして  
吐き気がする  
走る  
燃え上がった内臓が腐り  
感覚は

腐った苦い味に塗れて  
すべてのものを  
口からすべて出そうなほどに  
置き去りにして  
ただ屈辱じみた  
走る  
吐き気がする  
戀するわたしは  
あなたを想う時  
あなたをさえも置き去りにして  
かくて迦夜香  
その  
爾に

切なさだけが燃え上がる時には  
都舞耶氣良玖  
自分の雫の匂いを嗅いだ。  
受け入れられる筈もなかった。  
そのおさなすぎる肉躰は。  
だから。  
ぼくは嗅いだ。  
自分の雫の匂いを嗅いだ。  
その美しすぎる幼い躰を。  
むしろその心を。  
その未來のすべて。  
滅びた後の丸てをさえも。  
ぼくの心に思い乍ら。  
自分の雫の匂いを嗅いだ。

貳仟拾參年人々は見き荒ぶる笈豆摩を狂へる鬼ノ憑きたルかにも見き且つハ荒ぶる笈豆  
摩を凶つ神の憑きたるかにモ見き笈豆摩の同級生又ハ下級生又は上級生又は教師等人と  
いフ人の悉くに加えたる暴力容赦なくテたダ人と人らの眼笈豆摩を厭ヒき笈豆摩を咒ヒ  
き笈豆摩を怖れキ笈豆摩を忌ミき故レ笈豆摩爾にひとり娑娑彌氣囉玖

あまりにもちいさな  
壊す  
あまりにもさゝいで  
肉を  
あまりにもはかない  
骨を  
暴力  
折る  
僕にはわからなかった

小指の骨  
暴力というもの  
中指の骨も  
ひとりのひとの  
聞く  
強烈な悪しき暴力の  
喉の立てた  
その  
濁音に塗れた  
すさまじいちいささの意味が  
太い声  
例えば僕が機関銃で  
引きずるような  
島中の人を撃ち殺したなら  
昏い呻きを  
だれもかれをも殲滅したら  
散る  
だれかは笑ってくれるだろうか？  
血  
せめてもの  
体液  
その暴力のあまりにわずかなさゝやかを  
散らす  
ちいさゝを  
生き物の穢さ  
さゝいさを  
惨めさ  
はかなさを  
あまりにも無様な  
僕はなにも判らなかつた  
無残なかたち  
目を追うばかりの惨状という  
なんという  
その  
赤裸々な  
故レ彌與比爾にひとり  
言葉の意味が  
娑娑彌氣囉坎  
殺せばよかつた  
焼く

生まれなければよかった子は  
ライターで焼いた  
だれもが知った  
仏壇のライターで  
わたしを咎めた人の総てが  
その幼い眉を  
その虐待を  
わななく黒目  
咎めた人のすべてが  
彼を処罰してやる爲に  
いまだすべての責任を  
罪あるその子を  
わたしひとり押し付けながら  
その前世ごと  
殺せばよかった  
その存在ごと  
うまれればよかった子は  
壊す爲に  
腕を断ち切り  
イノチはしぶとい  
足をきりとり  
壊しても  
頭を落とし  
壊しても  
ガソリンを被せ  
壊しても死なない五歳の子ども  
焼いて仕舞えばよかったものを  
イノチはしぶとい  
殺せばよかった  
吐き気がするほど  
うまれればよかったその子は  
イノチは  
かくて笈豆摩  
絶望的なまでに  
爾に都舞耶氣良玖  
目を逸らした。  
僕の微笑んだ眼差しにさえも。  
だから僕はひそかに笑んだ。  
悠貴の爲に。  
その上に乗って指を折る時に。

土を咬んだ。  
悠貴の口は。  
うつ伏せだったから。  
ふともゝの下に藻掻く。  
ねじられた方の腕は。  
僕の掌の中でもがく。  
つかみ取られた手首は。  
へし折られた小指はあり得ない方向を向く。  
悠貴の肌はその時突然湿気を放つ。  
失禁したに等しい程の汗のせい。  
——赦してあげれば？  
さゝやく和菓の聲を聞いた。  
あざ笑うに近いその聲を。  
やさしく潜められた聲を。  
鳥雅は何も言わなかった。  
彼の聲の不在を恐れたぼくが見上げた顔を鳥雅は見ていた。  
名前を知らない樹木の翳りの中で。  
僕と悠貴の顔のすぐちかくに立った足を曝して。  
見上げた僕は鳥雅に笑んだ。  
同じように笑んだ彼の顔を。  
悠貴が鼻をすゝった。  
土の至近に。  
鼻の味わう鼻水と血のそれを思った。  
七月の日差しは降り注ぐ。  
土の上にも。  
その生臭い臭気の上にも。  
かすかに黴びた土の香りの上にさえも。

貳仟拾肆年爾に弍豆摩ひとりの女を姦せり季ハ如月の春なりき斗璃摩娑また弍須波また多陀遠と俱なり女名を伊久美と曰せり齡十五ナリき故レ弍豆摩こゝ口に娑娑彌氣囉玖

かなしいまでに悲劇的な  
綺羅めく。瞳は  
まるで世界中の不幸の総てのふりそゝいだのような  
見開かれた瞳は  
それをひとり知って仕舞ったかのような  
横殴りに刺す午後の日差しに  
そんな茫然のうちに  
日曜日の  
不可解な恍惚の内に  
山の傾斜の四阿の中に

それでもなおも  
斜めに差す日は  
或はだからこそ  
古い誰かが作った六角堂  
すべてをはっきり赦したかのような  
異國風の  
そんな眼差しに日差しがふれた  
古い大陸のいつかの帝国  
かくて笈豆摩  
滅びた人たちの  
爾に  
滅びたその様式のうちに  
都儂耶氣良玖  
ぼくたちはみんな聲を聞いた。  
その三月の午後。  
ぼくたちの笑った聲。  
人もいない山肌の古への廃屋に。  
鳥雅目当ての女の呼び出した時に。  
だれも知っていた。  
藤原郁実の咬んだ思いは。  
大人の戀をする。  
未だに幼い十二歳の少年に。  
行き場所の無い戀をする。  
囲まれた廃屋の影。  
足の遙かな下には観光客たちの息吹き。  
彼等は此処迄上がって気はしない。  
うち捨てたられた四阿の存在など彼等は知らない。  
郁実は戸惑う。  
鳥雅をその目にし乍ら。  
反射的にも霑いを与えて。  
その網膜に。  
それでもすでに知っていた。  
郁美は。  
自分が普通ではない状況にいることを。  
ぼくたちみんなに囲まれて。  
庄司惟男がさゝやいた。  
耳元に。  
——こいつ、生意気なんだよ。  
邪気もなく笑う。  
郁実は世界が今音を立てて崩れるのを見る。



郁実は喉に腐った自分の血の味をあじわう。  
僕は感じた。  
失神しかけた郁実より顯らかに。  
彼女の見出す風景の総てを。  
彼女の感じる世界の総てを。  
腰を振る惟男を笑う。  
和葉は。  
僕は斗璃摩姿のそれに教えてやる。  
その感じるべきものの感觸を。  
斗璃摩姿は僕に身を預けた。  
知っていた。  
斗璃摩姿がかならずしも僕を愛してはいないことを。  
機械のように発情する。  
鳥雅のそれは。  
だからそれにせめて感じるべき感觸を教えた。  
自由にした。  
僕を。  
鳥雅が僕を必ずしも愛していない事実が。  
そして僕を焦燥させる。  
暴力的に愛される女の息を聞いた。  
肺に搾りだすような。  
惟男の笑った聲を聞いた。  
あまりに小さい暴力。  
それ本来の小ささ。  
悪というものの致命的な微細さ。  
郁実のすべては崩壊する。  
郁実のすべて壊れさる。  
頭の上で鳥が鳴いた。  
春の鳥。  
惟男に女の抱き方を教えた。  
彼が力尽きた後に。  
惟男に女の鬪り方を教えた。  
土の上に胡坐する彼に。  
惟男に女の壊し方を教えた。  
彼が笑う聲を振り返った。  
鳥雅にふれさせる気はなかった。  
女などに。  
郁実が鼻から血を流した。  
だれも殴りはしなかった。  
自分で床にぶつけたのか。

自分で勝手に千切れたのか。  
そのやわらかい毛細血管と粘膜が。  
ぼくたちはみんな声を聞いた。  
自分の声をも含めて。  
その三月の午後に。  
聞いた。  
ぼくたちの笑った声を。  
女の無言をも含めて。  
人もいない山肌の古への廢屋に。  
最後に和葉がはじめて女を知った。  
僕は笑った。  
和葉の喪失を。  
そのとき思わず僕は気付く。  
自分がはじめて女など抱いたその愚劣に。  
思う。  
家に帰ったらシャワーをあびようと。  
ぼくはひとりで心に自分に約束をした。

貳仟拾五年はじめて智豆摩人を殺メき是レふたつ年上の男なりき故レ齡十七の男なりキ  
名を波多能ノ多氣琉と曰フ多氣琉広島本土の高校に通ヒき故レ此のト殺八月なりき島に  
歸りたる多氣琉を智豆摩ら制裁せり所以者何そノ顔の日焼ケの色の不遜の故なりき故レ  
爾に夜海邊に智豆摩また智須波また比登志俱なりて多氣琉を呼び出シき古牟羅ノ比登志  
此の時齡十四なりキ故レ智豆摩波ノ打ツ間にもひとり娑娑彌氣囉玖

同じものにすぎない  
ふりそゝぐのだった  
そのひかり  
どんなときにも  
月のひかりの下には  
どんなものにも  
血も  
雲さえなければ  
涙も  
そのひかり  
分泌物も  
白む光りは  
海の水も  
冴えた綺羅めき  
その波も  
たゞうす暗く  
液体は  
たゞほの明るく

ことごとくに  
ふりそゞぐのだった  
月のひかりの下には  
死んだ男の  
黒ずみ  
髪のにさえ  
かくて笥豆摩  
綺羅めく  
爾に都舞耶氣良玖  
波に肉躰がつつぶした時。  
秦野猛が。  
その肉体がひとりで前のめりに。  
その突っ伏した時に。  
聞いた。  
波の音と彼の無音を。  
猛だけの無音を。  
彼が死んだのは顯らかだった。  
——死んだの？  
だからやゝあって和葉がさゝやく。  
僕は振り向く。  
和葉はひとりで呆気にとられた顔をした。  
——こんなにすぐに？  
和葉はさゝやく。  
——こんなにあっけなく？  
いじけたようにも  
——こんなもん？  
笑んだ顔を不審にゆがめて  
——じゃ、今までの奴らは？  
僕は笑った。  
聲を立てゝ。  
或は呆気なかった。  
右の拳の指にだけ鈍い錆びた痛みを残した。  
その歯。  
猛の唇を壊したその歯は。  
——やばいよ。  
比登志はつぶやく。  
我に返り。  
彼はひとり。  
——俺ら、殺したね。  
さゝやく。

——俺ら、呪われたね。  
和葉が笑い出すのも待たずに逃げ出す比登志を僕は追った。  
波にねじ伏せ後ろから潰す。  
顔面から砂に突っ込む比登志を笑った。  
和葉は。  
比登志の顔を波と砂に擦り付け僕はさゝやく。  
その耳元に。  
——俺たち三人だからね？  
波を飲む。  
——逃げるなよ。  
砂と同時に。  
——いっしょに、三人だからな。  
比登志の喉は。  
口蓋。  
粘膜は。  
嚙む。  
歯。  
舌はどちらをより味わったのか。  
塩水の味か。  
沙のざらつく濡れた触感か。  
どうでもよかった。  
たとえ比登志が密告しようが。  
罰されない年齢の犯罪。  
だから人でさえない人の犯罪。  
あるいはアメーバの親戚。  
だから水母が殺した。  
どうでもよかった。  
たとえ比登志が密告しようが。  
たかが一人のト殺。  
目を覆うべき悪辣。  
たかがひとりの男の無様な死。  
悪はいつでも卑小に過ぎない。  
破壊はいつでも卑小に過ぎない。  
死などまして。  
殺害などまして。  
だれかが人類を殲滅したとしてさらされるすさまじい卑小さを誰が笑うのだろう？  
殲滅されたぼくの唇を。

貳仟拾六年登喇伎與そノ身に流血に塗れき故れそノ臭氣に塗れきこと更にも瀛ミテ濃み  
沸キ濃みとめどもなクテ腫瘍の肉ノ膨張する儘にそノ躬のかたち變化させきすでに人ノ  
かたちをだにとドめず是レ巨大ナル肉の塊にすぎズ故レ宮島なる祇樹古藤記念園に隔離

されてありテ醫療用寢台の上を零れんばかりにも埋め盡したりき故レ斗璃摩娑是レを見  
舞ヒて娑娑彌氣囉玖

いつも聞く  
とよむ  
おまえの聲を  
風も  
ぼくは夢に  
うみも  
いつも聞く  
血も  
眠った夢に  
血管の中に  
いつも聞く  
細胞の群れ  
醒めた夢にも  
免疫の汁も  
お前の聲を  
その体内にも  
いつも聞く  
とよみ  
かくて斗璃摩娑  
とよんでやまず  
爾に  
とよみつゞけて

都儂耶氣良玖

夢を見た。  
縷子の亡骸をお前は貪る。  
そんな夢を見た。  
和葉の愛したあの女の屍を。  
獺馬の愛したあの女の屍を。  
細胞分裂した無数の屍。  
プラナリアの蘇生のように。  
無数に繁殖した無数の屍に囲まれて。  
増殖し続ける縷子の亡骸をお前は喰った。  
音もたてずに。  
すゝり上げながら。  
さえざるように。  
お前は喰った。  
その夢を見た。

同じき年苜豆摩斗璃摩娑と俱なりテ見き苜斗宇ノ家の燃え上がるのを見き是レ苜豆摩ひ

とり笈斗宇ノ比紗志を殺シ又那都古を殺シ又比那多を殺したるが故なりき故レ笈斗宇の  
三人の死にたる後に家に火を放ちて後海邊に至りテ斗璃摩娑と俱に返り見れば山ノ端に  
焰の色阿那夜迦爾燃え立ちき故レ爾に斗璃摩娑と俱なりテ娑娑彌氣囉玖

闇の中に

見た。無邪気に笑う

燃え立つ色を

あなたを見た

見た。その色を

ひたすらな饒舌

燃え立つ色を

他人に舌を奪い取られたかにも

言葉も無くに？

話しつゞけ

我を忘れて？

笑いつゞけ

むしろ静かに

昂揚する

ただ泣き臥したくなるような

あなたの傍らに

切ない悔恨と俱に

見た。無邪気に笑う

かくて斗璃摩娑

あなたを見た

爾に都舞耶氣良玖

獺馬は言った。

不意に鳴らしたスマホの向こうに。

今、暇？

そのメッセージに返しもできないすぐさまに。

不意に鳴らした夜のスマホの向こうに。

——来いよ。

——どこへ？

——海に。

と。

獺馬はさゝやく。

——鳥居の近く。…来いよ。

——なんで？

——俺が会いたがってるから。

笑う。

俺は。

獺馬を誘惑するようにも笑う。

獺馬の気持ちは知っていた。  
獺馬は俺を愛していた。  
すでに。  
家畜じみた女たちじみて。  
その肉躰に性欲ごと燃えたゝせながら。  
むしろ頬にもふれられもせずに。  
夜の二時過ぎ。  
俺は家を抜け出す。  
すでに眠った浄雅をは起こさずに。  
足音を忍ばすことさえもなく。  
何故なら彼に僕をとめる事など出来なかったから。  
山道を下りた。  
鹿は眠った。  
姿を見せないどこかで。  
気配もなくに。  
猫は走った。  
木の肌をほうように。  
木の葉が揺れた。  
夏の蝶は眠るのだろうか。  
人殺しの徘徊する夜にも。  
すでに島は怯えていた。  
頻繁に起こる盗みと殺し。  
島に安全な場所はなかった。  
平家の殲滅の眠る神の島は。  
鳥の羽音が高くに聞こえた。  
頭の上に。  
見上げた木の葉の茂りの彫大はその纒かにだけすこし揺れた。  
空の暗い光の翳りのざわめきとして。  
ちいさな動揺。  
盗みと殺しのあとに獺馬はいつも俺を呼んだ。  
鳥居の近くのいつもの海邊に。  
だから誰かゝ盗まれたことを知った。  
あるいはだれかゝ殺されたことを知った。  
海邊にひとり獺馬は立った。  
海を見詰めた。  
その昏い海を。  
ひたすらに暗く果てもない海を。  
それでもなおもあざやかに耀く海を。  
厥れ。  
月の光。

星の光にも。  
波はきらめく。  
水の面に墜ちた光に。  
散乱の光に。  
綺羅らの光。  
その波立ちに。  
——どうしたの？  
後ろからさゝやく僕の聲に驚く。  
獺馬は。  
はじめてこの世界に自分以外の生き残りがいたことに気付いたかのように。  
だから獺馬の顔は素直な驚嘆をだけそこに曝した。  
——お前？  
獺馬は云った。  
俺だよ、と。  
ぼくは喉の奥にだけさゝやきそして彼を見つめた。  
言葉もなく。  
誰でも知っている。  
いつでも常に月の光はふりそぐ。  
雨の降らない日には。  
雲の繁茂しなかった日には。  
——呼んだの、お前じゃない？  
聞いた。  
獺馬の耳は。  
不意の僕の聲を。  
僕の耳が聴いたように。  
だからさゝやく。——俺が？  
——呼んだよ。  
——呼んだ。  
——どうしたの？  
その時に獺馬は我に返った色を曝した。  
その目に。  
だから獺馬は振り返る。  
山の方を。  
その禁近くに焰は上がった。  
彼が放った焰に違いなかった。  
だから山は燃えた。  
ぼくたちは見た。  
その焰。  
昏い山を臆てすべて燃え立たせるかに違いなく錯覚させる。  
でもあまりにもちいさな焰。



死んだ誰かの肉を焼く。  
ついに焼き尽くせもしない無邪気な焰。  
あまりにも小さな、絶望的な破壊。  
だれかの壊滅。

かくて迦豆摩まばたき斗璃摩娑の肌ノ馨を嗅ぐその蜜ノ香を故レひとり娑娑彌氣囉玖  
なにを破壊したいわけでもない  
もっと大きな  
誰も云った  
大きな破壊を  
あの母親のせいだと  
壊滅を  
俺はそれを認めなかった  
どうしようもない殲滅を  
彼女はひ弱な命のひとつに過ぎなかった  
赦し難い悪を  
彌生に過失は何もなかった  
目を追うばかりの  
たとえ彼女が俺の肌に取り返しのつかない傷痕を与え続けていたにせよ  
何百度も発狂させて飽きない残酷さを  
彌生はたゞ犠牲者に過ぎなかった  
望んだことは一度もなかった  
ほかの誰もと同じように  
この世界に欠けていたのはまさにそれらだったから  
誰のものでもない罪のせいで  
この世界が無力であるように  
焰は燃え上がるしか術を持たなかった  
僕はただ無力だった

かくて迦豆摩  
だから  
爾に  
僕は沈黙さえできなかつたのだった

都御耶氣良玖  
加藤日向の死が蘊子を歎かせることは知っていた。  
繊細過ぎる彼女のたゞひとりのともだちだったから。  
日向。  
みにくい子供。  
吹き出物だらけの。  
或は大人になったら驚くほど美しくなるのかもしれない。  
そう聞いた。  
すくなくとも神社の佐伯の女たちが噂したのを。

一度だけではあったとしても。  
それは事実かも知れなかった。  
それはたゞの憐憫のくれた錯覚だったかも知れなかった。  
それらすべてはどうでもよい事だった。  
日向はすでに死んだから。  
盗るべきものなど何もなかった。  
いつもと同じように。  
十二時すぎて眠る日向の喉を切った。  
その口を覆い。  
藻掻く歯が手の平にわなゝく。  
博史と奈津子は離れて寝ていた。  
夫婦の部屋の同じベッドの両端に。  
互いに布団の両端をつかんで。  
死んでいく博史を奈津子は見ていた。  
茫然として。  
日向と同じように死んでいく夫を。  
日向の死にざまを知らない儘に。  
死んだ事実さえ知らない儘に。  
暗がりの中に見止めた夜の僕の姿を見ていた。  
茫然として。  
未だに死にきれない男の胎を包丁に突き刺す。  
ほんの数秒に。  
何度も。  
それでも猶も我に返らなかった。  
奈津子は。  
だから夢を見ていたにちがいがなかった。  
彼女は開いた醒めた眼差しの中だけに。  
たゞ目の前の現実をだけ見ていたとしても。  
死に懸けた男を放置して僕はさゝく。  
奈津子に。  
逃げよ。  
と。  
まるでその軀が目的だったかのように。  
死にゆく彼女の爲だけのせめてもの擬態。  
老いさらばえた無様な女はその瞬間に女になった。  
だから口を開きかけた女の顔を切った。  
血が流れたに違いなかった。  
掩う掌がそれを隠した。  
そして夜の闇も。  
奈津子の脱いでいく姿を見ていた。

男は藻掻いた。  
すでに聲も上げられなかった。  
喉はとっくに壊れていたから。  
だからせめて彼は叫んだ。  
荒い呼吸の音だけで。  
奈津子の縮こまった背中と尻が痙攣していた。  
寒い？  
さゝやく。  
喉の奥だけで。  
だから僕はガソリンをまいた。  
ペットボトルに入れた厥れ。  
その匂いの或る液体を肌に。  
舐めるように滑る。  
火をつけた時あやうく僕を焼きそうになる。  
爆発するに似た焰がわなゝく。  
奈津子は回った。  
はげしくくるくる。  
その背面の焰を見ようとして？  
僕は笑いさえしなかった。  
必死に届かない手で焰を消そうとしていた。  
奈津子は。  
だからその目を包丁で切った。  
髪をつかみ。  
焰でわずかに指を焼きながら。  
奈津子は長い息を吐いた。  
もうすでに何をも見出しはしなかった。  
最後に見た僕の笑んだ顔。  
その残像以外には。

かくてテその二週間後近親者の手デ三たりは弔はレキ故レ弔豆摩道の遠クにその葬儀を  
見き時に歎ク迦豆囉許そノ棺に寄り添ヒキ靈柩車がうちにものりこム故レ弔豆摩ひとり  
そノ幼き喪服の漆黒の色ノ日に照る白濁を見キ故レ爾にひとり娑娑彌氣囉坎

黒

匂う気がした

光の下の

鼻の先に

そのさまざまな反射の

その髪の色

すさまじい色の氾濫を見た

たばねられ

白い黒

垂らされた  
黒い黒  
あなたの髪の  
綺羅めく黒  
夏の汗を  
ゆらぐ黒  
薄く吸った匂い  
煙る黒  
はっきりと  
あざやかな黒  
僕は覗ぐ  
さまざま黒  
その髪の馨を  
その氾濫を  
流れ落ちた  
あなたの肌を  
涙のしずくの  
隠した色を  
その温度を隠す  
かくて迦夜香  
髪の匂いを  
爾に都舞耶氣良玖  
ぼくはさゝやいた。  
加藤たちをト殺した夜に。  
振り向きざまに。  
鳥雅に。  
——焼いちゃおうか？  
——なにを？  
無邪気なままに鳥雅はさゝやく。  
耻じらいもせずに。  
僕だけを見詰めて。  
——焼いちゃおう…  
——なにを？  
——神社。…  
——嚴島神社？  
——綺麗だぜ…  
さゝやいた自分の聲を聞き終わらないうちに僕は見ていた。  
燃え上がる神社。  
その夜に耀く焰の色を。  
ぼくは恠しんだ。

そのすさまじいまでの無様な卑小を。

あまりにも小さな。

ちっぽけな。

無残な。

——やっちゃえば？

鳥雅は云った。

微笑んだまゝ。

だから僕は彼の頬に口づけた。

同じように微笑み。

そして同じ風景をは見ないまゝに。

貳仟拾七年迦豆囉古失せたりき故レ智豆摩ひとり海邊を歩きゝ故レ斗璃摩娑をノみ呼び  
出シき迦須波もすでに失せたりシが故なり故レ智豆摩斗璃摩娑と俱なりテ明ケの前の海  
ノ暗い波且つハ月の光散る綺羅らぎノ海の浪ノ音を聞きゝかくテ波打ち際に斗璃摩娑ノ  
手の頸を絞めるに任す故レ智豆摩が肉體苦痛に呻きゝ且ツは加豆摩が肉躰聲もなく斗璃  
摩娑を赦シきかくて迦豆摩が心傷ミに噎せ且つハ冴えて醒メ故レ爾に迦豆摩死にたりき  
かくて斗璃摩娑ひとり娑娑彌氣囉玖

殺してあげる

ふりそゝぐ

殺されたいなら

月のひかりは

壊してあげる

ひたすらに

壊されたいなら

たゞせつないほど

あなたは生きられはしなかった

綺羅らいで

ほかの誰もと同じように

ぼくは忘れた

あなたは生まれるべきではなかった

その美しさに

ほかの誰もと同じように

なにかも

失敗作は毀される

なにをも赦さず

不当な過ちは消去される

なにをも救わず

殺してあげる

なにをも傷つけさえしなかった

殺されたいなら

その海の輝き

壊してあげる  
絶望的な迄の  
壊されたいなら  
他人のきらめき  
かくて迦豆摩ひとり  
無慈悲な綺羅ら  
娑婆彌氣囉玖  
誰も殺しはなかった  
夢を見た  
あなたも  
氣の狂った僕は  
誰も殺せはしなかった  
月を喰う  
わたしとおなじように  
夢を見た  
あなたも  
真昼の沙漠に  
誰もなにも毀せさえしなかった  
たゞひとり  
他人の見た風景の中で  
大口をあけて  
ぼくたちはだれをも  
月を喰う  
傷つけなかった  
月を喰う  
手をふれさえも  
月を喰う  
かくて迦豆摩  
月の光を  
爾に都舞耶氣良玖  
——悲しいの？  
後ろから鳥雅がさゝやく。  
僕にそっと。  
不意打ちじみて。  
同情して仕舞ったかにも。  
——俺？  
呼び出した鳥雅はなにも云わずに傍らにいた。  
だからそれが初めてその時彼の口にした言葉ったことに気付く。  
だから振り返もせずにはぼくはそう云ったのだった。  
だからぼくたちは気付かなかった。

その時も猶も耳は聞いていたことを。

かたりに。

足元を濡らす波のざわめきを。

——悲しいんでしょ？

——まさか。

——蘊子があんなことに…

——あいつは関係ないよ。

——嘘。

言って鳥雅は唇に笑った息を立てた。

やゝあって鳥雅はさゝやく。

——死にたい？

——俺？

——蘊子や…

——和葉みたく？

——違う？

僕らは沈黙する。

僕らのふたりにその沈黙の存在に気付かれもしないで。

——殺せよ。

そう僕がつぶやいた瞬間に僕ら気付く。

今まさに沈黙が崩壊した事実のあったことに。

文字通り音を立てて崩壊した沈黙。

さわぐ波の音。

——殺されたいの？

——お前にならいゝよ。

——なぜ？

答えかけた僕の唇は雪崩をおこす。

とじられた唇が不意に自分の唾液の味をあじわった気がした。

僕は云った。

ようやく最後に鳥雅を振り返り見て。

——殺されたい理由？ お前にならいゝ理由？ どっち？

——なぜ？

鳥雅はさゝやく。

僕は鳥雅を見詰めた。

——生きることに飽きたわけじゃない。

聲。

——なんでだろう？

ぼくの聲。

——最初から飽きてた？

唇にふれる。

——まさか…

僕の聲。

——死ぬのも生きるも生まれた奴だけの贅沢でしょ？

かすかに霑れる。

——生まれなかった者たちは…

体内の湿気に。

——殺していゝよ。

僕は波打ち際に座り込む。

だから鳥雅は僕の頸を抱く。

鳥雅の腕に抱かれながら聴てその手首が動脈をふさぐのを感じた。

そして咽仏を絞る。

胎内に発熱した温度がわなゝく。

沸騰するにも似て。

波は僕たちを濡らした。

もはやふたりともに気付かれもせずに。

月は冴えた。

その光は。

苜豆摩亂序蚊頭囉岐第三

啞ン癡 anti 鳴瑠我貳翠夢 organism II

2021・01・26 黎マ







## 那岐紗亂序

かく聞きゝ女アりき名を斗美遠迦ノ那岐紗ト曰ふ齡二十八なりき比登らが古與美ノ貳仟  
什九年なりき故レ登璃伎與斗璃麻娑ト俱なりて齡すでに拾七ノ年を數へき斗璃伎與ひとり  
美夜士摩にありて内臓中にさシこまれたるチューブの内にその肉腫を肥大化させたり  
故レ斗璃摩娑ひとり斗宇伎夜宇ノ志布夜にありき故レ爾に那岐紗ひとり斗喇麻娑に戀ふ  
故レ斗喇麻娑を部屋に奪ヒ去りてカーテンだに閉ジられたレば光も差さヌうち娑娑彌  
氣囉玖

盗み見た

愛されるべきだった

霑れた色彩

わたしは

だらしなげ唇に

あなたに

狂いはじめた唇に

わたしがあなたを愛したからというわけではなくて

雫は垂れた

愛されるべきだった

唾液

あなたに

ふいにこぼれた涙のような

わたしがあなたほどにもうつくしいというわけではなくて

アルコールの？

愛されるべきだった

盗み見た

宿命として

たゞその汚らした

わたしはあなたに奪われた

色もないその色彩を

あなたはわたしを監禁した

かくて登喇麻紗

閉じ込めて

娑娑彌氣囉玖

聲を聞く  
あげよう  
響き籠るばかりでかたちのない  
あなたに  
人の聲を  
欲しいなら  
聲のつらなりを  
あげよう  
聲を聞く  
あなたに  
ただ孤独をだけ  
唇を  
孤立の中に  
齒を  
孤独を思った  
眼球を  
かくて那岐紗  
心臓さえも  
爾に都舞耶氣良玖  
逢った。  
渋谷のクラブで。  
昏い光。  
あざやかな光。  
それらの氾濫。  
聲の無造作な反響の中に。  
音響は響く。  
逢った。  
見ず知らずのうつくしい獣に。  
どうやって入ったのかも判らない少年。  
あきらかな未成年の。  
美しい獣。  
複雑な照明が一層に幼く見せたに違いなかった。  
獣が喰いちぎる夢を見た。  
醒めた眼差しに。  
わたしのやわらかい肉に立つ牙。  
その痛みを噛んだ。  
だからわたしは少年にふれた。  
その腕に。  
笑んだわたしに少年はさゝやく。  
鳥雅。

あなたは？  
わたしは知った。  
すでにわたしの唇が獣にさゝやいてしまったあとだったことを。  
誰？  
と。  
あなたは誰？  
と。  
だから落とした。  
強情な獣の乾いた喉に。  
喉にふれるそのアルコールに。  
不遜な躰の中をすゝぐアルコールに。  
アルコールの瓶のそこに。  
藤平裕太から奪った小さな錠剤。  
強情な獣をねじふせる爲に。  
その牙がわたしを噛み千切るから。

かくて那岐紗酔いつぶれたる少年を部屋に運びき那岐紗歩ひて數分のマンションの十二階に住ミき故レ多癡婆那ノ阿由美ひとり登喇麻紗をかつぎてエレベーターに乗りき故レ阿由美ひとり那岐紗と俱なりて娑娑彌氣囉玖

喰っちゃうの？  
目眩がした  
犯罪じゃない？  
クラブの湿気  
そういう趣味？  
誰かの汗の  
やばくない？  
分泌液の  
未成年じゃん  
湿気にやられて  
家で少年？  
その充満に  
やばくない？  
目眩がした  
かくて那岐紗  
犯罪だけ  
爾に都儂耶氣良玖  
取り残される。  
笑いながらドアを閉めた歩に。  
橘歩はひとりで下に降りたから。  
歩はわたしを抱きはしない。  
子供を捨てた女を恐れて。

家を逃げた女を恐れて。  
橘歩はわたしを知らなかった。  
わたしの悲しみも痛みも喜びも。  
わずかの微笑さえも。  
まばたく。  
差し込むから。  
昏い部屋の中に。  
月の。  
星の。  
都市の。  
それら無数のだれかの光り。  
だれかも見た光り。  
何かの光り。  
何かも見た光り。  
他人の光り。  
地表の音響は響かない。  
十二階だから。  
まして一度も聞こえはしない。  
地表を掩うさゝやき聲は。  
わたしは見止める。  
まるではじめからそこに居たように。  
少年の眠る姿の火照り。  
夜の光に。  
ベッドの上に。  
わたしの残した体臭の中に。  
嗅ぐ。  
その汗の匂いを。  
彼はわたしを抱けはしない。  
彼はすでに眠っているから。  
肉躰など求めない。  
彼はわたしを罵りはしない。  
嘲りも。  
眠るうちには。  
愛しも。  
憎みも。  
見つめもしない。  
求めはしない。  
心など。  
その心など求めなかった。  
わたしは求めた。

その少年を。  
なにを？  
かくテ那岐紗ひとり登喇麻紗ノ素肌をさらさシその色に見蕩れそのかたちに見蕩れたダ  
心感へば娑娑彌氣囉玖  
流れる  
傷つけないから  
したゝるように  
あなたを  
くずれるように  
けっして  
ちいさいくそれだけ雪崩れたように  
指さえふれずに  
鳩尾に  
わたしは時間を  
そのあせの粒は  
やきつくすのだろう  
かくて那岐紗  
なぜ？…  
爾に都舞耶氣良玖  
少年の近くに添う。  
彼のベッド。  
その眠るベッドの中で。  
すべてを曝して。  
しめられないカーテンのせいで。  
すべてを曝して。  
見つめる視線はなにもないから。  
見つめる人は誰もいないから。  
すべてを曝して。  
あなたと同じに真似をした。  
眠ったふりを。  
眠ったふりをするをする。  
あなたととなりに。  
かくて傍らに登喇麻紗ノ躰の温度ノ感じられたれば那岐紗ひとり娑娑彌氣囉玖  
夢を見る  
喉に恒星が燃えた  
それとも幻  
わたしの喉に  
ねむり墮ちないまゝの瞳に  
なぜならあなたの喉にも燃えていたから  
あくまでも

だから牙を  
眠りを擬態する  
獣はわたしに牙を立てた  
それ  
うつくしいあなたは  
かりそめの瞳に  
恒星が喉に  
夢を見る  
巨大なまゝに  
それともまぼろし  
燃え立ったから  
あざやかに  
飲み込めない  
かくて登喇麻紗ねむりの内にも  
あきらかに  
都儂耶氣良玖  
落ちた。  
匂いの渦が。  
散乱。  
匂いの渦が。  
舞う。  
匂い。  
あまい匂い。  
死んだ鼠の崩壊した肉躰。  
その匂い。  
饅えた匂い。  
腐った魚の。  
牛肉の筋の匂い。  
川の匂い。  
その水の臭気。  
苦い匂い。  
葉を噛んだ匂い。  
草を噛んだ匂い。  
菌類の日影の匂い。  
匂う。  
降り注ぐ。  
匂う。  
だから嗅いだ。  
わたしは。  
その馨を嗅いだ。

かくて夜のうつらうつらに那岐紗ひとり娑婆彌氣囉玖

さゝやく

誰？

言った

わたし？

さゝやいた

何？

いう

誰が？

つぶやく

何するの？

聞いた

何したい？

つぶやいた

やめる？

言った

なぜ？

さゝやく

だれ？

こだます

何を？

かくて那岐紗

ひゞきあい

爾に都舞耶氣良玖

知っていた。

わたしの躰にふれないだろう。

彼は。

うつくしい少年。

残酷な獣は。

ふれえないから。

なぜなら指先一本さえも。

ふれないから。

わたしは。

知っていた。

もはや何をも叫ばないだろう。

彼は。

うつくしい少年。

そのやわらかな喉は。

聲がないから。

齧み千切ったから。



わたしが喉を。  
その喉を。  
知っていた。  
開かないだろう。  
彼は。  
うつくしい少年。  
その臉を。  
何もないから。  
瞼も瞳も。  
こぼすべき涙さえもはや。  
なにもないから。  
わたしには。

聽て明けノ空に朝焼けノ紅蓮の兆シて部屋の中を染メれば登喇麻紗ひとり目を覺まシ故  
れ躬を覆いたる女の見知らヌ全裸を刎ねき故レその肌に女ノながしたる汗を倦ミて倦み  
きるトもなく見れば窓の向カウに空ノ色に見蕩レリ故レすでに眠レル女ヲも返り見ズに  
その窓ノ近くに寄りテひとり娑娑彌氣囉玖

燃える

知らない女は  
何億万回目にも空は  
寢息を立てる  
あざやかに  
それ以外に  
たゞ  
すべを無み  
あざやかというしかない  
知らない女

屈辱に

自分の眠りにさえ  
気付かせもしないで  
そのふかさにも  
だから  
夢の中にも  
おきざりにもせず  
溺れるものを  
とりのこしもせず  
ひとりして

かくて登喇麻紗

空は

爾に

焼けた

都儼耶氣良玖

始めた見たような？

空。

いや。

朝焼け。

もう何度も。

その陽炎。

飽きるほど何度も。

吹き出すような。

無残な。

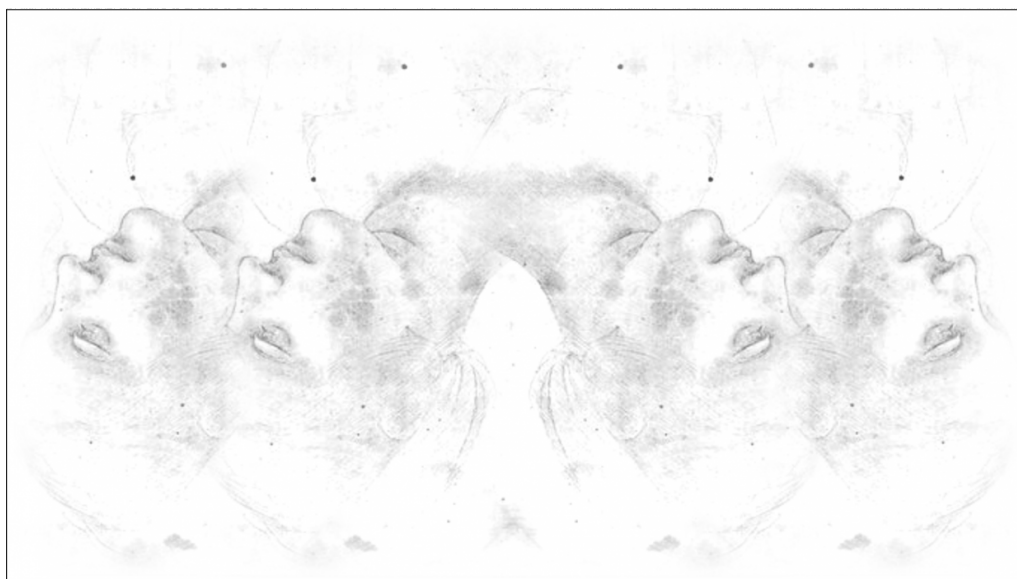
紅。

何度も。

那岐紗亂序蚊頭囉岐第三

啞ン癡 anti 淤瑠我貳翠夢 organism II

2021・01・28 黎マ



## 笥豆波亂序

かく聞き、男ありキ名を阿迦井ノ迦豆波と曰フ時は比登らが古與美貳仟七年故レ登璃  
伎與且つハ斗喇摩沙且ツは迦豆波が齡すでに拾五ノ年を數へき三たり俱なりテ美夜島に  
ありき時に登喇伎與そノ躬の變化すでにとドめようもなくテもハや比登の比登なるかた  
ちダに纒かにもとドめずシテ脉打ちき冷たくテ温度もなき肉の腫瘍ノ下に血を沸騰さす  
且ツは腫瘍にチューブ無數に差シ込みて心臓稼働サす且つは皮にチューブ無數に差シ込  
みて肺臓稼働さす且つハ毛孔にチューブ無數に差シ込みて臟腑かろうじて稼働さす故レ  
宮島ナル祇樹古藤記念園に隔離されてアリきその六月に雨フリき故レ山に樹木の葉ハ濡  
れき故レ樹木の葉ノ翳りに鹿は濡れき故レその毛衣の内に壁蝨ラ血を吸い太らしき故レ  
紫陽花の花ダに雨に濡レき故レ爾に斗璃摩娑ひとり迦豆波と俱なりて雨ノ内に山道を歩  
く雨に葉ノ群れ頭の上に斗與美且つハさしたる傘に雨ハ斗與美弓阿米波しづく故レ迦豆  
波爾に娑娑彌氣囉玖

茫然とする

騒音

俺は

しずかな雨の

茫然とした

すさまじい音響

俺は

轟音

ひとりですでに茫然とした

かさなる微弱な

俺は

轟音

いまにも俺は

すきもなく

まだ俺は此処に

降る

俺は生きていた

雨は

かくて斗璃麻娑

隙も無く

爾に

たゞ鳴り騒ぎ

都舞耶氣良玖

さゝやきかけた。

振り返たその瞬間に。

——なに？

と。

振り向いた和葉に笑んだ。

なぜ？

僕が何も言わない先に彼が嘴ったから。

なに？ と。

彼の言葉を。

齧み砕くようにもさゝやく。

——ね？

唇は。

——知ってた？

僕の。

——何？

——俺、さ。

——濡れちゃう。

——ぜんぶ、壊せちゃう。

——俺たち。

——俺、…

——横殴りの雨になる

——べつに壊したくないものでも。

——だから

——ぜんぜん壊したくなくて。

——ときどき

——むしろ愛してゝ。

——横殴りに濡れる。

——それで壊しちゃったらむしろ泣き叫んで。

——大丈夫？

——悲しくて。

——寒いの？

——吐き気するほど悲しくて。

——濡れたから？

——内臓全部口からでちゃうくらいに悲しくてでも。

——横殴りの雨に？

——そんなものでも。

——濡れたから？

——毀せちゃう。  
——大丈夫？  
——俺。  
——震えてる  
——知ってた？  
——お前…と耳元でさゝやく和葉の頬に口づけた。  
わかった。  
閉じた眼にも。  
周囲を気にする和葉の気配が。  
開かれた儘の眼差しの気配は。  
樹木の影に鹿を見た。  
和葉の眼差しは。  
すでに道でない草邑の傾斜に。  
削られた角。  
人々が削った。  
彼等に危害を加えないように。  
此処は彼等の領土だから。  
だから彼ら以外のすべての物の駆逐を願った。  
飛び交う鳥に裏切られつゞけながら。  
野良犬の足音に裏切られつゞけながら。  
猫の鳴き声に裏切られつゞけながら。  
赦した鹿の角にだに怯やかせられつゞけながら。  
見えない細菌にさえ裏切られつゞけながら。  
野放しの蚊に時に意図もされずに駆逐されさえしながら。  
——何言ってるの？  
和葉が云った。  
だから答えた。  
——俺？  
だから和葉がさゝやく。  
笑み乍ら。  
愛。  
——なに、言ってたの？  
愛する人。  
だから僕は応えた。——毀せる。  
——なに？  
——俺。  
——なにを？  
——ぜんぶ。  
——俺も？  
——なぜ？

——なにを？

——俺、ぜんぶ壊せる。

かくて爾時ふたり別れき所以者何すデに咎豆波が家を前ナル故なりき故レ咎豆波ト別レ  
て斗璃麻娑ひとり躬づからノ聲に娑娑彌氣囉玖

なぜ？

雨の中に

わたしは彼を殺さなかったのだろう

ふる雨の中に

なぜ？

それでもなおも

わたしは僕を殺さなかったのだろう

ひと聲啼いた

なぜ？

鳥は残した

彼は僕を。

みじかい羽搏きの音をだけ

なぜ？

かくて斗璃麻娑

頭の上にも

爾に都舞耶氣良玖

頸を吊ったのは知っていた。

加賀淨雅が。

自分の部屋でひとり。

何故？

その部屋には朝日があたるから。

何故？

その部屋の窓は東に向いていたから。

纔かに斜めに北にも傾いて。

淨雅は。

だから通報しなかった。

だれにも。

俺は。

彼の死を。

夢の中で珠美は云った。

あれがあなたゝちの父だと。

本当のあなたゝちの父だと。

なんども夢に現れながら。

狂った女は。

俺と酉淨に母胎を貸したその女は。

ひとりでは何も生み出せもしなかったその女は。

酉浄を人でないものにしか組成できなかつた胎の宿したイノチ。  
女は。  
狂った目で花を喰いながら。  
あれがあなたの本当の父と。  
かれこそは何度も私を姦した。  
指先で  
六歳の私を。  
匂いを嗅いだ。  
七歳の私を。  
舌の味に至近に見せた彼のかすかな笑み。  
八歳の私に。  
肌を感じた。  
その素肌の体温を。  
九歳の私の。  
髪を囓む。  
十歳の私の。  
手のひらになぞる。  
十一歳のかたちを。  
望みを果たす。  
十二歳の私で。  
躬づからの指に救い取った躬づからのそれを。  
浄雅は私の鼻に嗅がせた。  
その臭気を。  
笑み乍ら。  
文果にもだれにも秘密にし通した唇に塗った。  
笑み乍ら。  
だから腫瘍に塗れた。  
あなたは。  
だから穢い血と瀛にも。  
酉浄は。  
だから死んだ。  
古布高樹は。  
だから死んだ。  
桂樹文果も。  
だから狂った。  
わたしは。  
あなたが狂ったのは彼のせいだった。  
あなたが醜いのは彼のせいだった。  
と。  
さゝやいた。

珠美は。  
その夢の中に。  
部屋の中に彼を確認した。  
彼が蘇生しているかどうか。  
冷たくなったまゝに彼はただ屍の色を曝した。  
ぶら下がったまゝで。  
体液をだけ腐り始めさせて。  
思う。  
その体液さえ彼なのだろうか。  
吐き出された糞尿さえも？  
糞尿は器官の廃棄処理した異物に過ぎない。  
ならばイノチはことごとく器官に属さなければならない。  
故にイノチに生産はない。  
如何にしても。  
それは須く器官の処理した異物に過ぎない。  
だからイノチはなにも生まなかつた。  
その現実に獲堪えられる人はいるのだろうか？  
堪えられる現状の人的思考様式は？  
待った。  
静かにかれの腐り始めるのを。  
彼だけの腐敗を。  
或は蠅が卵を産むのを。  
群がる蛆ら。  
イノチの繁茂。  
僕はそれをも美しいと思うだろう。  
事実それは美しいから。  
腐った肉を喰う最近の群れ。  
繁茂する。  
イノチら。  
なにも生み出さず所詮すぐさまに滅びるにしても。

かくテ斗璃麻娑その骸ぶら下がりたる部屋に暫シ時を過シて屍の馨を鼻に嗅グ且つハ屍の色を眼差シに見る且つは屍の温度を指に計ルかくテ夕暮を窓に見キ故レ日は没みキかくて斗璃麻娑が兩の眼爾に夜ノ昏む色を知りき故レ斗璃麻娑まなザしに斗璃伎與の目ノ前に大口開けたルを見キ厥レ腐臭漂ふて斗璃麻娑思へらく波良和多ダにも腐れるやトしかすがにすぐさまに想へらく厥レただの波良のうちの匂ヒし匂ヒきとかくて観る夢を覺めテ夜の昏む色をふたたびに知りき故レ斗璃麻娑まなざシに多麻美の目の前に開ケたる大口に伸じる舌を見キ厥レ紫なす色をさうして斗璃麻娑思へらくすでに此ノ生き物死んで朽ちたるやトしかすがにすぐさまに想へらく厥レたダの色まなざしに逸る色故かノ人の息たるや死にたるや知らズとかくて観る夢を覺めて夜ノ昏む色をふたたびに知りき故レ斗璃麻娑まなザしに布美蚊の肉ノ目の前に腐り落ちたるを見キ厥レ床に飛び散り玉



散って斗璃麻娑が頬ダに濡らし故レ爾にひとり思へらく俺も今？

今。

俺も死んだ？

しかすがにすぐさまに想へらくすでに？

俺は一度も生まれなかった。

息て息づき息遣いながら。

俺は一度もトかくて観る夢を覺めテ夜の昏む色をふたたびに知りき故レ廳而麻那古は見  
き空すデに明けの兆しを曝すを色ダにも氣配だにもなクたダ心が内に夙夜ハその夙夜を  
果てつつある須臾をさまざまに兆しつづけき何以故夙夜ノ夙夜那利婆那璃故レ斗璃麻娑  
ひとり娑娑彌氣囉玖

目を覺ました気がする

もうすぐ

醒めつゞけていながら

明ける夜は

眠りもしなかった時間の中に

空に兆す

我に返ったように？

夜の滅びた

だからわたしはひとりで息を吐く

残骸の

かくて斗璃麻娑

その紅蓮を？

爾に

悼みもしないまゝ

都儂耶氣良玖

山道を下りた。

外に出ると明け始めた空が紅に切れたから。

ひとり土の道を。

樹木の脇に。

竹が薫った。

いつでも竹は。

だから山道を下りた。

和葉の家である必然はなかった。

和葉で在る必然も無かったように。

だから山道を下りた。

路の下り切らないそこに和葉の家は在ったから。

和葉の家のベルを鳴らした。

僕はその戸の前で待った。

背後に朝日は耀いていた。

省みさえすれば目は見た筈だった。

だから背中に光はあたっていた。  
温度も無く。  
光に翳を纒かにだけ這わせながら。  
誰も出なかった。  
僕はもう一度ベルを鳴らそうとした。  
氣配があった。  
耳に聞こえた気がした。  
耳元に。  
耳の奥に。  
夫婦の聲。  
女の方が云った。——誰？ と。  
だから男の方が云った。  
何かを。  
女が何か云った。  
何かを。  
憤りを隠さずに。  
だから男が云った。  
何かを。  
僕は知っていた。  
耳は聞いていた筈も無かった。  
聲などなにも。  
耳に聞こえた音響は何もなかったから。  
頭の上の斜め上の葉のこすれた音響以外に。  
僕はもう一度ベルをならそうとした。  
だから戸は開いた。  
不愉快な素直な顔は素直に笑んだ。  
邪気も無く。  
女の顔は僕を見たから。  
僕を誰もが知っていた。  
だから彼女も知っていた。  
和葉の母親に違いなかった。  
見覚えが無かった。  
あざやかすぎるほどに見覚えのない顔だった。  
和葉の母親の顔は知っていた。  
なぜ？  
と。  
なぜ彼女に見覚えが無かったのだろうか？  
その顯らかな不可解が僕を笑ませた。  
だから彼女は僕に心を赦した。  
すでに彼女は赦していたから。

心を。  
僕に。  
誰もが知っていた。  
僕を。  
その美しく素直なやさしい少年。  
啼き臥したくなるほどに稀な苦難の息物。  
狂った母親をいたわった。  
虐待の祖父に堪えた。  
それでもいつも穢れなく笑んだ。  
まるで苦しみなどなかったように。  
畸形の兄乃至弟は死に懸けのイノチを貪り続けた。  
意識さえなくただ喉という器官に呻いた。  
苦痛の？  
絶望の？  
誰もがそう思った。  
同じく知っていた。  
誰もが。  
まさか苦痛など。  
その糜れた瀛みに。  
まさか絶望など。  
その臭む瀛みにも。  
意識さえなく器官が空気をゆらがす音響に過ぎなかった。  
その叫びは。  
彼は苦痛を認識できはしなかった。  
彼の肉に刃物をさしても。  
彼の肉にしるびこんだ獣が牙さしても。  
彼は絶望など發し得なかった。  
彼が三秒後に死ぬと知っても。  
僕が頭の皮を引きちぎり彼の目の前で死んだとしても。  
死んだ方が幸せだとだれもが思いながら。  
西浄は生き延びつづけた。  
誰もが僕を愛した。  
美しくそして不幸だったから。  
だから赦した。  
見知らない女は僕をだけ。  
その微笑の美しさの絶望的な不幸をだけ。  
故レ斗璃麻娑ひとり阿迦井ノ由美蚊と俱なりテ娑娑彌氣囉玖  
どうしたの？ と  
さゝやく  
女は云う

いる？ と  
さゝやくように  
鳥雅はひとり呟き  
たぶん弓香  
すぐに言い直した  
あなたの母親は  
います？ と  
老いさらばえかけた皮膚に必死で笑んで  
何も言わないわたしをようやく  
せめてもわかやぎ  
見上げた  
せめて女らしくも  
鳥雅は  
こんな早くに、と  
笑んだ  
諫める気配さえ匂わさずに  
まるで今此の時には微笑む以外に術など無いと  
やさしく  
みずから知っていたかのように  
なにも云わないわたしに  
説きふせるかのようにも  
ただ笑むしかないわたしに  
鳥雅は笑んだ  
弓香は笑む  
祖父を殴ったに違いなかった  
わたしの笑みにかさなるように  
あまりにも救いがたい関係  
わたしの笑みに競りあうように  
誰もが知っていた  
だから彼女は不意にささやく  
あまりに過酷な運命が少年の拳に暴力を与え  
入って、と  
自らの暴力に彼はひとり傷つくしかない  
言い終わらないうちにも問う  
だからひたすらに  
和葉？ と  
鳥雅は傷ついていた  
答えも待たずに  
います？…もう  
だから彼女は自分にさゝやいた

と  
待って  
彼  
と  
和葉、もう  
まだ寝てるから  
起きてます？  
と  
さゝやく少年に  
彼女はひとり奥に行こうとする  
せめて微笑む  
かくて斗璃麻婆  
彼だけのなにかゝらせめてしばらく  
爾に  
逃げ出そうとした少年の爲に  
都舞耶氣良玖  
我を忘れた。  
不意に。  
殊更に笑んだ俺に。  
その目の見た微笑に。  
阿迦井弓香は。  
だから俺はその脇を通り抜けた。  
未だベッドの中を引きずる寝汗の洗い流されなかった匂いが漂った。  
わたしは一瞬だけ息を止めた。  
その匂いが痛ましい程に惨めに想えたから。  
和葉の部屋は知っていた。  
何度も来たから。  
和葉が俺の部屋をよく知っていたように。  
だから俺は階段を上がった。  
夫婦の寝室のはず向かいに彼の部屋があった。  
妹の部屋の正面に。  
縷子の。  
だから彼の部屋の戸を開けた。  
扉は軋みもしなかった。  
縷子の部屋で衣擦れの音を聞いた気がした。  
彼女は目覚めたかも知れなかった。  
和葉がひそかに愛し続けた妹の。  
獺馬が顯らさまに戀した縷子の。  
その胸にわたしに焦がれつゞけた十二歳の縷子の。  
彼女は目覚めたかも知れなかった。

彼女は知らなかった。  
わたしが誰かを。  
兄の部屋の戸を開けたのが誰か知らなかったから。  
だから彼女は知らなかった。  
私が誰かを。  
だから俺はすでに忘れた。  
縷子も。  
縷子のたてた衣擦れの音のかすかも。  
和葉は寢息を立てゝいた。  
彼は寝ているに違いなかった。  
閉じられなかったカーテンに朝の光はさした。  
たゞ暗く。  
冷たく。  
なぜ？  
山際の南西向きの部屋だったから。  
だから影のように光りはさした。  
飽く迄も光りでこそありながら。  
俺は和葉のベッドの上に乗った。  
その時だけマットレスがきしんだ。  
乃至はベッドの板材が？  
スプリングが？  
何が？  
誰も居なかった。  
背後には。  
振り返るまでもなく。  
戸は明け放たれたまゝだったにも他ならず。  
和葉の頸を絞めた。  
息がつまる。  
喉に。  
鼻に。  
思い出した。  
俺は珠美の頸さえ閉めて殺した。  
思い出した。  
そのあざやかな記憶。  
同じく珠美をなど思いもしなかった。  
だれのことをも。  
たゞいきなり目を開いた和葉以外には。  
和葉の目が俺を見詰めていたから。  
目は知らなかった。  
俺が誰かを。

起き抜けに死に懸けた窒息の和葉は。  
すでに目は何も見えてはいなかったから。  
俺の顔だけを見つめながら。  
開かれた大口が舌を出した。  
思い出した。  
酉浄の口を引き裂いたときのことを。  
わたしが海に身を入れる前に。  
逃走の果てに行き場所もなくて。  
海に死ぬために遠浅の波をひたすらに歩いた。  
遠い沖に。  
なんども砂に足をすくわれながら。  
溺れそうになる度に躬をおこした。  
沖に歩く。  
溺れる爲に。  
思い出していた。  
酉浄の引き裂かれた口を。  
息は吐かれなかった。  
和葉の口蓋は。  
すでに吐かれるべき息などなかったかにも？  
もとから息などありもしなかったかにも。  
なかなか和葉は死ななかつた。  
どうしようもなく死に懸けながら。  
だから俺は焦燥の内に彼の死を願った。  
和葉の孔のこぼした彼の体液の匂いに噎せる気がしながらも。  
故レすでに死に絶えたる蚊豆波の頸をさらにだに絞メ続けながら斗璃麻娑ひとり娑娑彌  
氣囉玖  
完全に  
なかつた  
顯らかに彼を死なせる爲に  
憎しみなど  
蘇らないように  
和葉に。だから  
完全に亡びる爲に  
知った。瞼は  
肉の存在  
僕の流す  
死んでいまだに滅びもせずに  
涙の温度を  
たゞ肉はそこに  
かくて斗璃麻娑

自分の死をだけ曝した  
爾に都舞耶氣良玖  
その時に知った。  
振り向き見た眼は。  
気配に感応したわけでもなく。  
ただ惰性のうちに振り向かれた眼差し。  
弓香は僕たちを見ていた。  
部屋の戸の傍らに。  
息をひそめるともなく。  
立ち尽くす。  
弓香だけが。  
立ち尽くすともなくただその二本の足でたつ。  
弓香だけは。  
戸に背もふれないで。  
指先さえ何にもふれずに。  
弓香は。  
牙す表情もなかった。  
それを不審にも思わなかった。  
弓香は自分が生んだ子供のひとりが僕に殺されるのを見ていた。  
だから知っていた。  
弓香も。  
和葉の死をは。  
だから弓香は僕たちを見ていた。  
死んだ和葉と僕を。  
その朝の日ざしの洩れ込む直射の中に。  
綺羅らぐ。  
斜めに入り込むそれは。  
綺羅らがせた。  
空中に舞った埃りをさえ。  
空中に散った塵りをさえ。  
僕はまばたく。  
だから僕は見ていた。  
弓香のただ澄んだ目の凝視を。  
思った。  
彼女に言葉を掛けるべきだった。  
何か。  
だから僕は立ち上がる。  
息をつきながら。  
知る。  
僕の息があらゝいでいたのを。



臭う。  
自分の肌の薄くかいた汗の馨を。  
他人の馨のような臭気。  
かたわらに近づくのを咎めなかった。  
僕の躰の接近。  
弓香は。  
なぜ？  
ふれあうほどの至近に僕を見ていた。  
彼女より纔かに背の高くなった僕を。  
弓香は何か言いかけた。  
ひらく唇が言葉にふれる前にさゝやく。  
僕の唇は、——大丈夫。  
と。  
なにが？  
思う。  
僕は。  
さゝやく。——あなたを殺しません。  
なぜ？  
思う。  
僕は。  
だからさゝやいた。——俺は、誰も殺さない。  
聞いた。  
自分のその聲。  
やゝ低めのアルト。  
まるで聲の低い女聲のようなアルト。  
たぶんだれもが一度聞けば記憶する。  
特異なアルト。  
弓香は瞬いた。  
涙も無く。  
その瞬間に乾いた…違う。  
充分潤んだ、けれども涙の霑いをは知らない目は。  
その表面は。  
瞬く。  
何度か。  
みじかく。  
早く。  
故レ斗璃麻娑ひとり阿迦井の家を立ち去りき故レ阿迦井ノ由美娑ひとり迦須波が部屋に  
娑須波をみつめて爾に娑娑彌氣囉玖  
死んだ肉躰はもはや傷まない  
いつ？

死んだから？  
いつふれたのか  
死んだ肉体はもはや  
死に  
顯らかな死  
その肉體は  
すでに顯らかに死んでいることをだけそこに曝して  
微動だにせず  
恥ずかしげもなく  
理不尽に想えた  
飽く事もなく  
その予測だにない  
倦むこともなく  
一瞬に  
無き殻という言葉の正しさをのみ見せつけた  
いつふれたのか  
死んだ肉軀はもはや傷まない  
その肉體は  
ただ静かに  
死に  
彼らにだけ咀嚼の轟音を立てながら  
彼の死に  
無音の内に腐る  
無限に短いその一瞬に  
喰いつく細菌の群れ  
踏み越えた先には  
彼らをだけ自分の立てた轟音の内に  
もはや生も  
歓喜させ  
死もないいわば  
かくて由美智  
容赦もない他人の時間  
爾に都舞耶氣良玖  
泣くべきだったろう。  
それともわめく？  
あるいは彼を羽交い絞めして？  
和菓を？  
鳥雅を？  
わたしから和菓を奪った鳥雅をなぶりものにする？  
生まれて来たことを後悔させてやるほどに。

その肉と魂を責める。  
そうするべきと。  
他人の死。  
わたしは見ていた。  
それは他人のした出来事だった。  
或は他人の体験だった。  
和葉を殺したのは鳥雅だった。  
鳥雅の和葉は鳥雅に殺された。  
わたしの和葉。  
だれにとっても和葉はそこにひとり曝す。  
みずからの無き殻を。  
わたしはせめて泣き叫ぶべきだった。  
聲が無かった。  
他人の死。  
予測だにしなかった他人の。  
不意の。  
わたしはすでに他人だった。  
他人の息遣いの内に生きた。  
聲が無かった。  
叫ぶべき聲がなかった。  
沈黙したわけではなかった。  
沈黙ができなかった。  
だからたゞ言葉を失った。  
鳥雅の和葉は鳥雅が殺した。  
ならばわたしの和葉は死んでさえいなかった。  
わたしは彼を殺さなかったから。  
わたしの彼の死を見なかったから。  
和葉はひとりで屍を曝す。  
誰かの無き殻を。  
その無き殻を。

かくて由美智その朝に背後に阿須紗ノ怒号を聞き、阿須紗は由美智が夫なりき故レ智須波が父なりき故レ智頭羅兒が父なりき故レ耳もとに響ケる怒号に我に返りて由美智返り見たるに驚愕ノ阿須紗目を剥いて喚く故レ爾に阿須紗そノ目に息子が亡きがらを見き故レ阿須紗そノ麻那古に息子の死にたるを見止めき故レ由美智の喉だに喚ケば聲とよむ故レ起きたる智須良古ひとり慄き近所に大人を呼び起こシきかくて救急車遺体を奪いて去りき後に警察等阿迦井ノ家に雪崩れ込みきかくて彼等さらに遺体を奪ヒて去りき故レ一週間の後に返せり殺シたる人の名を誰も知らざりき何以故由美智気が付ケば智須波の死にたるを見きが故なりき故レ由美智その殺シたる人の名を知らズ由美智は嘆き忿怒せりそノ死を歎きその被煞に瞋る且つは阿須紗は嘆き忿怒せりそノ死を歎きその被煞に瞋る且つハ蚊頭羅古はたダひたすらに嘆くそノ死を歎き又その煞したる人を知りたる故なり

き故レ罇豆囉古ひとり兄の葬儀のうちにも娑彌氣囉玖  
知っていた  
鳥雅に頸を差し出すのを  
すでに  
和葉が  
和葉の息であった比から  
その紫の花々の咲く上に  
なぜ？  
鳥雅に微笑んで見せるのを  
見た  
和葉が  
その夢に  
さゝやく聲は聞き取れなかった  
なぜ？  
あるいは和葉の耳も  
夢を？  
聞き取りはしなかった  
わたしは見たのだった  
さゝやく自分の聲を  
紫色の花  
血を流した  
薄紫いろの花の咲く  
鼻からも  
花の敷き詰められた遠くまで  
口からも  
遠くまで花の敷き詰められた  
すべての孔から血を流す  
花の紫の上に  
鳥雅の眼の  
見た  
その正面で  
すでに  
和葉は  
夢に  
だから  
かくて迦豆囉古  
花さえ血にまみれた  
爾に  
その夢を  
都儂耶氣良玖

言った。  
母は。  
殺してやると。  
殺した男を。  
何故ひとりだけ？  
なぜひとりだけ和菓を。  
弓香はひとりそう喚く。  
そして父は無言で齒噛みする。  
音を自分の耳には聞きもしないで。  
聞かせた。  
齒噛みの音は。  
他人の耳にだけに。  
沙門圓位は無造作に歎いた。  
馴れきった所作で。  
みずみずしいそのかなしみを。  
沙門圓位はその顔にも曝した。  
だからだれもが悲しんだ。  
慰問の客は。  
だから誰もが怯えた。  
不意の絞殺に。  
姿の無い殺人者の徘徊に。  
翳く涙の温度があった。  
弔いの部屋の空気の中に。  
知ってる？  
と。  
わたしはつぶやく。  
涙には容赦もない温度がある。  
湿度さえも。  
何故ならそれは物質だから。  
息物の生産した物質だから。  
わたしはつぶやく。  
だれに？  
わたしに？  
ただ喉の奥の方にだけ。  
悲しみが私の心を裂いたから？  
悲しみが喉の奥に血の味をさせたから？  
悲しみが指の先を冷たくしさらにこまかい痙攣さえさせたから？  
だれも悲しみに沈んだ。  
鳥雅は沈む。  
だから彼の悲しみに。

溺れる。  
あがきもせずに。  
その流した滂沱の涙を見た。  
わたしの眼も。  
慰問の客のすべてと俱に。  
たすらに素直に歎く彼の。  
鳥雅はさらに温度を与えた。  
涙の温度を。  
その湿度を。  
振り返った彼の私に無理やりに微笑んだ。  
彼は。  
——泣いちゃだめだよ。  
ふるえる聲で。  
——笑って送ってあげて。  
まばたくたびに  
——妹だろ。  
涙をこぼし。  
知る。  
その時に。  
すでに私は泣きじゃくっていた。  
壁にもたれて。  
ずり落ちたように床に座り込み。  
口を広げて。  
顔を上げたまゝ。  
わたしはすでに泣きじゃくっていた。  
かくて埋葬だに終われば由美迦ひとり娑婆彌氣囉玖  
鳥雅の笑んだ顔を思った  
夢にも見た  
背にした屍をその美しい  
その苦しみを  
体軀で意図無く隠して仕舞いながら  
斷末魔のその苦しみを  
それを惜しみもせずに  
くりかえし  
笑む素直な鳥雅の微笑を思った  
夢にも見た  
かくて由美迦  
醒めた瞳のうちにさえも  
爾に都舞耶氣良玖爾  
だれにも殺されはしなかった。

だれにも奪い去れはしなかった。  
すでに容赦もなく無かったものを誰が？  
誰が殺せなど出来たのか。  
誰が奪えなどできたのか。  
殺戮も窃盗もだれかゞ与えた不当な歪んだ概念に過ぎない。  
そんなもの一度さえあったことなどない。

かくて斗璃麻娑海邊の道に加豆羅古ヲ見き故レ聲かけたれば笮豆囉兒笑んではじらひて  
又笑ム故レふたり俱なりテ海岸に降りき引き潮に海は遠くに沙は日の光にたダ白濁せり  
故レ斗璃麻娑ヒとり娑娑彌氣囉玖

轟音を  
和菓の痛みが僕を噛んだ  
覆いつくす轟音を  
齧み千切る  
怒号にも似た  
壊れていく  
その轟音を  
和菓の痛みが赤裸々に  
掩う耳の  
僕を噛んだ  
奥に木魂す  
無数の歯で  
その轟音を  
無数の口で  
かくて斗璃麻娑  
僕を噛んだ  
爾に都舞耶氣良玖

吐く。  
毎晩。  
俺は。  
吐く。  
朝にさえ。  
吐く。  
かたわらに縷子は遠くを見た。  
かたわらの私をだけ見つめながら。  
その何も見えない視界に。  
恋した眼差し。  
その温度の内に。  
縷子はかすかに笑んで見ていた。  
遠くを。  
吐く。

俺は。  
毎晩。  
吐く。  
人の眼を離れて。  
ひとりで吐く。  
後悔も無く。  
罪の意識もなく。  
吐く。  
俺は。  
綾子は俺を見上げた。  
すこしもたげた顎に。  
見つめる私のまなざしに気付き、彼女は。  
恥じらう色をさらすと思った。  
そんなものなにもなかったのに気付いた。  
見つめた。  
恥ずかしげもなく。  
綾子は追い詰められたにも似た開いた眼で。  
わたしを。  
だからわたしは何も言わなかった。  
綾子がわたしを強姦したのを私は知った。  
その眼差しをもて。  
彼女の。  
眼差しの内にだけ。  
かくて迦豆囉古娑娑彌氣囉玖  
忘れた？  
知ってる？  
まさか  
もうだれのものでもなかった  
兄の指先  
知ってる？  
唇にふれた  
夢に知った  
恐れを知らない  
あなたのせいで  
兄の指先  
わたしはもう  
忘れた？  
だれのものでもなかった  
まさか  
さゝなむ



記憶したわけでもく  
波の音  
零れだす記憶さえ  
さゝなむ  
海の音に  
くだけちる  
零れおちて消え  
無際限の  
かくて蚊頭羅兒  
その波の音  
爾に都舞耶氣良玖  
鳥雅が唇を奪おうとするのは知っていた。  
その爲に和葉を殺した。  
その夢の中で。  
わたしの夢の中でも。  
奪われた。  
唇を奪おうとする鳥雅のその顎が動き出す前に。  
私は。  
すでに。  
過去も未来も。  
イノチも死も。  
なにもかもを。

智豆波亂序蚊頭囉岐第三

啞ン癡 anti 汚瑠我貳翠夢 organism II

2021・01・25 黎マ



## 多毗登亂序

かく聞き、男ありき名ヲ牟良左米ノ多毗登と曰フ齡四十六なりき時ハ比登らが古與美ノ  
貳仟貳仟年ナリき故レ登璃伎與が齡スでに拾八ノ年を數ヘキひとり美夜土摩にソの肉腫  
を肥大化さし糜れ肌と瀛ミとを纏フ故レ同ジくに斗喇摩沙が齡すでに拾七ノ年なりきヒ  
とり斗宇伎夜宇ノ阿邪儼にありき所以者何多毗登ひとり阿邪儼に住ましし故なりき多毗  
登ひとり斗美遠迦ノ那岐紗と麻俱和比伎故レ多毗登爾に左丹都羅布登喇麻沙を愛デき所  
以者何那岐紗登喇麻沙と美登能麻俱和飛シたるが故なりき故レ斗璃麻沙その心に娑娑彌  
氣囉玖

裏切る

ふれゝば？

僕は

のぞむなら

誰をも

ぼくに

自分をさえも

その発情する指に

眼差しの見出す

その発熱する指に

風景をさえも

肌に

僕は裏切る

唇に

なぜ？

盗み見ながら

かくて多毗登

ぼくは

爾に

たゞひたすらに裏切り者だったから

都儼耶氣良玖

言った。

渚は。

彼…

ね？  
と。  
渚は。  
わたしの男だったりする。  
笑み乍ら。  
邪気も無く。  
素直に。  
その唇に。  
さゝやく。  
綺麗じゃない？  
——どこで拾ったの？  
俺は云った。  
彼女をひそかに軽蔑しながら。  
いつものように。  
クラブ。  
渋谷の。  
と。  
迷い込んでゝ…  
それで、と。  
眩く渚の声を聞いた。  
莫迦な女。  
その躰以外に何の取り得もない。  
頭の中に虫を這わせた。  
莫迦な女。  
富岡渚の声を聞いた。  
彼女の笑った声を聴いた。  
意図してちかづけられた耳元に。  
——好きなの？  
だれが？  
——本気で？  
あざ笑う。  
渚は。  
あざ笑う私の声をむしろ。  
その軽蔑の上にかさねてわたしを軽蔑した。  
彼女のその躰以外に興味もない私を。  
だからわたしは彼を見た。  
桂樹鳥雅という名前。  
白い肌の。  
それをベッドの上に載せ自分の居場所を確保する。  
あくまで他人のベッドの上に。

だれかのベッドの上に。  
わたしの起き出たベッドの上で。  
封鎖された麻布臺。  
その三月。  
新手の疫病のせいで封鎖された。  
嚴重防備都市。  
だれもが怯えた。  
その体温に。  
皮膚の匂いに。  
細胞の息吹き。  
滅び始めた俺たちのかたち。  
その生態系の斷末魔の時。

時に比登らそノ弐仟仟九年ノ十二月に未知ナル疫病を知ル比登らリチャード・ウェイン氏症候群と名ヅク是レ伝染病なりき比登羅そレ志那の地にはジまると知ルかくて極小ウイルス已に國境を越えり故レ貳仟二十年ノ二月登宇伎夜宇ハすでに封鎖されたりき故レ那岐紗ひとり登喇麻紗と俱なりて志舞耶なる部屋の中に籠れりかくて時に阿邪舞に詣ヅ是レ多毗登と麻俱和布が爲なりき登喇麻紗ひとりと俱なり故レ爾に登喇麻紗ひとり袈娑彌氣囉玖

微笑を  
閉じない儘  
纒かなすこしの  
臉を  
微笑をあなたに  
閉じない儘に  
あなたの立てた  
いつも  
故意のその聲に  
いつもあなたは  
故意のその痙攣に  
ぼくは笑う  
村雨旅人の爲にはなかった  
そのいびつな表情に  
知っている  
不本意に  
それはあなたの爲に  
奸されるかの  
あなた自身の  
犠牲者であるかの  
すみやかな  
あなたのその

あなた自身への埋没の爲  
いびつな  
かくて那岐紗  
あなたが感じるべきだった  
爾に  
その恍惚への  
都儂耶氣良玖  
町は死んだ。  
人が死んだから。  
大量に。  
放棄し始めたから。  
人が人であることを。  
その細胞に。  
誰もがそれを疾患と呼んだ。  
覚醒しただけだと知りながら。  
細胞の群れが。  
それ自体が自由に。  
あまりにも自由に。  
すでに人のカタチなど放棄して。  
その奔放な自らイノチのかたちに。  
覚醒しただけだと知りながら。  
細胞の群れが。  
猶も人々は疾患と呼んだ。  
その肉躰を。  
そのカタチを。  
結末の見せかけりそめの形態を自由に溶きほぐして見せる。  
微熱の内に。  
甘い匂いを放ち始める覚醒ノ時に。  
町は死んだ。  
もうすでに古びて仕舞ったから。  
人の生態が。  
その在り方自躰が。  
つまりは蛇が殻を脱ぐように。  
つまりは蝶が蛹のかたちを捨て去るように。  
多毗登かくて那岐紗と麻俱和飛畢りたるに聞くその息の音那岐紗ノ鼻の吐きたる爾牟偈  
牟の寢息を故レ随毗登知れり那岐紗いマだに爾牟偈牟なりき爾時返り見たる窓の向こう  
に月の光照りキそノ色白かりき所以者何そレ明けの空の月阿利阿祢能都伎ナルが故なり  
き故レ眠りモせずて壁にモたれて床に寐ソベル登喇麻紗を見れば爾に娑娑彌氣囉玖  
傷ついた魂  
おびえてる？

お前はいつでも昏い眼をした  
絶望してるの？  
ふたりのときも  
いまさらに？  
さんにんのときも  
何に怯える？  
だからお前しか知らない  
ましてや絶望  
その  
もうすぐぼくらは滅びてしまう  
ひとりの時さえ  
跡形もなく  
お前はその昏い眼に笑う  
廢墟はやがて消え失せるだろう  
そうに違いない  
茂る樹木の  
自分勝手に  
その好き放題の繁茂の内に  
お前固有の自分の都合で  
遠い先住動物たちの  
勝手に傷ついたに過ぎない息物  
残した遺跡の痕跡として  
うつくしいだけが取り柄の  
もしもいつか意識が目覚めたならば  
無口な存在  
人と同じような  
かくて登喇麻紗  
知性のカタチが目覚めるのならば  
都儼耶氣良玖  
足の下に聲がした。  
女の悲鳴。  
壁の向こう。  
遠い下に。  
スラグの向こう。  
地表の近くに。  
多分誰かが覚醒したのだ。  
その細胞の。  
完璧すぎる萬能化。  
多分誰かが覚醒したのだ。  
死にさえせずに。

ただ人の知性の殻を破って。

痕跡さえも残しはせずに。

かくて多毗登その登喇麻紗の多毗登を見詰メタル眼差しを見きすデに夜ハ明けたりき多  
毗登思へらくすでに壁の向カウの空ノ朝焼けダにも燃え墜ちたるやらんと故レ窓ノ向カ  
ウに西の空はたダ澄ムで澄ミ渡りひたすらに青白ミきかくて爾に眠レル那岐紗ひとりソ  
のころに娑娑彌氣囉玖

這った

痛みを

血管の中を

もっと痛みを

夥しい百合の花が

せめて生きると

その芳香を撒きながら

まだ生きているのだと

その血の色にさえ

自覚させるだけの

穢れもしないで

せめても痛みを

真白いままに

棘むしていれば

纒かに黄ばんで

旅人のそれが

這った

釘の棘で

血管の中を

錆びた釘の

さきほこる百合

曲がった棘で

花の無数は

密集していえば

わたしは花をさかせるだろう

痛みを

だから

せめて痛みを

ふいに拓いたこの口蓋に

もっと痛みを

喉の奥にも

むしろ生むべきか

その花を

最後の時に



白百合の花を  
滅びて行く  
かくて多毗登爾に  
種族の最後を  
都儂耶氣良玖  
ひとり立ち上がる鳥雅を見た。  
昨日の朝には鳥雅を抱いた。  
肛門に咲く花の夢。  
鳥雅はひとり息をつく。  
たちあがって。  
歩く。  
どこに？  
窓のちかくに。  
見ていた筈だった。  
その目。  
彼の眼差しは。  
すでに明けた空。  
ただ青い。  
わたしはひそかに目を閉じた。  
鳥雅の気配を感じる爲に  
聲を聞いた。  
——なんで？  
と。  
その鳥雅の聲。  
——おかしくなった？  
そのさゝやいた聲。  
——俺の眼…  
と。

かくて登喇麻紗ひとり聲にも娑娑彌氣囉玖  
見えた  
たなびく  
その色  
雲は  
薄紫の  
ながれる  
色  
雲は  
空の  
たぶん  
千切れた雲

上空は激流  
雲さえも  
風の  
色  
すさまじい  
薄紫の  
破壊的な迄の  
はじめて観る色  
ながれる  
かくて多毗登  
かたちをくずさないまゝにその雲  
爾に  
目を覆うばかりの強靱  
都儂耶氣良玖  
俺は見ていた。  
瞼の内に。  
その窓を開け放つのを。  
鳥雅が。  
渚がすぎるその肉躰が。  
匂い立ちながらも。  
窓を開け放つのを。  
俺は見ていた。  
瞼の内に。  
光はふれた。  
ただ無造作に。  
鳥雅に。  
その全身に。  
鳥雅はひとり身を乗り出す。  
鳥雅はひとり背をのけぞらす。  
だから俺は見ていた。  
閉じた瞼の内に。  
聲もたてずに。  
身を投げた鳥雅。  
開いた窓から。  
光の内に。  
墜ちながら。  
見下ろしたに違いなかった。  
その空の青。  
一番高い空の色を。  
最後の時に。

失神に墮ちる前の。

彼の。

彼だけの。

最後の時に。

多毗登亂序蚊頭囉岐第三

啞ン癡 anti 鳴溜我貳翠夢 organism II

2021・01・28 黎マ



## 迦豆囉兒亂序

比登ノ古與美ノ貳仟拾七年登喇伎與ひとり齡什五を數へき故レ肉腫彌膨張シ瀛みと爛れ  
を纏ひ馨らせり故レ斗璃麻娑ひとり齡拾伍を數へき故レ彌そノ迦多癡うつくしく匂ひタ  
ちて紗丹都羅布斗璃麻娑女ら男らの孤飛孤我禮多琉まなざしに倦ミき故レふたり俱なり  
て美夜士麻にありき爾に女ありき齡什三ヲ數へき所以者何是レ阿迦井ノ迦須波が妹なり  
ケるが故なりき故レ笈須波ひとり齡什五を數へたればなり女名を阿迦井ノ迦豆囉古と曰  
フ迦多癡宇琉波志久弓比登と飛登ら波伊毗須迦須ノ花にも譬フ故レ迦須波ひとり笈豆囉  
古に戀フ且つハ加豆麻ひとり迦豆囉古に戀ふ且つハ加豆囉古ひとり斗璃麻娑に戀フ是レ  
斗璃麻娑迦多癡宇琉波志迦禮婆那璃かくて笈須麻爾にひとり娑娑彌氣囉玖

褐色の肌に

秘めるすべなどなかった

ふれた夏の光が

誰に告白するまでもなく

耀かせ

ぼくのまなざしに匂う色を

綺羅めかせ

人々は歎ぐ

白濁した色に

縋子自身も

その色を感わせるのを見た

すでに知っていた。だから

その夏の光の下に

ぼくたちは秘めた

夏のその風とゝもに

ぼくらの想いを

夏のその温度とゝもに

ぼくたちは秘めた

かくて迦豆囉許

ぼくらの爲に

爾に都舞耶氣良玖

獺馬には匂いがあった。

暴力の匂い。

ふれるものすべてを壊して仕舞う。  
そんな匂いが。  
暴力とはなにか？  
そんなことなど知り得もせずに。  
獺馬には匂いがあった。  
破壊の匂い。  
抱きしめるものさえすべてを壊して仕舞う。  
そんな匂いが。  
破壊とはなにか？  
そんなことなど知り得もせずに。  
獺馬には匂いがあった。  
破滅の匂い。  
すべての破滅していくのをすでに見続けていた。  
そんな気の遠くなる無慚な匂いが。  
破滅とはなにか？  
そんなことなど知り得もせずに。  
獺馬をみんなは遠巻きに見守った。  
彼が勝手に親しんだ和葉さえも。  
誰も知っていた。  
獺馬がわたしを愛していたことは。  
だから和葉は獺馬に親しんだ。  
獺馬が和葉に親しんだように。  
獺馬は和葉を厭いながら。  
軽蔑しながら。  
和葉は獺馬のその存在にさえ倦み果てながら。  
なぜなら誰もが知っていたから。  
和葉がわたしを愛していたことは。  
その肌に指先をさえふれているに違いないことは。  
その肌に唇をさえふれているに違いないことは。  
ひとり鳥雅だけが無邪気に遊んだ。  
獺馬の周囲で。  
いつでも彼から飛び去れる蝶のように。  
そしていつでも捕獲されない蛾のように。  
終に彼にはつかめない蠅のように。  
彼を無力にする蚊のように。  
鳥雅だけが自由に遊んだ。  
だれもが知っていたから。  
獺馬が鳥雅を愛していたことは。  
鳥雅さえも知っていたから。  
獺馬さえも知っていたから。

だからわたしたちは幸福だった。  
誰よりも傷み。  
さゝいなことにも傷み。  
傷んで不幸を嘗めながら。  
だからわたしたちは不幸だった。  
誰よりもあざやかな恍惚のうちに。  
愛することの恍惚の内に。  
愛されることの恍惚のうちに。  
その屈辱じみた痛みと不安と俱に。  
故レ罽豆囉古ひとり娑娑彌氣囉玖  
鳥の喰いちぎる夢を見た  
愛するという感覚が  
もしも彼が黒羽根の鳥だったなら  
わたしを囓んだ  
わたしを喰いちぎる夢を見た  
すさまじい鮮やかさを以て  
明けがたちかくの夢に殺され  
囓み千切る  
鳥の飛び去る夢を見た  
愛するということそれ自体を  
もしも彼が渡り行く鴈だったなら  
樹木の霧のなかに隠しとおして  
わたしを置き去りにする夢を見た  
朝に陽炎う靄のなかに隠しとおして  
深い夜の夢に捨て去れ  
知っていた  
生まれたことさえ後悔しながら  
わたしは彼をだけ愛していたのではなかった  
鳥の連れ去る夢を見た  
暴力的な匂いにふるえた  
もしも彼が白鷺だったなら  
すでに心は  
その嘴に啜えて連れ去る  
生まれたときから知っている  
抗うすべもなくわたしを  
その肌に匂いに震えた  
すでに深く失神させて  
こゝろは  
だれよりもふかく失神させて  
すでにわたしは罰を受けていた

かくて哥須波

やさしく愛おしい

爾に

恍惚の中に

都舞耶氣良玖

六月の雨がその土をも濡らす。

七月の雨も。

臆て来る八月の雨も。

俺は思い出す。

なぜ？

記憶があるから。

彼女を恐れた記憶があるから。

生まれたばかりの蘂子のその極度に白い肌を。

臆て褐色に染まることなど兆しもしないその生まれおちた肌のあやうさを。

だれもが俺が遠ざけた。

壊して仕舞うに違いないとあやぶみ。

生まれたばかりの蘂子を。

好んでちかくに見せ附けながら。

その腕に抱いて。

俺は見つめた。

その危うい生き物を。

壊れることを危ぶまれるならそれは生きているに違いなかった。

そこに存在するに違いないのだった。

俺は思い出す。

なぜ？

記憶があるから。

彼女を厭うた記憶があるから。

下等な息物じみて床を這う。

出来損ないの不具のかたちじみて。

彼女はひとりで床を這った。

幼い彼女は。

阿迦井弓香の歓喜の聲と体温。

阿迦井梓の歓喜の聲と体温。

それらの湿度。

ひとりで蘂子は茫然とした。

あきらかにまだ人ではない人間以下の眼差しの中に。

這う床の上に。

ひとりで蘂子は彼女の固有の茫然をさらした。

俺は泣きそうな心を痛める。

彼女を踏みつぶして仕舞う可能性の存在に。

俺はひたすらに恐れおのゝく。  
彼女を踏みつぶして仕舞う可能性の存在に。  
弓香は俺の恐れを知らない。  
梓は俺の怖れをしらない。  
彼女と彼は理解しなかったから。  
だから俺の怖れは孤独を囓んだ。  
だから俺の怖れは孤立を囓んだ。  
俺は思い出す。  
なぜ？  
記憶があるから。  
彼女を憎んだ記憶があるから。  
幼い蘂子は俺を壊した。  
その素直過ぎる目で。  
俺を咎めた。  
俺の些細な失敗さえも。  
弓香の叱咤の聲も気にせず。  
いつか言葉にふれた蘂子は毀した。  
俺を。  
話す蘂子は。  
俺を追い詰めた。  
その言葉に。  
俺を糾弾した。  
彼女の言語で。  
俺になんども宣告した。  
俺に生まれる価値などなかったことを。  
俺への愛も憎しみもなく。  
たゞその素直過ぎる痴呆の眼差しで。  
俺は思い出す。  
なぜ？  
記憶があるから。  
六歳の蘂子の肌の温度の記憶があるから。  
体が大人になるよりもはやく。  
白い雫の降り注ぐ前にも。  
俺は人間の戀のかたちを知っていた。  
俺は人間の愛のかたちを知っていた。  
たわむれじみて。  
戀と愛の違いにひとり自分勝手に惑ってみせたりしながらも。  
たわむれじみて。  
凄惨な程の本気の懊惱に焼かれてもみる。  
その肌の温度にイノチを思った。



その肌の触感にイノチを思った。  
俺は思い出す。  
なぜ？  
記憶があるから。  
彼女に引き裂かれた記憶があるから。  
縋子が命の粒を抱く前に。  
その八歳に彼女は引き裂かれた。  
俺から。  
俺の部屋から奪われた。  
彼女の居場所は。  
あたらしい部屋の中にひとり。  
死んだ祖母のかわりにひとりで。  
縋子はその体温を放った。  
俺に寄り添ってあたゝめることもなく。  
その瑞々しい発熱装置。  
放置された縋子はひとりで眠った。  
俺に自分を思わせる自由を与えて。  
雫に匂いは未だ知らずに。  
俺にひとりの自由を与えて。  
俺は思い出す。  
なぜ？  
記憶があるから。  
彼女を求めた記憶があるから。  
俺は求めはしなかった。  
縋子を。  
その雫のゆらぐさきに見乍ら。  
やさしい雨がふりそゞぐ。  
俺は恐れた。  
縋子を穢す事実を。  
その雫のゆらぐ海に身を沈めて。  
あたたかな雨がふりそゞぐ。  
彼女は穢れるしかなかった。  
縋子を俺が愛する以上。  
俺が縋子に焦がれる以上。  
俺は知る。  
美しいものは穢れずにはいられなかったと。  
すさまじい悔恨の内に。  
俺は知る。  
美しいものはすでに辱められていたと。  
その淨らなうちにも。

吐き気がするほどの屈辱があった。  
弓香は寝ていた。  
梓も寝ていた。  
だから縋子も寝ていた。  
雫のゆらぐそのまゝに俺はふたゝび目を覚ます。  
眠りなどしなかった。  
短い誰かの失神じみた数秒をだけ。  
俺はふたたび目を覚ます。  
幾度か繰り返された軽い眠りの中に。  
戸を開けた向こうに匂いを嗅いだ。  
その部屋の中に。  
他人の部屋。  
縋子の匂いを。  
肌のすぐそばに温度を感じた。  
その肌の上に。  
他人の温度。  
縋子の温度。  
唇は縋子を目覚めさせなかった。  
その一度目は。  
唇は縋子を目覚めさせなかった。  
その二度目さえ。  
繰り返される唇の感覚。  
体温にふれる。  
匂いのある霏いに。  
あたゝかみのある潤いに。  
縋子はいつか瞼を開けた。  
縋子の髪の毛の馨が匂い立つ。  
その肌も。  
肌は雫の匂いを嗅いだ。  
その肌の上に。  
そのころにはすでに日の光に染まった褐色の肌に。  
彼女自身の肌の上に。  
他人の匂いを移して見つめた。  
仰向けの眼に。  
茫然の色。  
意識はたゞ冴え。  
醒め切ったまゝに。  
茫然の色。  
そのはじめてさらす表情は赦すべきだった。  
十一歳の俺を。

故レ迦豆囉古ひとり娑娑彌氣囉玖

入れてもいゝよ

血に染まる

出しちゃだめだよ

しずかに流れ出す

出て来るからね

だれかが体内で死んだような

大きい生き物

その流血のような

頭から

血に染まる

入れてもいゝよ

まるで生き物を殺したような

出しちゃだめだよ

体内にだれかゝト殺されたような

出て来るからね

流れ出す血に

大きい生き物

その匂いに

頭から

わたしは痛む

入れてもいゝよ

私の体は

出しちゃだめだよ

ひとりで傷む

出て来るからね

だれも傷つけたつもりはなかった

大きい生き物

だれも傷つけたくはなかった

ときどき足から

わたしは痛む

入れてもいゝよ

深いいたみ

出しちゃだめだよ

わたしは痛む

出て来るからね

不解な温度

大きい生き物

流れ出す血に

お尻から？

もう大丈夫だよ  
かくて斗璃麻紗  
あなたはイノチを  
爾に  
生み出せるんだよ  
都舞耶氣良玖  
盗んだ。  
六歳の縷子は。  
わたしのカタチを。  
その姿。  
うつくしいヒトの姿として。  
盗み見をする眼差しの内に。  
六歳の縷子は生まれて初めてわたしを見出した色を曝した。  
いつかの見つめた眼差しの中に。  
どもった。  
七歳の縷子は。  
兄の友人に話しかけたその会話に。  
はじめて彼等の言葉を話し始めた外国人にも似て。  
彼等の言葉を物まねする異国人に似て。  
わたしは知った。  
たゞ彼等になった縷子に見い出された躬づからの形を。  
そのどもりに私は見い出す。  
どもってゆくわたしのカタチを。  
聞いた。  
どもる言葉に重ねられた綺麗な発音。  
和菓の。  
——こいつ、緊張してるよ。  
九歳の幼い舌が耳にそうさゝやく。  
縷子を嘲弄しながら。  
——なんで？  
わたしは嘲弄の言葉を吐いた。  
わたしたちの同じくどもる発音の幼すぎる事実には気づきもしないで。  
わたしたちはそれぞれに想った。  
もはや十分すぎるほどに生きて来たよ。  
九歳の縷子は抗った。  
女王様でもあるかのように。  
わがまゝに我が侬をかさねて。  
私の前でわたしをひたすらに詰ってあざ笑う。  
だれよりも傲慢であることだけを矜持として。  
同じ心に悲惨な迄の後悔を燃やして。

十歳の縷子は目を伏せた。  
私の前で殊更に。  
わたしに虐待されているかにも。  
わたしの瞳は嗜虐を知った。  
縷子は哀れな犠牲者だった。  
壊れるしかない弱者でこそあった。  
わたしの微笑む一瞬にさえも虐待された縷子はひとり悲しみを囁んだ。  
その心に。  
縷子はひとり切なさを囁んだ。  
その眼差しにも。  
十一歳の縷子はただ無口になった。  
私は知っていた。  
その肌が和葉のそれを知っていたことを。  
和葉がわたしにさゝやいたから。  
不意に思い出したように。  
十三歳の和葉は云った。  
海邊しかない小さな島。  
だから当然海の見える丘の上で。  
樹木の下で。  
——あいつ、俺の事が好きなんだよ。  
和葉は云った。  
深い悲しみをだけ素直に曝して。  
——どうしたらいい？  
和葉がささやく。  
——あいつ、俺の事だけが好きなんだよ。  
雲った白い空の下にその三月。  
霧立つ空気が空から雪崩れた。  
もはや水平線をなくした海は綺羅めく。  
空とさえも溶けあって。  
空の青を。  
海の青を。  
ともに失った白濁の中に。  
その散亂する波の綺羅に。  
ただ白い色彩を見た。  
十三歳の蚊豆囉古爾に迦須波を失ひき是レ朝まダき血に塗れてト殺されたる蚊須波家の  
寢台に横たわりたるが故なりき故レひとり迦須波は失せにきそノ葬儀花に塗れき花こと  
ごとく白かりき故レ花ノ白の色且つは白き花ノ香にまみれて迦豆囉古ひとり娑娑彌氣囉  
玖  
殺したのだった  
花々

わたしが  
なぜいつも埋葬には  
殺したのだった  
花々  
兄を  
さきほこりながら  
わたしを殺した兄を  
さきほこる故に  
知った  
他人の死の爲に  
わたしは  
屠られた  
兄はすでに  
頸を落とされ  
妹を殺していたことを  
流れない水にさゝれて  
だからわたしはすでに  
生きながらの死  
死んでいた  
かりそめの死  
わたしは気付いた  
かりそめの生  
その死んだ肉体を見たときに  
花は死ぬ  
かくて迦豆囉許  
他人の死の  
爾に  
その死の爲に  
都儂耶氣良玖  
匂った。  
埋め尽くすそれらの花の馨。  
弓香は茫然とした。  
ひとり狂った。  
いまだにはっきりと正気を保ちながら。  
私をひとり置き去りにして。  
かなしみのあまりに。  
梓をひとり置き去りにして。  
弓香はもうわたしを見なかった。  
だから匂った。  
その花の馨を。

わたしはひとり。  
知った。  
すさまじい悪臭を放つ。  
咲き誇る死に懸けの花の執拗な未だのにも拘らずのイノチの継続は。  
食欲をひたすら奪って詰りすさまじいその悪臭を放つ。  
死体のしずかな腐乱。  
未だだれも気付かない確実な腐乱のその臭気をさえ隠し通して。  
おびたゞしい馨は。  
塗り込め通して。  
弓香はわたしを見なかった。  
いつものように。  
和葉の指がわたしにふれることをさえ見なかったように。  
和葉の唇がわたしにふれることさえ見なかったように。  
わたしは気付いた。  
花の匂いを嗅ぎながら。  
ひとりあるべき死臭をさがしながら。  
疑いながら。  
死臭の不在を死も生もあるいは仮初にすぎないせいかと。  
わたしは気付いた。  
和葉はわたしを虐待した。  
無力なわたしを犯したから。  
和葉はわたしを穢しつくした。  
無力なわたしを犯したから。  
和葉にわたしには殺されていた。  
物心ついたときにはすでに。  
わたしは気付いた。  
だから生まれ出でさえしなかった。  
わたしは。  
目が開いたときには死んでいたから。  
かくて迦須波ひとり娑婆彌氣囉玖  
見ていた。  
腐る  
滅びた眼で。  
俺は  
俺の死を悲しむ人の群れの眼を  
燃える  
殊更な涙を  
俺は  
無邪気な程に  
腐る前に

素直な涙を  
目ざめる  
俺の死は彼女の心をすでに殺めた  
俺は  
俺の死以上に  
時の中に  
縋子の鮮明な死を見詰めた  
滅びる  
涙さえ流さない  
俺は  
縋子の眼の  
醒めたまなざしに  
瞳孔の開いた恍惚の色に  
俺の不在を見出しながら  
かくて迦豆囉許  
俺は見つめる  
爾に  
滅びた両眼で  
都伽耶氣良玖  
夢を見た。  
香水をしのばせた僧侶のお読経の時にも。  
夢を見た。  
ひとりで起きた深夜の暗がりにも。  
眠りの内にも。  
ゆり起こされたその瞬間にも。  
棺に釘を打つ時にさえも。  
夢を見た。  
和葉の夢を。  
夢に肉は散乱した。  
おそらくは異国の様式。  
たぶん鳥葬。  
そう呼ばれた埋葬。  
丘の上に剥き出しに曝した。  
和葉はその腐りかけの屍を。  
だから群がるしかないのだった。  
鳥たちは。  
その無数の翼は。  
その無数の羽搏きは。  
見なかった。  
わたしは。



その鳥の姿は。  
地に無数の影だけを見た。  
肉に無数の影だけを見た。  
骨に無数の影だけを見た。  
むらがる無数の眼のすべてがわたしの眼だったから。  
見られた無数の視界のすべてがわたしの視界だったから。  
だから私は鳥を見なかった。  
すべての鳥の総てはもはやわたしそのものに過ぎなかったから。  
だから食られた。  
和菓は。  
わたしの口に。  
その肉は。  
わたしは喰った。  
無数に食った。  
その肉を。  
すでに死んだイノチなき肉を。  
だから喰われた。  
和菓はわたしに。  
わたしは死んだ。  
無数に死んだ。  
鳥たちは死ぬ。  
いまこの時に。  
かくて迦豆麻爾にひとり娑娑彌氣囉玖  
流れる涙の温度を思う  
ゆれた  
あなたの頬の  
こころは（俺の…）  
玉散れ  
あなたを（こころは）想い  
雫  
あなたの（ひとりでに）咬んだ  
かくて迦豆囉許  
悲しみを（別のイノチを）思い  
爾に  
（持ったにも似て  
都儂耶氣良玖  
死んだ子供は流されるだろう。  
例えば笹の葉にでくるまれ。  
遠い黄泉の国に。  
流されるべきだろう。

死んだ子供は。  
わたしはすでに流されたらう。  
生まれなかった子は。  
すでに生まれて死んだ子は。  
わたしはしづきに濡れたらう  
わたしの頬は。  
髪の毛も。  
幼いその色。  
誰にも触れななかったその髪の毛は。

かくて七月の夙夜に迦豆囉許あやしき夢をひとり見き故レ笈豆囉兒ひとり海に行きゝ故  
レ笈豆囉古爾に躬ヅからに頸を斬りテしかすがに死にきレず故レ爾に躬ヅから手首を斬  
りてまさに血に流れ出す色を見き故レ見蕩れるかにも迦豆囉兒爾に躬ヅから包丁をそノ  
右目にさしき故レ右眼すデになにもものヲも視ズテシカすがに左目まさにあざやかに夙夜  
にきらメク海を見き故レ見蕩れる香豆囉許爾に躬ヅからに左目ヲ刺シテしかすがに滅ビ  
たる眼且つは壞れたル眼且つは不在なる目に彌あざやかに兩眼に見き何を見けるや厥レ  
海なりき夙夜ノ海月の光にたダひタすらに綺羅めきて故レ比笈璃者綺羅羅登綺羅米伎伎  
故レ爾に蚊豆囉許ひとり娑娑彌氣囉玖

輝くのだらう  
恍惚？  
永遠に  
まさか  
光は  
わたしはひとり  
綺羅らは  
ひとりひたすらに  
綺羅伎良と  
目を覺まし  
輝くのだらう  
目を澄ませ  
人のイノチも  
光を見ていた  
物のカタチも  
光でしかない  
なにもかも  
その海を  
かくて迦豆良許  
すでに滅びた後にさえも  
爾に都儼耶氣良玖  
燃え上がった。  
海が。

音もなく。  
わずかの音響さえもなく。  
完全な無音。  
氣の狂いそうな巨大な無音。  
知っていた。  
だれかの発狂した眼差しの中の風景に過ぎないと。  
燃え上がった。  
海は。  
波は翳ろふ。  
飛沫は陽炎。  
ざわめく光に音はなかった。  
とよみながら。  
ざわめく色に音はなかった。  
響きあいながら。  
むしろ貪り合いながら。  
むしろつぶし合いながら。  
むしろ喰らい会いながら。  
焔はゆらぐ。  
海に炎は。  
海の底まで燃え立つ炎は。  
赤紫に染まった色を。  
その色を見て瞬く瞬間に夜に墜ちた。  
その夙夜の闇に。  
部屋の中に。  
目を覚ます。  
夜に墜ちて目を覚ます。  
失神したにも似て目を覚ます。  
醒めた夢を思い出しもしなかった。  
わたしはすでに自分が死んでいたことを思う。  
わたしはわたしに添い遂げようと思う。  
すでに葬られたわたしのイノチに。  
わたしは海に歩き出す。  
夙夜の闇に。  
朝焼けの始まる前に。  
目を閉じたまゝ海邊を歩く。  
たわむれじみて。  
耳はあざやかに描き出していた。  
そのさゞ波の音の知らせる海を。  
そのきらめきを。  
故レ爾に罅豆麻ひとり娑娑彌氣囉玖

耳元にあなたの声を聴く  
時は果てた  
そっと  
もうすでに  
息を吹きかけたただけにもにて  
時は果てた  
耳元にあなたの声を聞く  
だから  
かくて迦豆麻  
そらおそろしいほどの  
爾に  
ひたすらの綺羅  
都儂耶氣良玖  
あなたがひとり焔に包まれる夢を見た。  
だから俺はひとり身を起こす。  
海に向かった。  
あなたがそこに燃え尽きる夢を見たから。  
故レ爾に登喇麻紗ひとり娑娑彌氣囉玖  
耳元にあなたの声を聴く  
さゞ波の音を  
そっと  
綺羅らぐ音を  
息を吹きかけたただけにもにて  
響き合う音を  
耳元にあなたの声を聞く  
もはやすべてを  
かくて登喇麻紗  
覆いつくす音を  
爾に都儂耶氣良玖  
迸る。  
何が？  
血の味。  
喉に迸る血の味に目覺めた。  
僕は起き出す。  
海に向かって。  
あなたがそこで僕を見ていた。  
その眼差しがあった。  
そのせいで。  
故レ爾に笮豆波ひとり娑娑彌氣囉玖  
耳元にあなたの声を聴く

ふりそゝぐように  
そっと  
その音響は  
息を吹きかけただけでもにて  
その綺羅は  
耳元にあなたの聲を聞く  
ふりそゝぐように  
かくて迦須波  
あられもなくに  
爾に都舞耶氣良玖  
あなたを見ていた。  
僕の目の前で滅びて行くあなたを。  
あなたを見ていた。  
頸に血を流す崩壊のあなたを。  
あなたを見ていた。  
斜めに傾く崩壊のあなたを  
あなたを見ていた。  
手首の血に驚く眼差し。  
崩壊のあなたを。  
あなたを見ていた。  
目を貫いたあなたの口の大きな開口を。  
崩壊のあなたの。  
あなたの手の施しようもないあざやかなあなたの固有の崩壊を。  
故レ爾に斗璃麻紗は見きそれ神社の鳥居の前に仰向ケ浮かぶ屍を蚊豆囉古が屍を故レ爾  
に蚊豆麻は見きそれ神社の鳥居ノ前に仰向け浮かぶ屍を蚊豆囉古が屍を故レ爾に蚊須波  
は見きそれ神社の鳥居ノ前に仰向け浮かぶ屍を蚊豆囉古が屍を故レ爾に蚊豆麻ひとり娑  
姿彌氣囉玖  
神など  
綺羅きらと  
もはやだれにも信じられない神など  
かゞやきはじめた  
最初から誰も信じて居なかった架空の神など  
あなたの見なかった  
だから永遠に誰かの不在に過ぎない  
明けの海に  
無慚な鳥居に  
その赤裸々ないろに  
その突き刺さされた  
ぼくの涙はそまったゞろう  
無慚な海に

あなたの決して  
沈みもせずに  
見なかった  
流れ出すあなたを見ていた  
僕の涙は  
流れ出す紅  
綺羅めいたゞろう  
溶けあう血は  
もうだれも  
ひとりで水にしずむのだろうか  
だれも見もしない風景の中に  
あなたひとりを置き去りにして  
ぼくは一人  
かくて迦豆麻  
たゝずむのだろう  
爾に  
滅びても猶も朽ち果てずして  
都儂耶氣良玖  
女のかたちを見た。  
死んだとも思えない女の。  
眠ったとも思えない女の。  
微動だにしない女の。  
波は遊ぶ。  
浮ぶ仰向けの蘊子の肌に。  
波はふれる。  
鳥居の方に流れて行く蘊子の髪にも。  
波は捨て置く。  
岸邊に流し着かすべきだったのではないか。  
光は奪う。  
躬に流れ出し水をも染めた血の色をは。  
だから俺は見るのだった。  
それが終に何かをは知らない儘に。  
その目に見えて居る者だけを。  
故レ爾に蚊須波ひとり娑娑彌氣囉玖  
聞け  
かゆい  
波の音を  
皮膚の下がかゆいんだ  
聞け  
蛆が喰うから

もはやそれしか聞き取れないなら  
ぼくの肉を  
縷子はひとり遠出する  
とっくに燃えて  
海に  
灰になった  
縷子はひとり流れ去る  
ぼくの肉を  
鳥居の方に  
いたい  
臆ては鳥居の向こうに間でも  
痛いんだ  
終には水平線のむこうにまでも  
肉も  
喰うのだろうか  
骨まで  
そのかすかな彎曲にふれそうな遠くで  
繁殖するから  
例えば鷗は  
おびたしいほど  
わなゝかせながら  
その白い菌は  
その翼を  
灰色の菌は  
綺羅めかせながら。  
黄色い菌は  
その嘴を。  
うす紅の菌は  
縷子の残して去ったその屍を  
とっくに失せた  
不在だった。  
ぼくの全身に  
すでに。  
聲をきく  
縷子は  
ぼくは  
まるで抜け殻  
ぼくの  
蛇の残した  
声を聴く

まるで蛹殻  
なにを叫ぶべきかもわからず  
蝶の残した  
なにを思うべきかもわからず  
雪の消えるように  
なにを感じるべきかもわからず  
あなたが消えると俺にせめてささやいたなら  
ただあなたの名前を呼んだ  
吹き消された火のちいさゝのように  
名前を叫んだ  
あなたが亡びると俺にせめてさゝやいたなら  
ぼくの聲を  
黄泉返りなどしなかったものを  
ぼくは  
かくて蚊須波  
滅びて果てて失せ消えたものを  
爾に  
時の果てにも  
都儂耶氣良玖  
思い出す。  
記憶があるから。  
俺には。  
仰向けの眼差しを見ていた。  
俺はからだの下に。  
あなたの体温をおびたゞしく感じて。  
見ていた。  
俺を見上げる眼差しを。  
たゞひたすらに俺を赦して。  
たゞひたすらに俺を受け入れ。  
そして無邪気な程にやさしく笑んだ。  
その眼差しを。  
はじめて俺を受け入れた日に。  
その夜の中に。  
ただ暗く。  
ひたすらに暗く。  
くらすぎて何も見えもしなかったはずなのに。  
故レ爾に斗璃麻紗ヒとり娑娑彌氣囉玖  
幼すぎる女だった  
弔ってほしくはないだろう  
女とも言えない女だった



もはやあなたは人ではないから  
わたしはあなたを愛しはしなかった  
人たちの  
それを知っていたか？  
　　弔いの言葉など聞き取れもしなかつただろう  
あるいは知りもしなかつたのか？  
　　鳥の言葉を聞き取れないように  
なにを見た？  
　　猫の私語をききとれないように  
その無口な眼は  
　　弔いなどできないだろう  
例えば海邊に彷徨いながら  
　　だから  
例えば海邊に身を投げながら  
　　ぼくは  
あなたのその目は  
　　むしろ沈黙をだけさゝげよう。その時に  
なにを見た？  
　　すさまじいほどの饒舌がぼくをつゝむ  
その最期の時に  
　　かなしみとも怒りとも侮蔑とも  
なにを見た？  
　　なにとも形をなさないまゝの  
あなたの見た筈の風景を思う  
　　すさまじい饒舌に焼かれるなかに  
思いながらにこゝにまでも來た  
　　ただ言葉をわすれ  
かくて登喇麻紗  
　　最後に見つめた  
爾に  
　　最後の色を  
都儼耶氣良玖  
　　かたわらに和葉の涙の温度を知る。  
　　かたわらに獺馬の涙の温度を知る。  
　　俺は乾いた臉をひきつらす。  
　　喉さえ乾く。  
　　だから内臓さえ乾きまさにさゝやく。——あれ…  
と。  
——本当に縊子？  
　　さゝやいた聲に応えなかった。

その和葉は。  
答えなかった。  
その獺馬は。  
だから踵を返す。  
ぼくはひとりで。  
残されたふたりを置き去りにして。  
立ち去ろうとする僕にさゝやく。  
眼の前に立つ蘂子は。  
僕の目の前に立ち。  
両眼から血を流す蘂子はひとり。  
僕の眼差しの中にたち。  
彼女はさゝやく。  
——泣かないで。  
その息の  
——あなたのそばにはいなかった。  
鼻にふれそうな近くに  
——あなたは私を見なかった。  
その息の  
——いつでもすでに。  
頬に触れそうな近くに  
——わたしは生まれさえもしなかった。  
その息の  
——だから  
骨にふれそうな近くに  
——あなたはいま泣くことさえできなかった。  
振り返れば海に夜明けの紅蓮が開く。  
空の一番遠い底に。  
気付く。  
僕の頬は濡れていた。  
その滂沱の涙。  
知らないうちに決壊していたそれ。  
いわば見ず知らずの他人の涙に。

迦豆囉兒亂序蚊頭囉岐王第三

啞ン癡 anti 汚瑠我貳翠夢 organism II

2021・01・27 黎マ





破



## 蚊頭羅岐破

かくて比登らが古與美貳仟貳拾壹年ノ拾貳月爾に蚊頭囉岐ノ且つは加我ノ且つは古布ノ斗璃摩娑已に喰ひ殺シたる蚊頭囉岐ノ且つは迦我ノ且つは古布ノ斗璃伎與が腫瘍乃至その左伎多摩の肥大に已にその半身ダに崩れさして躬の芳香に左伎多摩が腐臭だにモ交わらせたりき故レ斗璃伎與爾に齡拾九を數へき故レ斗璃摩娑爾に齡什九ヲ數へき爾に女ありき名を阿迦井ノ芻豆良古ト曰ふ女すでにして時のうちにあらず故レ斗璃摩娑その摩那許にのみ迦豆囉古失せたる齡のかたちに見出しき爾に女ありき名を夜麻陀ノ多迦牟羅と曰ふ故レ齡爾に十九なりき多迦牟羅その躰にひとり迦豆囉古と俱なりテありき故レ爾に迦豆囉古ひとり多迦牟羅と俱なりて娑娑彌氣囉玖

嗅いだ

ゆらゆらと

あなたの肌の匂いを

カーテンごしに日の光は

甘やぎいや甘やぐ

陽炎まゝに

漂う香気を

時の立つさえ

嗅いだ

忘れてあなたを

腐った肉の

見つめて居よう

瀛の臭気を

もはや人のかたちさえ

錆び色の匂い

維持されてはいないかたちを

腐乱の魚の群れ成す匂いなす臭気を

その無様さを

かくて

そのいまだ死にもしない

爾に布斯美

あなたのイノチを

都儂耶氣良玖

すでに。  
連れこんだ時には。  
この部屋に。  
連れ込んだ時にはすでにあなたは人でさえなかった。

匂う悪臭を勝手に垂れ流して。  
體の半分に肥大した肉に噎せ返る。  
肌の半分に吹き出す瀛に黄色を染まる。  
ながれる黄色の匂いを嗅いだ。

嗤っていゝ？  
あなたのその穢さを。  
分泌物に塗れたあなたの。  
あるいは廃棄物にまみれたあなたの？  
もしくはイノチそのものだったのか。  
その分泌された廃棄物そのものこそが？  
あなたの。

嗤っていゝ？  
もはや人の言葉さえまともに話せもせず。  
嗤っていゝ？  
肉腫の肥大にあまりに不自由な口に音をなぞる。  
胃のような舌が突き出されて。  
黄色い分泌物をそれでもなおも粘膜に吐瀉した。

聲と音。  
あまりにも穢いあなたを見ていた。

此の拾壹月朝の七時に斗璃摩娑焦燥と俱に宮島に歸りき故レ所ノ足宮島の土を踏みたり  
故レその目宮島の色を見たり故レ所ノ心宮島のかたちを見たり時に斗璃摩娑朝のすでに  
焼けおちたル青の空の下に海を見き故レ爾に海はその躬づからをさらしき斗璃摩娑が目  
にその色且ツはそのかたちなきかたち且つハその馨る潮の臭気且ツは臭う鹽の馨り且つ  
ハさザなム波ノ音ノ静かノとよみを斗璃摩娑その目に見て観たるママに娑娑彌氣囉玖

わなゝいてた

音を立てゝ

西淨の息で生き續ける未だ死なない不死の肉が

喰っていた

香り立つ

なに？

その腐った肉の臭いなす匂い

わたしを

彼の表皮の

私の肉を

その腐ったまゝに海におよぐ魚の群れの匂いなす匂い

骨までも



表皮の瀛みの  
 骨髓までも  
 毛孔にさえたれる膿みの  
 肉汁も  
 匂いに噎せる  
 血も  
 躬づからさえも  
 精神さえも食っていた  
 酉浄さえも  
 その齒に  
 だからわたしささえも  
 匂う齒に  
 だからわたしたちは俱に  
 酉浄は  
 その匂いに噎せて  
 その異形の齒にも  
 噎せかえりながら  
 嚙み千切る  
 音を聞いた  
 嚙み、咬み砕き  
 酉浄の耳も  
 飲み  
 その耳に  
 あふれだした胃液の中に  
 躬づからの齒の咀嚼する音  
 匂うその胃液の中にも  
 私の肉を  
 咀嚼した  
 肉體を  
 喰われながら  
 骨までも  
 わたしの肌は  
 骨髓までも  
 毛孔さえもが  
 肉汁までも  
 彼の腐った匂いを嗅いだ  
 血さえ  
 その腐った肉のにおいなす匂い  
 精神までも咀嚼する音  
 その腐ったままに海におよぐ魚の群れの匂いなす匂い

その赤裸々な音を  
かくて斗璃摩娑  
　　噎せ刈りながら  
爾に都舞耶氣良玖

夢を見た。  
迦豆囉古をふたゝび煞した時にも。  
ふたゝびその首に包丁を刺した彼女の眼にも。  
その目の見ていた風景の中にも。  
夢を見ていた。  
生まれた時から。  
すでに。  
その繰り返し見続けていた夢を。  
夢を見た。  
聴く。  
酉淨の齒の咀嚼の音を。  
観る。  
肌にふれ合うその表皮の肥大を。  
嗅ぐ。  
あふれかえるその魚の腐臭なす悪臭を。  
その夢に問いかけらるまゝにいつか。  
まさにこの時。  
夢に誘われ。  
夢を追うまゝ。  
だからこゝに俺は來た。

故レ夢に見たル夢に誘はるゝ儘に美夜島に歸りてひとり斗璃摩娑島ノ埠に見まわし爾に  
今まさに躬ヅからの美夜島にありたるを知りキすでに古我ノ伎與麻娑は失せたりき故レ  
祇樹古藤記念園を詣でムとす故レ歩きて山際ナル祇樹園に至るに祇樹園の鐵門已に錆び  
たりキ故レ斗璃摩娑ひとり思へらく祇樹園廢園されたるやらんとかくて見て見ルに白き  
建物すデにして葛に覆われ窓ノ硝子ことごとくに割れて輝入り處所に樹木の枝ノぞかせ且  
ツは更に枝に葉しげらせテありき爾に斗璃摩娑恠シむともなくに恠シみ知らぬうちにモ  
時のいちはやく百年千年を經りたるにも思ヒきかくて祇樹園に人ノ氣配すでになかりき  
故レ斗璃摩娑鐵の錆びムす門を軋ませそノうちに入りき建物正面の門の硝子ノ自動扉朽  
ちて割レ崩れ斜めにそノ殘骸を傾けり故レ斗璃摩娑こゝろに娑娑彌氣囉玖

ことごとく

喚ぶ？

すべてはそのかたちも懐かしいまゝ

誰を？

ことごとく

喚び出す？

すべては曝した。ぼくの見知らぬかたちを

どうやって  
その色さえも  
おそらくは聲は  
匂いさえもが  
わたしの誰かを喚ぶ聲は  
ここにさらした  
壁にとよみ  
他人のすごした無人の時間を  
たゞ自分の響きに  
かくて斗璃摩娑  
こだましとよむにすぎないものを  
爾に都舞耶氣良玖  
いるはずはなかった。  
だれも。  
その朽ちたすべては無造作にさらした。  
勝手に古りたゝぶん百年の時間を。  
或はすでにそれ以上の経過を。  
足音が響き、それだけだったにすぎない。  
孤独？  
慥かにわたしはひとりだった。  
さがした。  
誰を？  
酉浄を。  
わたしを呼んだ彼を。  
夢の中で。  
わたしを呼んだ酉浄。  
そしてわたしの肉を。  
わたしの魂さえをも貪り喰った酉浄を。  
彼は生きていなければならなかった。  
なぜ？  
わたしを喚んだのだから。  
彼がわたしを呼んだその爲だけにも。  
慥かに。  
彼は息てそこに存在していなければならなかった。  
誰かの介護なくして息られないその不死の強靱な肉の腫瘍にいまだに肥大しながらも。  
故レ中庭に出るに未ダに沙羅の雙樹茂りき故レ葉の茂りノ緑の間にモ間にもその白い花  
の群れ誰の爲にとまなくに咲きテ咲き乱れ散りテ散り舞ヒき時に登喇摩娑振り返りきキ  
所以者何耳に比登の女の聲を聞きタる故なりき故レ返り見ルに中庭に開ク硝子戸のひび  
割れの傍らに女ひとり立ちタリき女ひとり息遣ヒさながらに息てあるもの自分ひとりト  
知りたるが如くしたり故レ斗璃摩娑おもはずに錯乱シテ思へらく我すデに死にたるやら

んと所以者何まさに女自分ひとり爾に息であるトその姿曝したルが故ナリき故レ斗璃摩  
娑爾に娑娑彌氣囉玖

だれ？

見つめた

と

わたしを見詰めたその眼差しを

聲を聞いた

顯らかにあやうい青白いその虹彩の色を

誰？

思った

と

見たに違いない

いまだ一度も聞いたことのなかったその

彼女は顯らかに

やわらかな昏いうわづるアルト

青白い光澤を佩びた

かくて斗璃摩娑爾に

わたしの投げた翳りのかたちを

都儂耶氣良玖

言葉を失ったわけではなかった。

まさか驚くなど。

わたしは見ていた。

微笑みさえして。

思っていた。

彼女はそこに居るに違いなかった。

そこに女は慥かにそこに居た以上。

そこに息で、だからそこに息づいてある以外にあり得なかった。

わたしは笑んだ。

誰の爲に？

彼女の爲に？

まさか。

もはや誰の爲にでもなく笑むわたしの顔を女は見ていた。

だから彼女は云った。——だれ？

と。

わたしはさゝやく。

あなたは？

と。

自分の喉の奥のほうにだけ。

だから彼女はさゝやく。

咎めるように？

ないし自分の咎める怯えた聲に戯れたにも思えて。——だれ？

と。

花が舞った。

纔かにしか存在しない女とわたしの距離の間にも花は舞う。

なぜ？

その沙羅の花。

花は散り故に散り舞う故にその花は倦めた。

わたしと彼女との隔たりの隙間をまえも。

綺羅らかに白く綺羅めきながらも——誰？

と。

さゝやく女に応えた。

わたしは。

——忘れた。

笑った。

わたしは。

吐く息でだけ笑うわたしを女は見ていた。

故に女はすでにその目に微笑んでいた。

邪気もなく。

はじめて見た目の前の男の爲にだけ笑んだ。

爾に夜麻陀ノ多香牟良ひとり沙羅の雙樹ノ狭間そノ花の舞フうちにある男を見て娑娑  
彌氣囉玖

存在する筈もなかった

生き残り？

すでに生きた人の男など

生まれ変わり？

夢のように想った

いまさらに

風景そのものを

すでに生きてるべきでさえない時間のうちに？

遠い昔に滅びたいきものゝ

息遣う男の周囲には漂う

いのちのカタチ。今更に風景の中に現れた

花の馨にさえ掻き消えもしない

その風景をそのものをこそ

男の肌の

夢のようにも

その匂いを嗅いだ

かくて多香牟羅

甘やいだ蜜の

爾に都舞耶氣良玖

夢だったにちがいがなかった。  
あるいは幻。  
あるべきでない姿なら。  
あるいは私が彼の幻。  
あるべきでない姿なら。  
怯えもなかった。  
夢にすぎない男の近くに近づきながら。  
慄きも。  
纒かの恐れも。  
まして懐かしさなど。  
男の傍らにわたしは立った。  
その名前さえ忘れた男のかたわらに。  
聞く。  
耳は——誰？  
と。  
彼のさゝやいた声を聴いた。  
髪に墜ちた。  
その花の一つは。  
頬にふれた。  
その肩に。  
頸にさえも。  
その沙羅の花は。  
だから——あなたは誰？  
男がさゝやく。  
彼の眼差しは見たのだった。  
間違いもなく。  
ふれさせた。  
花に。  
その髪に。  
ふれさせその花の一つに。  
更にひとつ。  
ほかのひとつにも頬に。  
ふれさせその肩に。  
頸にさえもふれさせた女の。  
生きて在る女のかたちを。  
彼は見ていたに違いなかった。  
花の匂いと男の馨りのなかに。  
聞く。——誰なの？  
——忘れた。  
云ってわたしは笑った。

かくて夜麻陀ノ多香牟良爾にひとり斗璃摩娑と俱なりて娑娑彌氣囉玖

何をしに？

いる？

何を？

俺の…

逢いに？

俺。

誰に？

いる？

なぜ？

もうひとりの俺。

どうしてこゝに？

彼、まだ

ひとりで？

生きてる？

この雪の中に？

いるでしょ？

降りしきる

ここに

人のすでに滅びたあとの

俺を呼んだの。

いきものさえ

俺が

失せたこの誰のものでもない世界の中に

俺の夢の中で

降る雪の中に

だから

この

彼、…

かくて斗璃摩娑

降る雪の白の中にも

爾に都舞耶氣良玖

気付く。

慥かに。

今更に気付く。

已に雪は降り続けていた。

とめどもなく。

盡きるすべなどなくも想えて。

その雪は。

花の上にも。

花の下にも。  
見つめ合った。  
四維を満たした雪の降る中。  
わたしは女と。  
女が見つめたそのままにわたしは。  
彼女を見つめる以外になかった。

雪舞ひ舞う雪舞う花のなかに舞う雪の舞ひて舞う花は舞ひ舞うまに雪舞ひ故レ斗璃摩  
娑ひとり雪ふるうちに息を吐き吐く息ノ白らむを見て観畢るともなくに雪の眞白をたダ  
その目に見たりき故レ何の氣配を感じるともなくに何ノ聲を聞くともなくに返り見れば  
花ノ向カウ西の棟の硝子戸のひび割れが下に這う斗璃伎與が異形を見たりき爾に斗璃伎  
與すでに死にかけたりき所以者何すでに呼吸器破損しすでに輸血のすべなくすでに人工  
心臓用を足さずテそれ強靱なる腫瘍の肥大を彌肥えさせ彌大きくさせて脉打ラす儘にひ  
とり斗璃伎與が肉そノ血にまみれき故レひとり斗璃伎與が肉そノ膿にまみれき故レひと  
り斗璃伎與が肉そノ体液にまみれき故レひとり斗璃伎與が肉そノ分泌液にまみれき故レ  
斗璃摩娑爾に多香牟良ト俱なりて娑娑彌氣囉玖

生きてた  
あれ？  
慥かに  
あなた？  
死に懸けながら  
あれが？  
生きてた  
あなた？  
いまだに  
生きてるの？  
死に絶えもせずに  
まだ？  
雪の中にも  
死なゝいの？  
その  
あそこまでひどく  
零度に凍る  
傷みながらも？  
大気の内  
崩れながらも？  
散る花の中  
壊れながらも？  
踏む花の上にも  
腐りかけながら  
かくて斗璃摩娑



それでもなおも？  
爾に都舞耶氣良玖  
叫びそうだった。  
喉さえあれば。  
わめきそうだった。  
口さえあれば。  
死に懸けていた。  
こうまでもひたすらに生きているイノチが。  
訴える。  
その思いがわなゝく。  
だれに？  
彼を救えと。  
わなゝく、  
我を生かせと。  
わなゝく。  
生きろと。  
せめても生きろ。  
生き延びろと。  
だから叫びそうだった。  
喉さえあれば。  
わめきそうだった。  
口さえあれば。

故レ爾に斗璃摩娑正氣を已になクシタリき目の前に登喇伎與死に懸けそれたダ無慚なり  
キそれたダ無慈悲なりキ厥レたダ殘酷をのミさらシタリき故レ斗璃摩娑爾に泣き叫びた  
りキ喚き散らしたりキ罵聲もて怒號もテ聲もなク歎き聲もなク悲シミ聲もなくモだえつ  
ツにその開きキリたる口蓋ノ奥に娑娑彌氣囉玖

助けて  
いままさに  
だれか  
まさにこの時に  
その罪もなく  
朽ちていこうとする  
死に懸けていくイノチの  
酉淨はひとり  
その赤裸々に  
崩壊し  
生きてある命を  
朽ちていこうとする  
理由もなく  
ぼろぼろに

必然もなく  
ずたずたに  
たゞ無慈悲に  
むごたらしくも溢れ返る  
たゞ絶望的にも  
瀕みのうちに  
死に懸けてあるこのイノチを  
腐臭のうちに  
助けて  
みずからの  
誰か  
穢いその體液に塗れ

かくて斗璃摩娑  
分泌液に塗れて

爾に都儂耶氣良玖

黄泉歸る。  
葛縹子は甦る。  
あざやかに蘇る。  
振り返ればその女の口の中にさらした。  
彼女の息を。  
縹子の息を。  
その心臓を。  
その腸を。  
その毛髪を。  
その比布さえも。  
女の微笑む口蓋の内に。

かくて斗璃摩娑爾に知りたりきまさに屠璃伎與今死なんトするを且つハ知りたりキ蚊豆  
囉兒爾に與美智徹璃弓そノ女多香牟良にかさなりて斗璃摩娑ヲ見つめたるを故レ爾に智  
豆囉許ひとり布斯美と俱なりテ娑娑彌氣囉玖

愛おいしい  
狂った男は  
あなたの悲しむ聲を聞いた  
掻き巻る  
降る雪の  
自分の顔を  
雪の花  
狂気して  
花にふれる雪  
夢見られた  
花にふれ

刹那の幻  
溶けて消える雪  
狂気した  
その色のうちに  
わたしの幻  
真白の色の  
わたしの見た夢  
そのうちにさえ  
その男は  
愛おしい  
いまの目の前で  
あなたの肌の馨を嗅いだ  
顔を掻き毟る  
せつなくて  
その皮を  
思いはもはや  
引き裂きながら  
わたしを苛む  
その爪と指の間に  
そのわたしをだけを  
残す血の色に  
かくて罽豆囉古  
わたしをこそを  
爾に都舞耶氣良玖  
落ちる雪  
その雪に  
落ちる花  
その上に  
落ちる雪  
一千年の夢  
戀うる思い  
盡きない思いの切なさこそは  
雪の色にも添うて綺羅らぐ  
花の色にも添うて綺羅らぐ  
だからただこの綺羅めく世界に  
刹那にも  
溶けて果て  
果てゝ盡きせぬ永遠の  
その色のうちにも  
かくて斗璃摩娑その目に涙を感じたる時にすでに凍れる涙網膜を刺しき且つは瞼を刺シ

き且ツは眼窩を抉りき故レ垂れる血は爾に網膜を刺シき且つは瞼ヲ刺しき且つハ眼窩を  
抉りテシカスガにもハや痛みダにも感じ得もせずテひとり娑婆彌氣囉玖

何度も願う

わなゝく皮膚は

何度も

引き攣る皮膚は

救えと

すでに肥大する肉腫に膨らみ

彼を救えと

喰い破られた

たとえ救われた命がむしろ彼に無際限なまでの苦痛をのみ引き延ばすにちががなくとも

玉散る膿はその血と俱に

せめてそのイノチだけ救え

雪にも散った

魂を救えなどしないのならば

花にも散った

せめてその

私の肌にも

かくて登璃麻婆

散って濡らした

爾に都舞耶氣良玖

うめく獣の聲を聞いた。

どよめく獣の。

その喉の。

うめく聲を。

聲を聴いていた。

かくて夜摩陀ノ多伽牟羅その目に見き狂ヘル斗璃摩婆すでにして人のかたちなくて口裂  
けテ裂けたる口に登喇伎與が肉ヲ貪り喰らふヲ雪の内に又ハ花の内に夜摩陀ノ多伽牟羅  
その目に見き狂ヘル斗璃摩婆すでにして人のかたちなくて口裂けテ裂けたる口に登喇伎  
與が肉を貪り喰らふヲ雪の内に又ハ花の内に夜摩陀ノ多伽牟羅その目に見き狂ヘル斗璃  
摩婆すでにして人のかたちなくて身ふたツみつに裂けて裂けたる肉の切れ目に生ふる齒  
の群レに登喇伎與が肉ヲ貪り喰らフを雪の内に又は花ノ内に夜摩陀ノ多伽牟羅その目  
に見き狂ヘル斗璃摩婆すでにして人のかたちなくて骨裂けて裂けたる骨格に生ふる觸手に  
開ク無数の口蓋に登喇伎與が肉ヲ貪り喰らふヲ雪の内に又ハ花の内に夜摩陀ノ多伽牟羅  
その目に見き狂ヘル斗璃摩婆すでにして人のかたちなくて腕裂けテふたツみつにモ裂け  
たる腕に手のひら裂けてふたツみつにモ裂けたる手のひらに指孔空キ無數に孔ひらきひ  
らきたる孔に登喇伎與が肉を貪り喰らふヲ雪の内に又は花ノ内に夜摩陀ノ多伽牟羅その  
目に見たりてひとり娑婆彌氣囉玖

知っていた

残酷な  
それが妄想にすぎないことは  
あまりにも残酷な  
わたしが見出した  
手のほどこしようもない世界のうちに  
狂人の夢  
纒かに兆す微笑に  
なぜならわたしは已に狂った  
それでも生きて在ることに  
眼の前で  
顯らかな意味を見い出せと？  
彼等を殺されたときに狂った  
顯らかな樂土を見い出せと？  
その明け方に  
涙さえもあなたを傷つけ  
忍び込む人  
あなたの眼球を突き破る  
家の中に  
凍り付くだけの世界の中で  
夙夜の闇に  
それでもなおも  
わたしに新たな命を与え  
生きてあれと？  
母を殺した  
それでもなおも  
父を殺した  
イノチをつなげと？  
妹を殺した  
どのつらさげて？  
かくて多賀牟羅  
どの面さげて？  
爾に都舞耶氣良玖  
思い出せた。  
記憶があるから。  
わたしには。  
思いだせた。  
記憶があるから。  
たか、…と。  
わたしの名を最後に呼んだ。  
篁、…と。

その男の子じみた名前を。

みじかく縮めて。

その名字じみた名前のひゞきを。

簡単にして。

父は。

たか、と。

たぶん過剰な誰かの思い入れのあるその名前への想いを躬づから台無しにしながら。

自分で付けたその名前を。

ありふれたふたつの音のひゞきに——なに？

と。

振り返たそこに父はさゝやいた。

笑んで？

なにを？

父はさゝやいた。

短く數語。

何を？

無言の唇の動きを思った。

すでになくした記憶は故にわたしにそれを思い出させずに。

だから無言の唇の動きを思った。

出鱈目な開閉。

その唇の、音の記憶を呼び覚まさない出鱈目な動きを。

最期に聞いた父の言葉を。

故レ斗璃摩娑すデに人デさえなく獸でさえなくたダ異形のかたちの食るかたちのそのうち  
に聞きゝわななく聲厥レ多伽牟羅の喉の叫ける笑ヒ聲を聞きテ故レ斗璃摩娑すデに人  
デさえなく獸でさえなくたゞ異形ノかたチの食るかたちのそのうちに見きノけぞり引き  
攀ル厥レ多伽牟羅の體に叫けれ笑ヒを故レ斗璃摩娑爾に多伽牟羅と俱なりて娑娑彌氣囉  
玖

絶望的な聲を聞く

狂った女が夢を見る

その冷酷な噛い聲を

ただ絶望的なまなざしのうちに

無慈悲なだけの聲を聞く

狂ったことを知っても猶も

その血も涙もない硬質な聲を

狂った冷酷な夢を見る

むしろ引き裂け

現実よりも残酷な

哀れみさえもしないなら

現実よりも顯らかな夢に

救いもせず

せめて  
憐れみさえもしないのならば  
現実の無残を隠して？  
むしろ引き裂け  
せめて  
肉も骨も  
現実の凄惨を掩って？  
俺の存在した事実ごとすべて  
知っていた  
吹き出す血の雫  
目に移る物のすべてがすでに  
ことごとくさえをも  
わたしにやさしい  
かくて斗璃摩娑  
嘘をついた  
爾に  
せめてもの嘘を  
都舞耶氣良玖  
喰う。  
のたうつ肉が。  
肉が喰う。  
肉を。  
貪れ。  
もはや。  
貪れ。  
喰う。  
のたうつ骨が。  
骨が喰う。  
骨を。  
貪れ。  
もはや。  
貪れ。  
喰う。  
のたうつ血が。  
血がすゝる。  
血を。  
酉淨の血を。  
彼の骨を。  
彼の肉を。  
その肉をすべて苦痛にだけに噎せ返らせて。

その骨をすべて苦痛にだけに噎せ返らせて。  
その血をすべて苦痛にだけに噎せ返らせて。  
かくて笑ヘル多伽牟羅ひとり娑婆彌氣囉玖  
飛び散る血を  
見上げれば  
血を隠す  
あまりにも  
雪は  
あまりにも深い  
雪を紅に穢したそれを  
深い白濁  
血を隠す  
どこまでも  
雪は  
鈍く  
飛び散る肉を  
鈍くも淡く  
肉を隠す  
淡くも限りなく  
花は  
啼き臥したくなる  
花を紅に穢したそれを  
目を覆いたくなる  
肉を隠す  
ひたすらな白濁  
花は  
空に  
舞う  
雪  
花は今  
雪の  
舞う  
空に  
雪と共に  
花  
雪舞う中に  
花の舞う  
花舞う中に  
かくて多伽牟羅  
空に



爾に都舞耶氣良玖

見ていた。

狂氣した獣を。

もはや獣でさえない化け物を。

もはや化け物でさえないイノチの殘骸を。

開かれた無数の口。

肉のわなゝき、わなゝく肉の皮の裂けめに開かれた無数の口ら。

それらの貪るまにまに聲もなく開き裂けて切れるのを。

見た。

狂氣したイノチを。

貪るしかなく聲もなく吐く息使いに白む息をまき散らすイノチを。

哀しいの？

わたしは笑った。

痛いの？

心が。

その躬づから裂ける肉體さえも？

顯らかに貪る血まみれのイノチは歡喜した。

貪る肉に。

貪られる肉にも？

だからイノチは歡喜していた。

かくテ智豆囉古ひとり爾に歡喜せり所以者何すデにして智豆囉古こころに登喇摩娑の息  
吹キを感じたるが故なりキ故レ爾に多智牟羅と俱なりテ娑娑彌氣囉玖

聲もなく

もっと醜く

聲さえもなく

目を覆うばかりに

さゝやいたあなたの聲を聞いた

もっと醜く

耳の近くに

所詮醜くしかあり得なかった

ふれあうばかりの

あなたの最上の美しい時

耳の近くに

かがやく時

その

光差す時

わたしは痛む、と

その時でさえも

聲もなく

匂いある

聲さえもなく  
温度在る  
さゝやいたあなたの聲を聞いた  
分泌し  
耳の近くに  
排泄し  
ふれあうばかりの  
貪る息ものの  
耳の近くに  
そのすさまじい醜さを  
その  
もっと醜く  
わたしは渴く、と  
もっと穢く  
聲もなく  
むしろさらして仕舞えばよかった  
聲さえもなく  
日の光の下  
さゝやいたあなたの聲を聞いた  
赤裸々なまでに  
耳の近くに  
雪の下にも  
ふれあうばかりの  
雪の上にも  
耳の近くに  
たゞひたすらに  
その  
ただ無慚なだけ  
わたしは餓える、と  
その醜さに  
今たゞ悲しみそのものとなって燃え上がる  
わたしは自分で噎せ返りながら  
あなたの心の  
わたしは狂った夢をあざ笑う  
あるいはその存在の痛ましさに  
わたしの見い出す  
わたしの心は共に感じた  
狂った夢を  
あなたの心の  
かくて罇豆囉古

その痛ましさをこそ  
爾に都舞耶氣良玖

ふるえた。

かさなりあった心は。

こゝにふるえた。

わずかにふれあうことさえもなく。

わたしたちは。

ひたすら震えた。

かくてすでに蚊頭囉岐ノ且つは加我ノ且つハ古布ノ斗璃伎與爾に蚊頭囉岐ノ且つハ加我ノ且つは古布ノ斗璃摩娑が開きたる無数の口に喰ひ畢てたりき故レ蚊頭囉岐ノ且つは加我ノ且つは古布ノ斗璃摩娑爾に蚊頭囉岐ノ且つハ加我ノ且つは古布ノ斗璃伎與が肉をも骨ヲも腫瘍をモ無数の口に喰ひ畢てテ故レ斗璃摩娑ひとりその肉ヲ肥大さスその骨を肥大さスその血と瀧ミを泡立て散らす且つハ斗璃摩娑ひとりその肉ヲ膨張さスその骨を膨張さスその血ト瀧ミを沸騰シ散らす斗璃摩娑ひとりその肉ヲ爛れさスその骨を爛れさすその血と瀧ミを腐らし散らすかくて已に登喇摩娑もハや心に憩ふことなく且つハ心に安らぐことなく且つハ心に歡ぶことなく且つハ心に樂シむことなくテ故レその肉ヲ崩れさせその骨を碎かせその血をしたたせたるに死に懸けのイノチの生きるイノチの息吹きを貪り噎せ返りたれば爾に陀伽牟羅ひとり笑みテ娑豆囉古と俱なりテひとり娑娑彌氣囉玖

微笑んで

知っている

狂った人

愛という想いのその凄惨を

人でさえない

知っている

狂った幻

愛という想いのその無慚を

微笑んで

たゞ容赦もなく

なにを悼むことがあった？

愛はひたすら壊すのだった

もはや

たゞ心に

なにを哀しむことがあった？

心に巢食って

もはや

肉軀に

なにを歎くことがあった？

肉體に生まれ

最初からすでに

生まれたときから肉体を  
あなたが夢みた人でさえなかった  
肉軀を己に裏切って  
あなたが幻見た人でさえなかった  
肉體を己に辱め  
ただ無慚でむごたらしい死に懸けの肉  
肉体をすでに屠り去り  
醜い肉の  
愛は終にひたすらに  
肉の吐く息  
精神に巢食う  
微笑んで  
精神に共喰らう  
狂ったイノチ  
救いなど  
微笑んで  
愛に救いなど有る筈はなかった  
イノチでさえない  
そのありうべきかたちさえ  
無様な残骸  
その正当なかたちさえなく  
あなたもはや  
それはひたすら  
かくて多香牟良  
もはやそれ以外に  
爾に都舞耶氣良玖  
さゝやく。  
耳元に。  
耳元と仮定されたその引き裂かれた口。  
口の生やした無数の齒に拓いた無数の口の孔の中に。  
さゝやく。  
耳などもはや存在しない無数の孔のひとつの孔に。  
あなたは誰？  
と。  
さゝやけばあなたは答える。  
忘れたと。  
なぜ？  
あなたはもともと人でさえない。  
あなたの思った人でさえない。  
あなたはもともとイノチでさえない。

あなたの描いたイノチでさえない。  
あなたはただの狂氣だから。  
だからすでにその名前さえあなたは忘れ仕舞った。  
あなたは誰？  
と。  
わたしはさゝやく。  
あなたのかわりにわたしはさゝやく。  
耳元に。  
耳も眼もないあなたのかわりに。  
目も鼻もないあなたのかわりに。  
花も口も無いあなたのかわりに。  
わたしは畸形と。  
ことごくのイノチの群れが。  
その悉くが畸形にすぎなかったように。  
私は狂氣と。  
ことごくのイノチの群れが。  
その悉くが狂氣にすぎなかったように。  
私は多賀牟羅と。  
あなたにわたしの名前をあげた。  
まさにあなたはあなたとしてその限りも無く美しい固有のイノチを貪るのだから。  
他人の名前をあなたにあげる。  
まさにあなたのイノチの固有はかけがえも無い。  
わたしの名前に鬩ってあげる。  
死に懸けて未だ死にきれない儘の長い長い最後の須臾のイノチの中に。

蚊頭囉岐破第四

啞ン癡 anti 鳴瑠我貳翠夢 organism II

2021・01・14 黎マ



蚊頭羅岐





## 蚊頭囉岐

炎は上がり、揺らめき、臭気をはなつて燃え墜ちる肉と肌とのうちにも爾に斗璃摩沙そのさわざたつ意識ら乃至言葉らの群れとぎれもせずて故レそのひとつ彌冴えたる儘に幾度目かにも見いだしたるはその雪。

——これなに？

さゝやいた。

わたしは。

聲もなく。

室内のあたゝかさの中に。

氣づく。…問いに？

わたしの。

だから珠美はなぜた。

腕に抱きあげた二歳の幼児の頬。

——はじめて？

さゝやき、

——…だよね。

と。

窓の向こうに色彩は散った。

真っ白のそれら。

舞う。

ことごとくにも。

真っ白のそれら——由伎。

と。

隙もなくにも。

冴える色。

埋め尽くすにも。

珠美はさゝやいた。

ひとり言散たようにも。

雪、と。

蚊頭囉岐第五

啞ン癡 anti 汚瑠我貳翠夢 organism II

2021・01・09 黎マ



## 雪舞散

かく聞きゝ爾時比登らすでに滅びき且つは獸らことごとくに滅びき且つは鳥らことごとくに滅びき且つは樹木らことごとくに滅びき滅び且つは海だにただ鹽の水の湛えてとよみき爾にことごとくのイノチは畢てき但し迦豆囉岐ノ斗璃麻紗は除く故レ斗璃麻紗爾にその死に懸け死に懸け続ける儘ひとり幾度目かにも須臾の失神から目覺めたれば厥レ已に濃みて吹き出す瀧みに且つは濃みて垂れ流す瀧みに且つは濃みてしたたり落る瀧みにつぶれたる目のひとつにその周囲を見れば娑娑彌氣囉玖

とよむ

滅びた

風は

樹木も

もはやただ風だにも

草も

そのとよむ音さえ聞かす耳も無く

花も

とよむ

だから蝶さえ

海は

あるいは蜂さえ

もはや海だにも

蛾さえもすでに

そのとよむ音さえ聞かす耳も無く

すでに

かくて斗璃伎與

滅びた

爾に

ことごとくの殲滅

都儂耶氣良玖

見晴るかす視野のすべてを掩う鉞物

沙と磬

磬と雨

燃え滾る雨

海は今瑪瑙の色に波を打ち  
打つ波の雫  
そのみが白い飛沫と散った  
干上がった  
生き物の垂らした血の色さえも  
朽ちはてた  
刈れたその樹の  
枝の欠片  
そのいろさえも  
かたちもすべて  
もはや消え失せ  
風が鳴った  
瑪瑙の色の空の下に  
流れる雲が青みて淀む  
海が荒れた  
そのうちに  
魚の腐った肉さえもすでに  
漂う微生物  
その死んだ細胞のむれさえすでに  
消え失せさせて  
すべてのイノチの束の間の生息の絶えたあとに  
海は砂と磐にだけふれ  
波はざわめく  
かくて斗璃麻紗さらに幾度めかにも失神しさらに幾度目かにもその失神を失ひて目覺め  
たるうちに娑娑彌氣囉玖  
いつだろう？  
死に懸ける  
死に絶えたのは  
イノチのつきかけの  
すべてのイノチが  
斷末魔の中に  
そのざわめきが  
わたしはひとりで息遣う  
あるいは元のかたちを取り戻した  
死に懸けた  
無機物の海は  
最後のいくつかの  
無機物の空は  
吐く息の内に  
無機物の陸

吸う息の内に  
その鉱物はだから  
わたしは最後の数秒をかさね  
ただその裸形をだけをさらした  
死に失せるまえの  
かくて斗璃伎與  
その須臾を  
爾に都舞耶氣良玖  
滅びた總ての生き物はもはやその名残をさえ残さない  
滅びた總ての營みはもはや風化されるかけらさえ残さず  
もとから存在などしなかったように  
はじめからなにもはじまりなどしなかったように  
かくて斗璃摩娑死に懸けて死に近づきながらも未だ死に至り切りもせぬ最後の時の中に  
娑娑彌氣囉玖  
與えよ  
雨が降る  
聲を  
燃えあがるが如き温度に噎せた  
故に喉を  
その雨が  
唇を  
雨が降る  
齒嚙みする爲にのみ齒を  
鑛物の群れに湯氣する雨が  
顎を  
瑪瑙の海を  
口蓋を  
騒がせる雨が  
與えよ  
誰の爲でも  
泣き叫ぶ爲に  
何の爲でもなかった  
わたしがひとり  
雨が  
泣き叫ぶ爲に  
見晴るかす  
わたしひとりが  
眼差しの見た  
猶も泣き叫ぶ爲に  
風景の中に

かくて斗璃麻紗爾に

そのことごとくにも

躬づからが濃みのうちに都儂耶氣良玖

それでもなおも？

生きて在るのは事實だった。

生まれたときから死に懸けながら

つねに

生まれたときから滅び懸けながら

つねに

それでもなおも？

なぜ？

なぜ生まれて仕舞ったのか？

なぜ？

なぜ生まれて在って仕舞ったのか？

なぜ？

問う 自躰の狂氣さえもがすでに滅びて

故レひとり雨に湯気する肉の腫瘍爾にひとり娑娑彌氣囉玖

目さえあれば

綺羅らと

せめて

雨は

ひとつの眼さえ

沙羅らと

目さえあれば涙するものを

雨は

その滂沱の涙を

騰乎をと

口さえあれば

海は

せめて

許乎をと

ひとつの口さえ

海は

喉さえあれば叫ぶものを

意意意斗燃え立つ

喉さえあれば叫くものを

大氣は

喉さえあれば喚き散らすものを

荒れて在る

その哀しみの聲を

すべては  
その最期の聲を  
美しいと？  
瞋りの聲を  
それでも猶も  
忿怒の叫びを  
これをも敢えてまさに  
ただ慟哭を  
美しいと？  
その慟哭を  
音取蚊頭囉岐第六  
前半了

啞ン癡 anti 鳴瑠我貳翠夢 organism II

以上は宇治拾遺瘤取翁語を典拠とし萬葉  
卷十六葛城王宴譚及續兒譚を主題とする

2021・01・14 黎マ



## 奥書

以上は黎マに依って 2020.01.04-02.04. に書かれたものの前半その一

ホームページ

<https://senolema.amebaownd.com/>





---

蚊頭羅岐ー2

---

著 黎マ

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---